
マコと一葉の剣 グラス・オニオン

小倉 慎平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マコと一葉の剣 グラス・オニオン

【Nコード】

N7922Z

【作者名】

小倉 慎平

【あらすじ】

十二才の少年マコルデイス・クイーデル王子（通称マコ）はクイーダーターと共に国を追放された。サンガルド王国で王の側近だったアルミゲウ・ギース（アル）それに新たに加わった旅の仲間であるリーアムス・ベルドラド（リア）とクローネンバーク・ユイソナー（クロネ）と共にシエラの街に行き着いた。

その街で人々は古の魔女の脅威に怯え、どこからともなく現れたヴァイオレーターと呼ばれる怪物の来襲に怯えていた。それに加え、

ヴァイオレーター退治と称して街で好き放題する魔導士軍団に街は不安と不満を抱えている。

マコたちは街を支配するこれらの脅威から解放しようと立ち上がるが、やがて影が恐ろしい陰謀を繋ごうとしていた……

旅の仲間と一葉の剣

巨漢の男が狭く薄暗い路地を駆け抜けて行く。

男は建物の裏手に積み上げられた木箱や樽を、その巨大な体とは裏腹に、巧みに避けて走った。途中でいくつかをなぎ倒したが、それは追手を妨害するためだった。

一方、男を追う警官隊は額に汗の玉を浮き立たせながら、進行方向上にある障害物をたどたどしく乗り越えた。

男は黒いボロきれのようなローブのフードを頭からすっぽり被り、全力で走っているにも関わらず、汗一つかいていない。それどころかフードの下からは唇がにとり吊り上がり、男がニヤついている事がわかる。

余裕すら見せている。

男は四件の殺人を犯していた。一件目は三人、二件目はふたり、そして三件目と四件目はそれぞれひとりずつ。生意気な態度を取ったヤツらに思い知らせてやったのだ。彼を相手に自分たちがどれだけ無力かという事を。そして無能な警察から逃げ切る事は、男にとっては簡単な事だった。

「逃げてでも無駄だ！ 追いつめられるだけだぞ」

うしろからひとりが叫んだが、男の口もとを余計に吊り上がらせてただけだった。

狭い路地をしばらく走ると、光とともにざわめきと熱気が漏れ出す通りにさしかかった。路地を抜け出し出店の建ち並ぶ大きな通りに入る。

にぎわう客たちでつくられた群れの間を、男は無理やり掻き分けながら進んだ。客たちはうしろからいきなり押されたり、体をねじこまれたりして、驚きの声をあげた。また、罵声も聞こえた。

絶対に捕まるものか。大衆を掻き分けながら男はニタニタ笑って

思った。能のない警官屋どもに、この大魔術師であるジゴラさまが捕まるわけではないのだ。

決して。

十二才の少年マコルデイス・クイーデル——ふだんはマコと呼ばれていた——は人ごみにぎわう市場を歩いていた。きらきらと輝く目が市場中のあちらこちらへ行ったり来たりを繰り返している。ずっと旅をしてきた彼にとってこんなに大きな街は久しぶりの事であつたし、にぎわう人々の群れもまた懐かしみのあるものだった。

「しかし、まあ、これだけ大きな街だと、こうもにぎわうものなんだな」

アルミゲウ・ギースは幼いマコにくらべるとやたらと背が高かった。一九才という年齢を考えると、成長期を過ぎた体はもう大人としてできあがっており、ふたりの身長差はあつて然るべきだったが、それをふまえたとしても、アルの身長は高かった。

アルは金色の長髪の持ち主だった。よく天使の毛のようだと言いつた表されてきたし、女の子が思わず振り返ってしまうほど整った綺麗な顔立ちをしていた。瞳の色はハシバミ。腰にはベニヤの板を何重にもしてかたどったような短剣を差している。短剣とはいえ木製であるため、刃もなく、切ることはできない代物だった。

対するマコは赤みがかつた茶色の髪にグリーンの瞳。背中には自分の背丈と同じ大きさの大剣を背負っていた。

「うん、そうだね。でも、ずっと旅して来て初めてわかったけど、ぼくらの街ってほんとうに大きなところだったんだね」どこか寂しげで悲しみに満ちたマコの声。旅立った故郷の事を思っている。

「そうだな。いまはもう戻れないが、いや、いつか必ず戻ってみせるさ」

アルはマコの頭をぽんと叩いてやった。これはアルがマコを元気づける時にやるしぐさで、これをやられると彼はいつも勇気を奮い起こされるのだった。

そういった信頼関係がふたりの間には築かれているし、アルは必要ならば身をていしてでもマコを守る心づもりでいる。マコはそれを知っているし、だからこそアルを完全に信頼してその身を預けている。

「なんなのよ、ふたりしてしんみりしちゃって」一緒にいたリアが不満そうな声を漏らした。「せっかくの市場なんだから、もっと明るくいこうよね。ホラ、ああおいしそうな匂いもする！」

リアの本名はリーアムス・ベルドラドといった。ふたりが彼女と出会ったのはついこの間の出来事で、この家出少女はふたりが断ったにも関わらず勝手に着いて来てしまった。出会いは決して深い意味のあるものではなかったが、こうして彼女はマコたちの仲間としていまでは深い関係にある。

そしてもうひとり、旅の仲間がいた。マコよりもふたつ年上のお姉さんで、クローネンバーク・ユイソナー。仲間からはクロネと呼ばれていた。髪の色は黒く艶やかで、前髪は眉の上でまっすぐに切りそろえられており、うしろ髪は膝裏の間接部分にまで届いていた。目は少し赤みがかかった濃い紫色をしており、その瞳の中心部から外に放射線状の模様があった。彼女の瞳はすべてを飲み込もうとしているように、引きつけるような力があった。

マコ、アル、リア、クロネの四人は北に向かって旅を続けており、街を通り抜けるついでに市場の観光をしていた。

たのしい見学になるはずだったが、いつもトラブルを呼ぶ四人のことだ、そのトラブルがまっすぐ彼らの前方からこちらに向かって来ていた。まるで磁力に引き寄せられるかのように。

その気配をいち早く察知したのがクロネだった。細い人差し指をまっすぐ前に向け、首だけをマコに向けて言った。「なにかしら。あちらから騒がしいのが来るけど」

マコはクロネに合わせて立ち止り、彼女が指差す方向を凝視した。「ホントだ。なんだろう」

マコは首を傾げて考えた。遠くで群衆がざわついている。そのざ

わつきがだんだんとこちらに近づいているのがわかった。

「お祭り騒ぎってわけでもなさそうだな。ん？　なんだかうしろも騒がしいぞ」

アルの言った通り、うしろからもなにかの騒ぎが聞こえる。「どいてください」などと叫び声が聞こえた。

前方からもやはり声が聞こえた。なにかを追っているのだろうか。「待て」やら「逃げられんぞ」などの叫んでいるようだ。どれも怒まじりの声だった。

始めのうちはなにが起こっているのかマコにもわからなかったが、だんだんとその正体がつかめてきた。

前方からみすばらしい格好をした男が人ごみをかきわけて出てきたのだ。そのうしろからはその男を追う警官たち。どうやら、人ごみの中で捕り物劇が行われているらしい。

ぼろぼろのローブを全身に被った男は、進行方向からも追っ手が来ているとわかると、立ち止まってどちらに進もうか迷いだした。だが決して男は焦ってなどいなかった。それどころか楽しんでさえいるようにマコには見えた。

それがあまり良い兆候だとは思えない。

そのうちに追っ手が前後から近づいてきた。

警官の必至の形相から、この男が殺人を犯したのではないかとマコは懸念した。実際、男の目からは人を平気殺せる人間特有の氷のような冷たさを放っていた。

「さあ、もう観念するんだ」警官隊はジゴラをとり囲むと、拳銃を向けた。

そう言われても諦める男ではない。彼はすぐ近くにいたマコに目をとめると、マコの腕をぐいと引っ張って、一瞬のちに捕らえてしまった。男の左腕がマコをがっちりつかまえ、右手はマコの頭に向けられている。密着した男の体から汗と尿の入り混じったような悪臭がマコの鼻を刺激した。

「おめえら、身を引かねえと、このガキの頭が吹っ飛ぶぜ」

自称大魔術師ジゴラが脅しをかけると、警官たちがひるんだ。彼に向けられた手はぼんやりと光っており、その道に精通していない一般の人間からも、男が魔法を使おうとしていることがわかる。そして男の言う言葉が真実だということも。

アルたちは余裕の表情で突っ立ったまま動じていない。どうやら助けてくれる気はなさそうだ。自分でやれということか。どのみち、骨の折れる仕事じゃないさ。

「ハッターじゃねえぜ。さあ、道を開けろ。こいつの頭が吹き飛ぶまえに！」

ジゴラが命令をするが、どうしても警官隊たちはいつを逃がす気はないらしい。この男がしでかしたのはそれほど重要な罪なのだろうか。マコにとってはどうでもいいことだったが。とにかく男はやく自分を解放してくれないかと願った。なにしろこの男は臭いのだ。

「落ち着け、おまえは私欲のために大勢殺した。また罪を重ねる必要もあるまい」

男を追って来た警官隊のなかでも老年の男が辛抱強い声で言った。威厳のつもりか、鼻の下にはちよびひげを生やしている。

「ちっ、状況がわかってねえようだな」ジゴラがぼそりとつぶやいた。

それを聞いてアルがジゴラのまえに歩み出した。

「なんだ、てめえは？」ジゴラは相変わらず、すごみの効いた声で暴言のように吐き捨てた。

「その子を放したほうが身のためだと思うがね」アルはたしなめるように言った。

「なんだとお？」ジゴラは不服そうになった。「おい。こら、ぼうず。俺様はなあ、魔術の天才なんだよ。自慢じゃあないが、この魔術で何人も殺してきた。このガキの頭を吹き飛ばすぐらい、わけねえんだよ」

そんなもの、自慢でもなんでもないじゃないか。ジゴラの腕のな

かでマコは思った。人を殺した事を自慢できる人間なんて、きっと神経をすりきらせてしまっているにちがいない。

「あまり犯人を刺激しないでください」

警官隊のひとりがアルに注意した。丸眼鏡をかけていて、どこことなく頼りなさそうだ。素の表情なのだろうが、困り顔に見えた。実際にアルの行動には困っていたのだらうけど。

「そうゆうこった。おい。あんたらも道をあけないと俺様を刺激することになるぜ、警官屋さんたちよ。その刺激で爆発しちまうかもしれねえ。そうしたら、このガキの首はあるべきところにや、もうくつついてねえぜ」

その言葉に警官隊たちは動揺し、うしろにさがった。

「やれやれ、忠告はしておいたからな」言いながら、アルもさがった。

ちらりとアルに目をやったのだが、彼は薄ら笑いすら浮かべているように見えた。どうやらこの状況を楽しんでいるようだ。

などと考えていると、なにかが背中中の剣に触れる感触がした。

「なんだか知らねえが大切そうにしてるじゃねえか。見たところ剣のようだが、上物じゃあないのか？」

どうやらこの魔術師の男がマコの大切な剣に手を触れたらしい。

他人に大切な剣を触られたことで、マコはむっとした。

「そんな汚い手で触らないでよ」この男の臭くて汚い手が触れるのはたまらなく嫌だった。

マコの言葉を聞くと、ジゴラは不機嫌そうな顔をし、その顔が怒りに揺れた。

「ガキのくせにこのジゴラ様に命令しようってのか。もう勘弁ならねえ。殺してやるわ！」

ふたたびジゴラが右手をマコに向けると、てのひら付近の空気が揺れ、赤く光った。熱も帯びている。

「さて、止めるんだ、ジゴラ！」ちょびひげの警官が叫んだ。

「無駄い。思い知らせてやる！」

ジゴラがマコの顔に向かって炎を放とうとすると同時に、マコも行動に出た。素早くジゴラの手に分自分の手を向けると、彼も魔法を放ったのだ。

火を消すなら水をかけてやればいい。

とは口で簡単に言えるものの、魔法でもってそれを実行するのは至難の業だ。なにせ空気中にある魔法の素である元素を魔法の実体であるエレメントに変えるのには多少の時間を要するからだ。だがマコはそれをいとも簡単にやってのけてしまった。

マコの水のエレメントがジゴラの炎のエレメントを飲みこみ、最初からそこになにもなかったかのように消し去ってしまったのだ。

「僕だって魔法は使えるんだ。『ガキ』だからってあまくみたのが間違いだっただね」

マコはジゴラの胸に手を当てると、炎のエレメントを発生させた。炎が燃え上がり、ジゴラは飛び退いた。

ジゴラは胸を両手で叩きながら、燃え移った炎を消した。

炎が消えると、ジゴラはマコを睨みつけた。

「だから何だってんだ？　ちょっと魔法ができるからって調子に乗りやがって。あまり大人をなめるなよ！」ジゴラは肩で息をしながら怒鳴った。「こうなったら、この市場ごと消し去ってやるわ！」

ジゴラは両手をまえに突き出すと、そこから風のエレメントが発生し、ぐるぐると渦まいた。エレメントはどんどん大きくなり、渦まき風は竜巻となりその竜巻がさらに成長を遂げようとしている。

「マコ、やばいぞ！」うしろでアルが叫んだ。

マコは背中 of 剣を取り外した。

鞘は右側面から空洞になっており、柄を握って横に倒せば、簡単に取り外すことができた。

マコは剣で成長途中の大きな竜巻を斬った。

剣が一瞬の輝きを放ったかと思うと、竜巻は消滅してしまった。それを見守っていた群衆は息を呑んでいた。マコの迅速かつ相手を上回る技術よりも、彼らはマコの手に行っている剣の美しさに魅入

られていた。

剣の刀身と柄の間には鏢がなく、奇妙な形をつくっていた。柄は銀色で、ライフル銃の銃床のような形をしている。刀身は光沢を放つ濃緑色で、木の葉をまんなかで二つ折りにしたような形だ。桜の葉のふちのように刃の部分が細かなギザギザになっている。この刀身と柄が大剣を一枚の葉のように見せていた。

ゆえにこの剣は一葉の剣と呼ばれている。

ジゴラは怒りにまかせて右手を振り上げ、もういちど炎のエレメントをつくってそれをマコにぶつけようとした。

だが、マコのほうが行動は早かった。

一葉の剣を軽く振ると風が発生し、ジゴラを押し倒してしまったのだ。

マコはジゴラに近づき、顔面近くの地面に剣を突き立てた。刃が触れてもいないのに、ジゴラの頬は切れた。傷は深くないが、出血があったし、男をおどすには十分だった。

「ほんとうなら、首が落とされているところだったね」マコは笑顔になってジゴラにそっとつぶやいた。

それで十分だった。男の戦意を失わせるには。

マコは満足そうにうなずくと、剣を逆手で持って切っ先を鞘に突っ込むと、それを柄を上押し上げることによって剣全体を鞘に納めた。

「ご協力ありがとうございます」警官のひとりが言った。この警官は顎の下に小さな切り傷があった。小さいときに転んで怪我したもので、決して喧嘩や逮捕劇での格闘の末にできた怪我ではなかった。彼は体格こそ良いものの、暴力を極端に嫌っていた。

「うん、大丈夫。自分を守っただけだから」

それが当然とでもいうように、ジゴラを倒してしまった少年の態度は素っ気なかった。

「なにが身を守っただけよ」少年と一緒にいた赤毛の少女が苛立たしげに言った。髪型はショートヘアで、半袖シャツにつなぎの短パ

ンという少年のような格好をしている。その少女がマコの頭頂部に拳を落とした。「巻きこまれるかと思ったじゃない」

「痛いよう。リア」マコは殴られた箇所をしきりにさすった。

「あら、マコなら大丈夫よ。絶対に他人を巻き添えにしないわ。わたくしは信じていましたもの」クロネが横から出て来て、マコの頭を確認した。「まあ、ひどい。こぶになっているじゃない」

「うん。ぼくは大丈夫だよ。それよりもさっきの竜巻の被害は？」

マコはクロネの手を振り払いながら言った。

「マコが一瞬で消し去ってくれたから、皆無さ。唯一の被害と言えば、一葉の剣で切られた男の頬くらいかな」

アルは警官たちによって両脇をがっちりつかまっているジゴラを見た。一瞬、目が合ったが、すぐに逸らされてしまった。まあここで、魔法による悪あがきをする気はなさそうだ。

「さてと、旅の再開だ」アルは言った。

一同はうなずくと、アルを先頭にもともと向かっていた方向に歩き出した。

「あ、ちよつと。なにかお礼を――」

警官の申し出も聞こえないように、マコたちは歩む足を止めなかった。警官たちはその背中を呆然と見ていた。

「彼らはいったい何者なんだろう？」

顎に傷のある警官が言った。隣にいた警官は、さあ、と首を傾げた。

クロネがコケた。

足をもつれさせ、前方に豪快に倒れたのだ。両手を突き出したその姿は空を飛んでいるかのようにだった。実際、地面に顎を撃ちつけた衝撃で意識が一瞬だけぶっ飛んでいたが。

「いったああい！」クロネは泣き叫びながら立ち上がった。「何なのこの道は。デコボコしすぎよ」

黒いワンピースドレスの長いスカートの裾をはたく。

「あんたって良く転ぶわね。本当に歩くのが下手くそ。何度転べば気が済むのよ？」リアが呆れて言った。

本日八回目である。それはクロネも良く心得ていた。何回転べば自分の気が済むのかは知らなかったが。

「う、うるさいわね。何回転んだってわたくしのかかか、勝手よ。口を滑らせっぱなしのあなたに言われたくないわね」

クロネの言った『何回転んだって』のくだりは良くわからないが、リアが口を滑らせっぱなしだということにはアルも納得した。言わなくても良いことばかり言ってしまう、そのせいでトラブルを起こすことが多かったのだ。

「ああら。そんなに饒舌なのがうらやましいのかしら。この場合、上舌と言うべきかしらね。あなたの口は喉を詰まらせた老人のような言葉しか出せないものね。オホホホ」と下品に気品高くリアは笑ってみせた。

クロネは顔を真っ赤にして震えている。言いかえしてやりたいが言葉が思いつかないといった感じだ。

「あ、あなたは、じゅんか——そうよ！　あなたは潤滑油を塗りたくってるのよ！」

やっと出て来た言葉がこれだ。リアはぽかんとしている。まったく効き目なし。

言いたいことはわかるぞ。うしろでアルがうなずいた。潤滑油を塗ったように言葉が滑り出てくるのだと、君は言いたいのだろう。だがそれは逆に褒め言葉になっているのではなからうか。

その台詞に満足したのか、クロネはどうだと言わんばかりの目線をリアに送っている。

「そんなんじゃ、わからないわよ。ホレ、言いたいことがあるのなら、わかり易く伝わり易く言ってごらんなさい」

リアは頭を少し上に傾いで、目線だけでクロネを見くだして言った。

「うう……それじゃあ……ええっと……」

効果がなかったことを知ると、クロネは次に何かびしっとした言葉を決めてやろうと躍起になった。だが、いくら頭をフル回転させようと、ついに言葉は見つからなかった。どうやら彼女の例文辞書は落丁だらけらしい。ついにクロネはマコに泣きついた。

「何とか言ってみてよ！」

よしよし、と頭をなでるマコを見ているとどっちが年上だかわからなくなる。たしかクロネの方がふたつ上だったよな、とアルは思いついて出していた。

「リアもいつも言葉が多いんだよ。少しは気をつけてよね。これはいつも思っていることだけど」マコは言った。「あとクロネもリアがああなのは知ってるんだから、少しは聞き流すことを覚えなさい」「聞き流すってのは聞き捨てならないわね」とリアは言ったが、少しクロネで遊びすぎたと、この辺にしてやることにした。

クロネもマコに言われたのなら、と仕方なくリアの事は忘れようとした。

言い合いが治まると、四人はふたたび歩き出した。いつものようにおぼつかない足取りで、クロネは後方に少し離された。

そして本日九回目となる転倒を果たした。

夜には彼らは崖の淵にいた。さきほどの街を出てずっと進み、小さな林の細い道を辿ったら、崖に行き止まったというわけだ。しかもそこは船の先端のように突き出っていて、狭い。日も暮れて戻る事もできず、仕方がないので四人はここで野営することに決めた。

焚き火が四人の顔を薄いオレンジに照らし、ちらちらと影を躍らせている。マコの隣にはクロネが寄り添い、火をはさんで向こう側にアルとリアがちょっと離れて座っていた。

「あーあ。いつも野宿ばかり。たまにはふかふかベッドで寝たいわ」リアは不服そうに言った。「市場ぐらいゆっくり見たかったのに、すぐに街を出るし。観光ぐらいしてもよかったんじゃない？」

「仕方がないだろう、あんな騒ぎのあとじゃあ。それに金がないん

だから、物も買えないし」アルが諭すように言った。

「アンタたち、本当に王族なの？ まったくの貧乏じゃない」

「王族なのはマコだけさ。おれは付き人みたいなものだった。それに言っただろう、おれたちは追放されたんだって」

「はいはい。敵に王国を乗っ取られたんでしょ。それだって、あやしいわねえ」

リアは目を細めてアルを見た。

「あなたって、ホント、世界の情報に疎いのね」とクロネ。「一ヶ月前にサンガルド王国でクーデターがあり、王子が追放された。それって、絶対にマコのことじゃないのよ」

それを聞いてリアが首を横に振った。

「ふたりが本当のことを言っているとは限らないわよ」

「あら、一緒に旅をしてきてふたりが信じられないっていうわけね、あなたは」

「そうわ言ってないわよ、ただわからないって言ってるだけ」

「そう言ってるように聞こえる」

クロネが目を細め、リアを睨むようにして見つめた。

「オツケー、わかったわよ」とリア。「アタシだって本気で疑ってるわけじゃないわよ。それで、追放された王子さまはこれからどこへ向かおうというわけ？」

「それはわたくしも知りたいわ」クロネが同調した。「いままではただなんとなく着いて来ただけだもの。これからは目的を持って行動したいわ」

「ここかずっと北へ向かってある人物に会おうと思ってるのさ」アルが答えた。「きっと協力者になってくれるはずだ。再び俺たちの手に国を取り戻したい」

「なるほど、じゃあ仲間を集めて国を乗っ取った敵をやっつけるってわけね」

リアの言葉にマコは苦笑いになった。

「説得するに決まってるわ！」クロネが声をあげた。

「なんで、敵を説得しなきゃいけないのよ！」リアが言った。

「それはクーデターの首謀者がマコのお母さんだからじゃない」クロネは声を落として言ったが、その声は十分マコにもアルにも届いていた。

「うん、倒すよ」それを聞いていたマコがきつぱりと言った。「説得できる相手なら、もうとっくに父さんがしていたはずだ」

マコの父親であるモーガンは国王として、なにより彼女の旦那としてマコの母親を説得しようとした。だがこのクーデターは最初から周到に用意されたものであり、彼女がマコの父親に近づいた時にはすでに計画は始まっていた。そして彼女はマコを生んだ。その出産が計画的なものだったかどうかはわからないが、国王殺害は彼女の計画のリストに載っており、見事に実行されたというわけだ。

さらにマコには兄がいた。ルーカス・クイーデル。ルーカスは母親であるサーラに引きこまれ、一緒に国取りを行った。彼はマコを処刑する事を考えていた。兄は弟の才能に嫉妬していたのだ。しかし母親のサーラはそれに反対し、マコを国から追放した。

それが情けなのか母親としての情なのかはアルには計り知れなかったが。

マコの側近であったアルは、混乱の最中、一葉の剣を渡され、追放されたマコのもとへと送られた。こうしてふたりの旅は始まったわけだ。アルに剣を渡し逃がしてくれた老アルテネローは、いつしかマコが帰って来て国を取り戻してくれる期待をその震える唇で口にした。だがその望みが叶うかどうかは、アルでさせ知らない。

しばらくのあいだ孤独の旅がふたりで続いた。いまでは仲間が四人に増えた。楽しい仲間だ。

「だから、この旅はきつと過酷なものになると思う。ふたりとも嫌なら無理に着いてこなくていいよ。別に無理に連れ回しているわけじゃないから」

「わたくしは、マコに命を助けられたもの。あなたの助けになるならなんだってするわ。そのために着いて来たんですもの」クロネが

意思を示した。

「アタシだってアンタたちといたほうが楽しいもんね。それに勝手に着いて来てるのはアタシだし」

ふたりが彼らと共にいる道理はないのだが、それでも一緒にいてくれてマコは嬉しかった。すくなくともこうして話している時はこれからの不安や、過去への悲しみを忘れることができた。

「さてと――」アルはおもむろに這って移動すると、小さな茶色い鞆を手にとった。ここにはなけなしの全財産やら、食料などといった旅の必需品が入れている。その中から小さな木彫りの像を取り出すと、アルは元の位置にもどって来た。

「まあ、毎晩と飽きないわね」リアがなかば呆れ声で言った。

「習慣というやつだよ。それに人は毎日同じ生活の繰り返しの中にいる。それも飽きずにね」

アルが木彫りの像を地面に立てて置くと、焚き火が像に神々しいオレンジ色の影を投げかけた。像はアルが彫った手作りで、世界を創造した女神の姿をしている。この女神の像に向かって毎晩、寝るまえに祈るのが、彼の日課であった。

アルは毎日、この信仰心を絶やしたことはない。

彼は目を閉じ、ゆっくりと祈りの言葉を口にした。

「夜の監視者よ、月の女神よ、母なる神よ。今日という日の御恵みに感謝します。火、水、土、風に宿る精霊神にも同じ感謝と敬意を……そして闇から我らをお守りください。我らに安らかなる眠りのお導きを。そして新たな一日という安全が我らにあらんことを……」

アルに続いて三人も同じように祈りの言葉を口にする。最初は嫌がっていたリアも覚えてきたようで、すらすらと文句を読んだ。クロネはまだぎこちなく、アルの言葉を聞いて、それになんとか追いつこうとしているようだ。

祈りが終わるとアルは女神の像をまた鞆の中にしまった。

「さてと、寝るか」アルはそのままごろんと横になり、倒木に背を

当てて寝た。リアも大きなあくびをひとつして、両腕を頭上いっばいにのばしながら、倒れた。マコは一葉の剣を胸もとにひきよせて、赤子のように眠った。その近くではクロネがマコの寝顔を幸せそうに見つめて満足そうにうなずいた。そしてゆっくりと目を閉じた。

焚火の炎はまるで女神の守護のように、眠りについた旅の四人を守るようにしてそのオレンジ色の光で包みこんでいる。実際、この炎には悪しき気を寄せつけない力があった。

炎はしばらく彼らを見守り、日が昇るにつれてそっと姿を消していった。

ヴァイオレーター

日が十分に昇るころには火も消え、薪はすべて灰と化していた。旅の一行はすっかり目覚め、出発の準備も整っていた。

「いったん引きかえして、昨日の分かれ道で別の道を辿ろう」アルが言った。

「まあ、そっちにしか道はないもんね」とリア。

一葉の剣を鞘のベルトを使って背中に取りつけると、林へと続く道を凝視した。その目は真剣そのものだ。

「どうしたの？」あまりにもマコが林を凝視しているので、心配になったクロネが首を傾げた。

マコは片手をクロネに向けただけで、なにも言わなかった。ただじっと、林のほうを見つめている。彼の耳は奇妙な音を感じ取っていた。軍団が闊歩するような音。地面が震えている。

「なにか来る」マコは言った。

「なにが――」アルは質問の途中で口をつぐんだ。いまやその音はアルにも聞こえていた。音は確実に近づいている。

「なにあれ？」リアが指差した。林を突っ切るまっすぐな道、その木立のあいだの遙か向こうに点が見えた。その物体がこちらに近づいているようだった。しかも目測ではかなり大きい。

「あら、なにかしら？」クロネもそれに気づいたようだ。

「さあな、嫌な予感しかないけどな」アルは額を右手でぴしゃりと叩いた。

「うん……」マコは心ここにあらずといった声を出した。自然と手が剣の柄にのびる。

点は、はっきりと形がわかる程度にまで近づいていた。白銀色の球体が、こちらに向かって転がってきているのがわかる。その球体は太陽の光を反射させ、きらきらとした光をいやらしく放っている。

「あれは……」クロネが両手を口に当てた。

「ヴァイオレーターだな」アルがクロネの言葉を引き継いだ。

ヴァイオレーター——一ヶ月前、どこからともなく現れた怪物の呼び名だ。気性は非常に荒く、凶暴。その数は日を追うごとに多く発見されており、大量に人間を捕食することから世界を滅ぼす存在などと言われている。ヴァイオレーターの出現により、カタストロフィーを唱える者が現れるほどだ。

滅亡の噂などいつの時代でも他にやることがないのかと思うほど、ほぼ毎日持ち出される根拠のない議題だった。

転がってくるヴァイオレーターに目を凝らすと、完全な球体ではなく、帯状のウロコでおおわれていることがわかる。ある世界ではダンゴムシという昆虫に見えただろう。だが、マコたちにはそんなことはわからなかった。ただ球体のヴァイオレーターが転がって来るように見えるだけだ。

「俺に任せろ」アルが前に出た。

「大丈夫なの？」マコが訊いた。

「まあな」彼は腰に差した木製の短剣に手を触れながら前に出た。

「自信がないなら、変わるわよ」うしろからリアがふざけて言ったが、アルはそれを見せず、答える代りに短剣を体の前で立てた。

「樹木は土に宿り、水がそれを育む」アルは唱えると、短剣を地面に突き立てた。すると、その部分から転がりくるヴァイオレーターに向かって地面が割れた。割れ目は蛇のようにうねりながら敵に向かってのび、その先から一本の木の根が生えた。次の瞬間にはたちどころに無数の根が地面から突き出し、みるみるうちに木の壁をつくった。

壁はヴァイオレーターの進行を妨げた。相手がぶつかると、まず壁が震え、つぎに大地が揺れた。

「止まったか？」揺れがおさまると、アルは木の壁を凝視しながら言った。

「静かね。死んじゃったんじゃない？」リアが言った。

「まさか、壁にぶつかっただけで……」アルが答えた。

「ねえ、なんか聞こえない？」クロネが不安そうな顔をアルに向けた。

「これって、まさか——」マコは叫んだ。アルも彼と同じ答えに至ったのだろう。驚愕の顔でうなずいた。

「なんなのよ、これ？」リアが不安になって声を張り上げた。そうしなければいけなかったからだ。さきほどまで小さかった音がいまは耳を聳せんばかりに大きくなっている。なにかがアルのつくった壁の向こうで唸っている。その音は空気を震わし、耳をつんざく勢いだった。

「なにも訊かずに壁の前から離れるんだ」アルがゆっくりと警告した。マコもクロネもおとなしくその指示に従ったが、リアだけは納得がいかないようだった。

「なんでよ？」とリア。

彼女、その理由を聞くまで指示に従うつもりはないんじゃないだろうか。マコは心配になった。その説明をしている時間なんてないのに。時間がないことは音の回転速度でわかる。マコはその音の正体を知っていたし、それが危険極まりない音だということも承知していた。

アルはリアの肩をひつつかむと、マコたちとは反対の方向へと引っ張った。その瞬間にそれは起こった。アルが作り出した木製の壁が膨らみ、そこが熱を帯びて赤く染まった。かと思うとその部分が炸裂し、紫色の禍々しいビームがまっすぐとのびてきた。それは中心にいくほど赤みがかり、外側にいくほど青っぱかった。

「なんなのよ、これ？」リアが驚きの声をあげた。

「ヴァイオレーターの攻撃だ」アルが答えた。「大気中の元素を無理やり振動させて、そうやってできたエネルギーを放出しているんだ」

大気中には火、水、土、風の四つの元素が含まれており、一般的に魔法と呼ばれる奇術は、この元素を用いて行われる。人間がもつ

エーテルというエネルギーを放出し、元素と結合することによりエ
レメントと呼ばれる物質に変化するのだ。火の元素を用いれば、火
のエレメントが生まれ、炎を発生させる。水の元素ならば、水のエ
レメントが生まれて水が発生するといったぐあいだ。それが掟であ
り、法である。しかし、ヴァイオレーターがやってみせたのは、元
素を無理やり拘束、収斂し、振動を起こさせてエネルギーを発生さ
せる攻撃だ。まさにその法や掟を破る行為だ。故に彼らはヴァイオ
レーター（違反者）と呼ばれている。

残った壁ががらりと音を立てて崩れた。もはやヴァイオレータ
ーは球体をしておらず、這いずりまわる甲殻類となっていた。鎧の
先には顔があり、意思なき目が虚ろにどこかを見ることもなく見つ
めている。ヴァイオレーターは彼らを発見するなり、猛スピードで
突進してきた。

「飛び降りるぞ」アルが言った。

この狭い場所では逃げ惑うことも、ましてや突進してくるヴァイ
オレーターの横をうまく通って奥の道へ進むこともできなかった。
そこでアルは飛び降りることを決意し、マコも状況を理解して彼に
向かってうなずいてみせた。

「それしか方法はなさそうね。こんな狭い場所で戦って、どうせ振
り落とされるだけだもん」リアはそう言って崖の淵に向かった。

「え、本気なの？」クロネは当惑した表情を浮かべた。

「ああ、そうだ。できるだけ同時に飛んで、みなで固まって落ちる
ぞ」アルはマコに目を向けた。「あととはわかるな。頼んだぞ、マコ」

三人は同時に飛び降りた。クロネだけが、一瞬ためらったのち、
ちらりとうしろを見やった。すると背後には甲殻類のようなヴァイ
オレーターが無数の足を必死に動かして、こちらに向かっている。
彼女はぞくぞくと身を震わせた。クロネは虫が嫌いだった。とくに
あの細い脚が。

クロネは肚を決めて飛び降りた。

マコルディス・クイードルは顔面に風を受けながら、頭からまっさかさまに落ちていた。下から吹きつける風は強力で、目が痛かったが、彼はしっかりと前を見据え、迫りくる地面を凝視している。崖は結構な高さがあり、地面まではまだほど遠かった。

マコの少し右前方をアルが両手を広げ、その少しうしろをリアが両手をバタつかせながら落下していた。クロネの姿はなかったが、自分よりうしろを確認することができなかった。

とにかくマコは自分の仕事をすることにした。右手を首のうしろにまわし、一葉の剣の柄を握る。それを背中から取り外すと同時に、大きく振りまわしながら剣を体の前に持ってきた。すると緑色の美しい剣がその姿を現した。

少年が剣を地面に向かって一振りすると、突風が生じ、地面とぶつかって砂埃を巻き上げた。その風が上に向かって吹き荒れ、マコたちの体を少しだけ押し上げて落下速度をいくぶんか軽減した。

マコはその衝撃を利用して体を半回転させると、足から着地した。その少し前にアルが片膝をついて着地し、それを追うようにリアが背中から落ちた。彼女は背中中で体を支えたまま上空を見る姿勢になっており、足は顔の上に投げ出されていた。

マコは辺りを見渡し、クロネがいない事を確認すると、上空を見上げた。そこにも彼女の姿はなかった。まだ崖の上にとどまっているのだろうか。ふと、羽を持ったさっきとは別のヴァイオレーターが近くの上空を飛んで行くのを目にした。あれが足につかんでいるのは、どこか人の形をしているとマコは思った。

「クロネがいないよ。まだ崖の上にいるのかも。もしかしたらヴァイオレーターがー?」

「クロネなら、あれに捕まったわよ。アタシ、見たもん」リアが着地というよりは落下したままの姿勢で言った。指は飛行型のヴァイオレーターを差している。

「それを早く言ってよ!」マコが声を張り上げた。

「大丈夫だろ。いざとなったら雷を落として、逃れるさ」アルがの

んきに言ったが、マコは事態がそれほど気楽なものではないと思った。彼が心配して見守る中、飛行型のヴァイオレーターはどんとどんと遠ざかるばかりだ。

「捕まったときに頭をぶつけて、気を失ってたわよ」体を回転させて立ち上がりながら、リアが言った。

「それを早く言えよ！」今度はアルが声を張り上げる番だった

ジョンとクロネ

ジョンⅡアルバート・クラウドスは憂鬱だった。

まったく面白くない。

彼は街の東側に隣接している森を、足もとの地面をじっと注意深く観察しながら歩いていた。

森といっても街の外に人工的につくられたもので、木々は離れた位置に等間隔に並び、生い茂る葉が空を完全に隠すことはしなかった。今夜は病弱な母親が久しぶりに調子が良く、特製のジャンバシチューをつくってくれることになっていたので、こうして野生のジャンバ茸を収穫していた。ふだんなら、久しぶりの母親の手料理がうれしくて、うきうきした気持ちでこの狩りを楽しんだだろう。だがジョンはそんなうれしい気分を味わっている余裕がなかった。というのも、彼がご執心であるリルネ嬢が別の男に恋をしているからだ。

それだけではなく、ふたりはいつのまにやら親密な関係へと発展していた。しかもその男が王都から来たよそ者で、そいつの素性は一切が謎だった。いったい、あんなやつのだこが良いのだろうか？

ジョンとリルネは産着をその身に着けた時からの付き合いだ。よく一緒に遊んだし、ふたりだけの秘密も共有した。それなのに新参者が級に彼女を奪っていったのだ。

これが憂鬱な気分でなくて、どんな気分になれるというのだ？

ジョンは紺色のズボンの横に美しい装飾の施された柄を持つ片手剣を差し、十五才にしては思慮の深い青い目を下に落として土に生える野生のキノコを探しながら、緑深い草の上を踏んで歩いた。彼の足もとには上等な大きさのジャンバ茸が胸を張って草の間から頭を出していたが、心乱れているジョンはそれに気づかず、キノコをまたぎこしてしまった。そのすぐ前にもキノコはあったが、彼はそれ

も見逃した。これでは盲目の人間のほうがよほど多くのジャンパ茸を収穫できそうだ。

そんなキノコ探してもままならないジョンであったが、頭上を王者のように浮遊する危険だけは感じられずにはいられなかった。

始めはなんとなく、嫌な気配だった。ジョンはこういった危機を察知する能力は小さなころから備わっていた。彼はその予感を信じることとし、木の陰に隠れて上空の様子をうかがった。危険が近づいてくるという感覚はぐんと強くなって、心臓の高鳴りは早さを増した。

巨大な影が空を横切った。それはジョンの青い瞳に羽を広げた姿を映した。ヴァイオレーターだ。ジョンは背筋がぞくぞくと震えるのを感じた。その身ぶるいはどこことなく心地よかった。おそらく自分にも父親とおなじ武人としての血が流れているのだろう。

だが、やはりその肉眼で見えるヴァイオレーターは恐ろしいだけであり、ジョンはその心地よさを無理やり締め出した。巨大な昆虫のようなその体は銀色で、太陽の光を受けておぞましい光沢をどこもない場所に投げ放っていた。そいつは浮遊しながら耳のうしろに生臭い息を吹きかけられるような、不快な羽音を響かせている。それに――

それに、あの足にぶらさがっているのは人じゃないのか？ やはりそうだ。ひとときわ長いうしろの足にある二本の小さな鉤爪で、少女の両腕を器用につかんで運んでいる。死んでいるのだろうか。少女が暴れている様子はない。それどころかぐったりしている。

ヴァイオレーターは木と木の間の上空を通過し、向こう側の木の葉に隠れてしまった。ジョンは相手を見失わないように木の陰から木の陰へと移動した。ヴァイオレーターの図体はでかく、その体重のためかのろのろとした速度で移動している。そのため、追いかけるのは安易なことだった。

ジョンは次に移動した木の幹に肩を押しあて、首を突き出した状態で剣の柄を握った。木に登ってそこからジャンプすれば彼女を助け

られるだろうかと思案した。
できるだろう。

しかし、その必要はなかった。

神の気まぐれか、それとも天の助けか、どこからともなく雷が落ちた。空は澄み渡るような晴天なのに、だ。その雷はヴァイオレターを直撃し、つかんでいた少女を思わず放してしまった。そして、少女は落下した。

少女が落ちた方向へ走ると、枝を力いっぱい引き折る時のような音がした。それに続いてなにかを打ちつける音。体に嫌な感覚をねつとりと塗りつけるような鈍い音だ。

「アイタタタ。自分の放った雷に痺れるなんて、まぬけね」少女が言った。

クロネは腰をさする手を右ひざにまで持っていき、くの字に曲がったその足の太ももを撫でた。

「だ、大丈夫かい？」

ジョンは死んでしまうんじゃないかと思うほどの高さから落ちた少女が、あまり血を流していないのを見るとほっとした。落ちた時に枝が額を切っていたが、しづく程度の流血なら、ないに等しいだろう。

「ええ。はずかしいところを見られてしまったわね。でも大丈夫、木の枝がクッションになってくれたから」

クロネは立ち上がろうとしたが、その瞬間に顔をしかめ、短い悲鳴をあげながら前に倒れてしまった。それは急激な痛みに驚いた人間の出す声だった。

ジョンが慌てて、彼女の体を支えた。

「折れてる……」ほとんど囁くような声で、クロネは言った。

「だろうね。あの高さから落ちたんだもん、命あるだけでも御の字さ」

ジョンはやさしく微笑みながら、背中をさしだした。腰を低くか

がめ、少女が乗りやすいようにする。クロネは少しためらった。

「どういふつもりかしら？」

「どうもこうも、足が折れてるんだろ。医者のところ連れてってやるよ」

クロネはしばらく考えたのち、しぶしぶ首を縦に振った。

「そうね、その言葉に甘えたほうがよさそうね。でも、今回だけ特別ですよ」

ジョンはにこりと微笑むと、少女が背中に乗りやすいように調整しながら、クロネがおぶさるのを手伝った。

少女の体はとても柔らかく、信じられないほど軽い。もしこれがリルネだったら、これと同じような感じがするのだろうか？とジョンは思った。いや、もっと良いはずだ。そこには至福という大きな雲のような柔らかさがあるだろう。そう考えていると、ジョンの顔が運動したあとのように熱く燃え上がった。もし、これがリルネなら――

「そんなに耳を赤く染めちゃって、いやらしいことなんか考えているんじゃないでしょうね？」

まさにクロネの言うとおりだったので、ジョンはしどろもどろした。口から出る言葉は、はたして言葉と呼べるようなものなのかわからなかった。

「ふふふ、冗談よ」

クロネの言葉にジョンは顔も向けなくて愛想だけの笑顔をつくってみせた。このやりとりもリルネとの間に交わされたものなら、それは楽しくて素敵なものだったに違いない。もし、これがリルネなら――

やめるんだ。ジョンはその女々しい考えを捨て去ろうとした。いつもは心の奥底に隠しているのに、たまに申し合わせたように浮上してくる情けない感情だ。

ジョンは落ちて来た少女を町医者へと運ぶという仕事に専念すること、考えを巡らせることを抑えた。

その十五分後、ジョンはクロネを背負いながら、街の医院であるジャンローズ・クリニックのある通りにさしかかっていた。道中、街の知り合いに会い、あれやこれやを質問された。会う人全員、ジョンが女をつくったと思っているらしい。どいつもこいつもニヤついていた笑顔を顔面に張り巡らせている。そのつど彼は説明し、誤解を解かなければならなかった。余所者のクロネは、すべてをジョンに任せることにしていた。

これまでにふたりは自己紹介をし終わり、少女の名前がクローネンバーク・ユイソナーであることをジョンは知っていた。

「それで、目覚めたときにパニックになっちゃって、とっさに雷を撃ったのよ」

クロネはジョンの背中では経緯を語った。いままで四人で旅をしてきたこと、そのなかにマコルデイス・クイーデルという同世代の男の子がいるということ、ヴァイオレーターに襲われたこと、そしてまた別のヴァイオレーターにつかまり気を失ってしまったこと、そしてとりわけ、落下したときの様子を詳しく聞かせてくれた。

「どうやら少女は魔法の力を操れるらしく、ヴァイオレーターに雷を落としたのは彼女本人らしい。なるほど、魔法の力なら晴れ空なのに雷が発生した理由もうなずける。しかしながら、そのあとの落下のことは計算に入れていなかったらしい。直前までクロネは気を失っていたのだし、目覚めてすぐあとの鈍った頭でとっさの本能が働いたのだとしたら、それも仕方のないことだ。敵から逃れて地上に辿り着きたいという願望という点では、思考と本能とでの意見は完全に一致していたわけだが。」

「ほら、着いたぞ」ジョンは診療所の前でクロネを降ろすと、しっかりと肩を支えたまま彼女を立たせ、目の前の建物をあごでしゃくった。そこには大きな看板にジャンローズ・クリニックとでかでか書かれていた。

「ジャンロー？」クロネは首を傾げた。

「ああ、医者の名前さ。君を治してくれる。ほら、歩くぞ」

彼女に肩を貸しながらエスコートするジョンの動きに合わせて、クロネは折れていないほうの足でぴょんぴょんと飛び跳ねるようにして進んだ。

扉を開けると、カラカラとかわいらしい鈴の音が鳴った。室内は日の光が取り入れやすいつくりになっており、明るかった。ジョンに連れられて奥の小部屋に行くと、ベッドに三人の男が寝かされていた。三人は大忙しの治療が終わったとみえ、体中を包帯でぐるぐる巻きにされていた。どれもクロネより重傷のようだ。

近くに白衣を着た男がいた。どうやらこの人がジャンローという医者らしい。

ジャンローはクロネに気がつくど、どうしようもなく塞ぎこんでいる人間でもその悩みを吹き飛ばしてしまいそうな笑顔を彼女に向けた。

「急患ですか、どれ診察をいたしましょう」

三人は非常にゆったりとしていた。ひとりがヴァイオレーターにさらわれているというのに、さきほどのように誰一人慌てている者はいない。

リアはなにやら下を見つめ、奇妙な形の石を蹴っていた。アルはていねいに整理された小道のわきに鎮座している大きな岩の上に立って、どこか遠くに真剣なまなざしを向けている。

マコは馬車を通ったであろう轍にたまった水をのぞきこんでいた。まるでそこに追い求めていた真理でも落ちているかのように。

「どう思う？ あれはクロネの雷だったよな」アルは岩から飛び降りながら、言った。

「あたりまえでしょ。こんな晴れた日に自然の雷が落ちこちるわけがないじゃない」リアは蹴った石が背の高い草むらのなかに飛びこんだので、それを足で草をかきわけて探したが、すぐにあきらめてふたりに近づいた。

「あの妙に紫色の雷はクロネだよ。自然のだったら、あんな色は出

ない」とマコ。

三人の意見が一致したところで、アルが口を開いた。「その方向に街が見えたぞ。とりあえず、そこに行ってみるか」

アルが雷の見えた方角に向かうと、マコとリアのふたりは着き従うように彼のあとを追った。

魔導士たち

その広間の真ん中には大きな机が置かれており、それを取り囲むように三人の男が座っている。ひとりは黄金の縁取りをした黒衣を着て、室内だというのにフードを頭からすっぽりと被っている。もうひとりは短く刈りあげられた白い髪がもみあげからあご髭に繋がり、口髭にまで達している。最後のひとりは喉の皺がたるむほどやせ細った老人で、空色の服の上からベージュの前掛けという聖職者のような出で立ちをしている。フードは向かいにいる黒衣の男とは対照的で、首のうしろのところでおとなしく腰をおろしていた。

三人のまわりには、さらに長椅子が方形を描くように並べられており、それぞれの従者たちが静かに座り、三人の話し合いの様子をじっとうかがっていた。

「それでは、どうしてもこちらに渡してはもらえないということだな」白髪の男――その落ち着きを払った物腰と、真実までを見通すような鋭い眼光、そしてその腰にぶら下げてある立派な剣から、腕の立つ剣士であることがわかる――が言った。

「ああ、あれは俺の部下だからな、俺のところで預からせてもらう」フードを目深にかぶった男が答えた。

「ふざけるな！」白髪頭のうしろにいた男が怒りをあらわにして立ち上がった。

「エド、やめるんだ」白髪の男がうしろにいる若い男に振り向かずと言った。

「しかし、ウィリアム団長、やつらは街の人間に大怪我を負わせた。それをかくまおうとしているんですよ！」

「かくまうとは、語弊があるようだな」黒衣の男が静かに言った。

「俺は自分の部下は自分で処分を下すと言っているのだ。それが部下に対する責任でもあるからな」

「街に対する責任はどうなんだ？」エドがくっつかかる。問題を起こした側であるのにも関わらず、上から見下すような男の態度が気に食わなかった。

「それに関してはこちらから正式な謝罪があるだろう」

「それだけでは足りないな」白髪の男ウィリアムはエドが口を開く前に言葉を発した。熟考してから発言するウィリアムにしては素早すぎるといっていいほどの対応だ。それほど自分が粗暴な態度を取っていたのだろう。ウィリアムはエドの発言権を剥奪したのだ。

だか彼の行動がエドの頭を冷まさせたと言っている。彼は口を閉ざし、腰をおろした。

「なにが足りないというのだ？」黒衣の男が言った。

「結果が欲しい」ウィリアムは答えた。「あなたがたが今回起こした問題に対しての唯一の謝罪は言葉ではなく、結果だ」

「ほう、というത്？」フードで男の顔はほとんど見えなかったが、エドには男が眉を吊り上げたのがわかった。

「あなたがたは強引にもヴァイオレーター退治を申し出て、この街に居座った。我々の歓迎を受けていないことを忘れないで欲しい。そしてそのあなたがた我々の信頼を得るにはその申し出を達成するほか方法はない」

これまで黒衣の男は押し黙ってウィリアムの言葉を聞いていた。だがそうするために男が相当の我慢を強いられているようにエドには見えた。この男は他人が自分の上に立つことに慣れていないのはおろか、それを極度に嫌っているらしい。

「でなければ、この村から出て行ってもらうほかないだろう」

「だが、俺たち以外にヴァイオレーターを倒せる者はおるまい。おまえたちの剣ではやつの皮膚に傷をつけることさえできなかった」

ここまで寡黙を保っていた年老いた男が口を開いた。

「じゃが、あなたがたが三回もヴァイオレーターを取り逃がしておることも、また事実じゃ」

「次こそは仕留める」

「そうしてももらわねばこまるな。でなければこの街はヴァイオレーターだけでなく、君たちというふたつ目の厄介ごとを抱え込まなければならなくなるのでな」

男は齒を食いしばっていた。自分がコケにされているようで悔しがっているのだろう。

男の口もとが緩んだ。

「俺たちが厄介ごとだというのはなら、古の魔女とやらはどうなんだ？ そいつも追い出すつもりなのか？」

古の魔女という言葉をも男が口にするのを聞いて、年老いた男は驚いて顔を強ばらせた。それを見て、黒衣の男が嬉しそうに口もとを吊り上がらせた。

「キンバリー長官殿、どうだろうか、俺たちがその古の魔女を退治してしまおうというのは」

老人は首を横に振った。

「やめてくれ。魔女に手を出せば、街に仕返しが来る」

男は声を上げて笑った。

エドは立ち上がった。両腰に差している二本の剣のうち、片方に手をやる。この場でフードの男を叩き斬ってやる心づもりだ。

だが振り返ったウィリアムに鋭い眼光を向けられて、エドは座った。

「俺たちに楯ついても、仕返しが来るかもしれないぞ」男は言った。「どうあがいても俺たちの魔法に、そこにいる騎士団の剣が届くとは思えない」

なんという暴挙にでたことか。あろうことかこの男はこちらに脅しをかけ、自分のほうが立場が上だということを示そうとしている。エドは腹の中に焼け石を突っ込まれたような気分だった。いつ口から炎を吐き出してもおかしくはない。

「まあ、そんなことは起こらないと思うがな」と黒衣の男。「心配しなくとも、俺たちがヴァイオレーターを倒してやる。そっちは俺が提示した報酬を渡してくれればいい。そしたら大人しく出て行っ

てやろう」

そう言うと男は立ち上がった。

「それまでは俺の部下たちの少しの粗暴には目をつむってもらえないな。だが、約束する。少しは控えるように言っておこう。それでいいだろう？」

「我々はただ君たちに問題を起こして欲しくないだけじゃ、ヴァイオレーターを倒してくれるのなら、約束の報酬は払おう」キンバリーが答えた。

「よろしい」

黒衣の男はうなずくと、退出した。男の背後に座っていたふたりの男——ひとりは前歯が欠けて鋭利になっており、もうひとりは左頬に猫の髭のような三本の細い傷がある——立ち上がると、黒衣の男に着いて広間から消えて行った。

エドはその場に座ったまま、言い得ぬ敗北感を歯で強く噛み締めた。

黒衣の男は最後まで自分が優位にある立場を保守したまま立ち去ったのだ。

ウィリアム・クラウド騎士団長は寡黙を保ったまま考えこんでいた。キンバリー長官はその様子をおずおずと見守っている。ウィリアムの弟子であり、騎士団の副団長であるエドはまだ煮えたぎる思いがあるのか、空中をじっと睨んでいる。

「まるで盗賊じゃないか」エドが口を開いた。「こっちは食事まで無償で提供しているんだぞ」

「信用はできないが、やつらの力に頼るしかあるまい」ウィリアムが言った。その声に揺らぎはなかったが、焦燥が感じられた。

「君たちでも歯が立たなかったヴァイオレーターを追い返してみせたのは、他でもないやつらじゃからのう」とキンバリー。

「悔しいですよ」エドは言った。

だが、どうすることもできなかった。くだんのヴァイオレーター

に剣は齒が立たず、問題の魔導士たちがやって来なければ街は今頃酷い有様だっただろう。

一週間前の惨劇をエドは覚えている。

街中がパニックと恐怖の入り混じった悲鳴で満たされた。

騒ぎにウィリアムたちが駆けつけると、巨大な翼を持った爬虫類型のヴァイオレーターが西側と南側の壁とがちようどぶつかる辺りで暴れていた。シャツの骨董品店はほとんどが倒壊しており、血を流している者、倒れている者、死んでいる者などで騒然としていた。

ウィリアムは剣を抜き、果敢にもヴァイオレーターに斬りかかった。敵は細長い首をのびし、迫りくる戦士に噛みつこうとしたが、ウィルは素早い方向転換でそれを避けると相手の首の根っこに刃を突き立てた。鋭い摩擦音と火花が飛んだが、ヴァイオレーターの皮膚には傷一つできていない。

少し遅れてうしろからエドが突進した。両腰から牙のような刀身のショートブレードを抜き、その二本の剣で胸部を斬りつけた。やはり同じ結果だった。

それから師弟はふたりでヴァイオレーターとの攻防を繰り広げた。その光景を騎士団の団員たちは黙って見ているしかなかった。ただただ畏怖の念でふたりの戦いを見つめていたのである。

だが、ふたりの戦いはその激しさとは裏腹に相手に与えるダメージは皆無だった。傷ついているのはヴァイオレーターの皮膚ではなく、彼らの剣のほうだ。

「くそっ。化け物かよ、こいつ。全然、刃が通らない！」エドは言いぜい喘ぎながら言った。

「化け物だよ」ウィリアムが答えた。「ヴァイオレーターはみな化け物だ」

ウィリアムの言葉に答えるように、ヴァイオレーターは喜び勇んでその尖ったぎざぎざの齒を、彼に当ててきた。ウィルはそれを剣で弾いたが、それが限界だった。手は痺れ、体力は——くそ、俺も歳だな——底を尽きていた。

ヴァイオレーターはこれがトドメだと言うように、最後の咆哮を空に向かって放つと、ぎざぎざに尖った歯を剥きだしにしてこんどはエドに噛みつきにかかった。エドは首をすくめて身構えたが、足がもつれて尻餅をついてしまった。

彼は命をあきらめた。牙が彼の体を貫くのは確実だった。

だが、牙が彼に届くことはなかった。

ヴァイオレーターは長い首を持ち上げて、苦痛に叫び声をあげた。さきほどヴァイオレーターの顔があった場所に爆煙があがっている。

いったいなにが起きているのか、エドにはわからなかった。ウイリアムと目が合ったが、彼も状況がわからないといったぐあいに肩をすくめてみせた。

「剣が効かぬのなら、俺たちの魔法で撃退してやろう」

黒衣の男が十数人の男たちを引きつけてやって来た。彼らは円陣を組んでヴァイオレーターをとりかこむと、両手をヴァイオレーターに向けた。その手の先がぼんやりとひかり、赤、青、緑など様々な色に輝いた。

かと思うとその光は放たれ、ヴァイオレーターに降りそそいだ。ヴァイオレーターは苦しみ、大きな翼を広げて飛びたとうとした。男たちは上に向かって追撃を放った。光はヴァイオレーターにさらなるダメージを与え、街を襲った怪物は上空を上下に揺れながら街を囲む壁を飛び越え、そして退散した。

黒衣の男は名をヴァルマーと名乗った。彼は礼を告げるウィリアムに対してヴァイオレーターは必ず戻ってくると言及し、自分たちを雇うことを勧めた。そしてその通りになった。二回、三回と起こったヴァイオレーターの襲来は街にさらなる被害をもたらした。

その都度、ヴァルマーとその配下たちによって撃退されるのだった。

そのような出来事があったからこそ、キンバリー長官は魔導士たちを追い出す決意を下すことができないでいた。魔導士たちは街の

治安を乱しているかもしれないが、それ以上にヴァイオレーターの脅威から街を救っているのだ。少なくともいまのところは。

まさに板挟み状態だった。

「魔導士たちの問題を残して街を離れるのは気が進まんな」ウィリアムが言った。

ウィリアムは明日、数十人の部下を引き連れて使者として北のエムードラ領へ向かうことになっている。王都で会議があるためだ。そこへウィリアムは国が管理するこのシエラの街の代表として赴くことになっている。

そこで二、三の事務的な報告と業務があるのだ。

「あなたがいなくとも、俺の目の黒いうちはやつらの好き勝手にはさせませんよ」エドは自分に言い聞かせるように言った

「そう願いたいな。なにも起こらねばよいのだが」

ウィリアムは吐息のようにつぶやいた。

シエラの街

独立都市シエラの東門近くの防壁は無残にも破壊されていた。防壁は街の四方を囲み、まるで年頃の少女のプライヴァシーを守るかのように街並みをすっぽりと覆い隠しているのだが、そこにあいた穴のおかげで中身は丸見えだった。といっても、ほとんどが民家などの屋根ばかりだったが。切妻屋根や尖塔が見える。

「お腹を空かせた子供が食べ物欲しさに暴れたにしては、大きな被害よね」リアが言った。

「それって、君のことだろ？」アルが子供のようないたずらっぽい笑顔を浮かべながら言った。それを聞いて、マコは笑った。

「あら、アタシのようなレディはお腹が空いたからって、暴れださないわよ」

「よく言うよ。あやうくバーベキューにされるところだったこともあるのに」

アルはとある日の出来事を思い出していた。

あれはリアが仲間になってからまもないころ、リアは空腹を訴えたが、アルはそれを拒んだ。時間もまだ早かったし、手持ちの食料も底を尽きそうだったのだ。彼はなるべく温存したかったし、できれば夕食だけで凌ぎたかった。だが空腹もそのイライラによる怒りも頂点に達したリアは、食料を出せとアルに攻撃をしかけたのだ。それも魔力によって超高温の炎を発生させて。

あの炎の熱さがいまでもその額に頬に感じられるようだった。それは上から照りつける太陽のせいでもあるだろう。とにかく、リアが放った攻撃を避けこしたものの、アルはもう少して焼き殺されるところだった。大げさに言っているのではなく、本当に。

「あれ、そうだったけ？」リアは乾いた笑い声をあげた。

門にはふたりの衛兵らしいき人物が立っていた。

なにやらただならぬ緊張感が漂っている。

「やあ」アルが声をかけた。

ふたりの衛兵は三人に順番に目配せをし、危険はなさそうだと判断すると、いくらか緊張を和らげたようだ。それでもなお、ふたりからは緊張感が感じられていたが。

ひとりなどは上空を気にしながら、ちらちらと空に向けて不安そうな視線を送っている。

「ようこそ。ここはダヒチ領四番目の独立都市シエラです。そしてわたしがシエラ騎士団がひとりフィッチャー・ジョアンです」

ダニーが言い終えると、もうひとりが空から視線を落として言った。

「同じくダニー・マックスウェルです」

「騎士団ってことは、この街には麗しいお姫さまでもいるのかな」アルが言った。

「独立都市だから王族じゃなくて、長官が治めてるはずだよ」マコが言った。

「騎士団っていうのは、まあ、名ばかりですね」とダニー。「ここに街をつくったのがいまの長官の曾祖父と、彼と連れ立ってやってきた元騎士だったんです。で、街ができる際にその騎士が自衛団を発足し、それを騎士団と名づけだけです」

ダニーは説明している間にも、空の様子をちらちらとうかがっていた。その顔はとても心配そうだ。

「元騎士ってことは、この近くのエムードラから来たの？」マコが訊いた。

「ええ、そうです」ダニーが答えた。「ふたりともお城に仕えていた頃からの友人だったそうです。いまでもこの街は長官による政治と騎士団団長による治安維持によってまわっています」

ここでリアが大きなあくびをひとつした。

「お勉強って嫌いなよね、アタシ。歴史の勉強なんてとくに」

「これは失礼いたしました。いやあ、街の歴史となるとつい我を忘

れてしまうもので」

「いや、気にしないでいいよ。特にコイツのことは」アルがリアを指さして言った。コイツとはなによ、とリアがこぼしたが、アルは続けた。「おかげで街のことがよくわかったよ」

「うん」マコがうなずいた。「それでボクたちがこの街に来た理由なんだけど……」

「ええ、なんなりとお申し付けください」ダニーが胸を張って言った。

「それが……ちょっと言いにくいというか、突拍子もないことのよう」に聞こえるかも知れないけど――」

マコは自分の言いたいことをどう表現していいかわからずに、言葉をつめて言いあぐねていた。

その横からアルが率直に言った。

「空から女の子が落ちてこなかったか？」

ダニーとフィッチャーは驚いたように顔を見合わせた。

「その女の子なら――」ダニーは言った。

ヴァルマーはウィリアムとキンバリーたちから解放されると、すぐさま自室に戻り、レイアンとクアーズを呼びつけた。

ふたりは直属のボスの前に立たされると、緊張して体を強ばらせた。

「なぜ呼ばれたのかはわかっているな」

その声を聞き、さらにふたりは緊張した。

「でもあれは、あいつらが始めたことで――」レイアンが口を開いた。

「だれが言い訳を聞くと聞いた？」ヴァルマーがそれを遮るように口を開くと、ふたりの緊張は限界にまで達し、彼らはわずかにあどずさりした。

「わかっていないようだから言うが、俺たちはこの街に留まりに来たのであって、追い出されるためではない」

「それは十分わかっていますよ」とクアーズ。

「だったら騒ぎを起こすな。そう最初に言い聞かせておいたよな。それをどうだ、おまえ達は街の人間に大怪我を負わせ、不信感を買う結果となった」

「すまない、軽率な行動だった」レイアンが反省の意を示した。

「それがわかっていれば良いのだ」ヴァルマーは許しを与えた。それを証明するかのように両手を広げ、歓迎の意を示している。「次はこのようなことがないようにしろよ。チャンスを与えているのだからな」

「ええ、わかりました。今回のようなことは二度と起きません」クアーズが安堵の吐息まじりに言った。

「ああ、俺もだ。もうしねえ」

「もう行って良いぞ」

レイアンとクアーズはお互いを安堵の表情で見合い、部屋を出るため、ドアまで向かった。

「ところで――」ヴァルマーが口を開き、ふたりは足を止めて彼のいる方向へ首をめぐらした。「おまえ達がそのチャンスを発揮するのは地獄でだ。ここではない」

「え？」クアーズが震えるような声を出した時、ヴァルマーの手がのびてきた。

実際には彼は自分のデスクに腰を据えたまま、両腕を組んでいた。だがふたりは彼の包み込むように大きな手が彼らを握りつぶそうと迫って来るのをその肌で感じていた。

体が握りつぶされるような圧迫感を感じ、ふたりは立ったままのたうった。その締め付けが内部からも外側に向かっていているような感じがした。

息が出来ない。大きく口を開いても、喉が擦れるような音をたてるだけで空気が入ってこない。

ふたりはやがて息絶えた。

ヴァルマーは息絶えたふたりの体がお互いに頭を付き合わせて倒れているを見おろしながら、満足そうな笑みを浮かべていた。

力はすべてを操作するためにある。

ヴァルマーはそう思っていたし、それを常に実行して生きてきた。だが、常に力が発揮されるというわけではない。今回のように手の外側で思わぬ事態がおこることもある。部下の行動を完全には抑制できず、街の人間に反感を与えてしまった。もともと信用されていたわけではないのに、さらに不信感を募らせるという形になってしまった。

それも力によって抑えることができたわけだが。

ヴァルマーは自分たちに絶対的力があると知らしめることで、あのウィリアムとキンバリーにどちらの立場が上なのかはっきりさせてやることができた。そして勝手な行動を起こす部下はその力で消し去ってやることができた。

どれもこれも、彼と彼の魔導士軍団がその時までこの街に留まる必要があったからだ。これは絶対に実行されなければならないことであり、あの方たつての希望なのだ。

そのためには力が必要だ。

そしてヴァルマーはそのために必要な力というものを十分に持っていた。

三人にとっては意外なことだったが、クロネはすぐに見つかった。それはこの街を警備する騎士団の連絡網の幅広さと、それを伝う情報のおかげで、各門番にも彼女のほとんど事故のような来訪が伝わっていたのだ。もちろん彼女が診療所で治療を受けていることも。

「いやあ、でもみなさんはとんでもない時期に街にやって来たものです」クロネがいる病院への案内の途中でダニーが言った。

「とんでもない時期って？」一番に反応したのはリアだ。事件でも期待しているのだろうか、期待の眼差しをダニーに向けている。

「ええ、最近出現したヴァイオレーターの噂は知っていますか？」
「知ってるわよ。何度か会ったことあるもの」

「何度か……？ まあ、そのヴァイオレーターが街を襲うんです」
「じゃあ、あの壁の穴はヴァイオレーターが空けた穴なんだ」マコが言った。

「ええ、そうです。他にもいくつかあります」

「てっことは、何度も襲われているのかい？」アルが訊いた。

「ええ。だからとんでもない時期にと言ったのです」

「そんなのアタシたちでやつつけてあげるわよ」とリア。

「うん」とマコはうなずいた。「今度来た時がそいつの命日だ、だね」

「ははは。君たちに勝てるなら、俺たちがすでに倒していますよ」
ダニーが笑った。

「でも、倒してないじゃない。アタシのパンチがあれば、ヴァイオレーターなんてイチコロよ」

リアは右腕を二回、前に突き出してみせた。

「そう、頼もしいですよ」

「そうよ。まあ、期待してなさい」

リアはダニーの皮肉に気づいていないようすで、得意げだ。

「ほら、着きました」

ダニーは立ち止り、左手にあった診療所を指差した。マコとアルは彼の前方を歩いていたので、あやうく通り過ぎるところだった。その診療所はジャンローズ・クリニックという看板が掲げられていた。

長官と団長

そこは怪我や病気を治す場所というよりは、まるで宿泊施設のようだった。ピカピカに磨かれた木の床、涼しげな空気を送るための天井に吊るされたファン、温かなオレンジ色の照明、まるで有名リゾートのホテルのようだとマコは思った。

「まるで南国の風が吹いてきそうだね」マコが言った。

「ええ、まるで病院には見えないでしょう？」ダニーは答えると、奥へと続く廊下へ手招きした。「さあ、こちらです」

そのままダニーの案内で、奥の部屋まで行くと、クロネがベッドに座って右足を差し込んでいる。その右足を白髪交じりの男が左手でつかみ、右手を折れた個所に当てている。その右手はぼんやりと白く光っていた。

ほお、これは見事とは言えないが、立派なセキユア・ライトじゃないか。アルは感心した。

「ほれ、今日の治療はここまでじゃな。おや、お客さんか？」男は振りかえると目をしばたいた。「見たところ、怪我人はおらんようじゃが」

クロネは三人に気づくと、ぱっと顔を輝かせた。「よく、ここがわかったわね」

「うん、雷が落ちるのを見たから」マコが答えた。

「それにお前は街中の噂だぞ」アルが言った。

「おや、お仲間さんだったのかね」男はにっと笑った。「わしはムナン・ジャンローじゃ。この街で医者をやっておる」

「すいません。ウチのクロネが迷惑をかけたようで」アルが言った。「いやなに、人を治すのがわしの生きがいじゃからな」ジャンローは快く言った。本当にそれが楽しみであるかのようなうだ。

「いえ、しかし——」アルはどぎまぎした。

「なにかうしろめたいことでもあるのかね？」まるでなにかを見抜いたかのようにジャンローは笑って言った。

「はい、それが……俺たちは旅をして来ていて、実のところ治療費を払う金がないのです」アルは済まなさそうに、正直なところを話した。

それを聞いてジャンローは用意していた高笑いを放った。「この治療費はタダじゃよ。行政から資金が出るからな」

「しかし、それは税金でしょう？」

「確かにそうかもしれんが、それでとやかく文句を言うような人間はこの街にはおらんよ」

ジャンローはウィンクをし、クロネの足にギブスをはめてやると、車椅子に座らせた。

「とすると、宿泊代を払う金もないじゃろう」ジャンローは続けて言った。

「いえ、それくらいは工面できますよ。あまり高くないのであれば」とアル。

「退院までには四日かかるぞ。何せ骨をやっとるでな。セキユア・ライトによる治療で急激に治癒させると、骨がちゃんとした形にくっついてくれんからな。こればかりは少しずつ当てて、ゆっくり治してやるしかないだろうて」

それを聞いてアルは黙りこんだ。ほぼ文無しと言ってよく、一日二日も宿泊すればそれこそ一文も無くなってしまいうだろう。

「まあ、心配せんでええ。数日寝泊まりするにはうってつけの場所がある。それもとびきりの場所だ」

ジャンローは満面の笑みになった。

「しかもタダじゃぞ」

ジャンローに任されたダニーに案内されて行くと、そこは恐らく街一番の豪邸だった。敷地内に入ると、右手方向に小さな池があった。マコは横目でその池を見ながら、オレンジや金色など色とりど

りの珍しい魚が泳いでいるのに気づいた。

ダニーが呼び鈴を押すと、ほどなくしてメイドが顔を出した。彼女は突然の来客に目をしばたかせることなく、笑顔でマコたちを迎えてくれた。

「ジャンロー先生から連絡がありました。旅の方々、ようこそシエラの街へ」

マコたちは一通り自己紹介を終えると、家の中に案内された。クロネの車椅子をアルが押し、ダニーは玄関先で別れると職務に戻るためフィツチャーの待つ南門へと戻って行った。

彼らが案内された客間はリアとクロネにはもの珍しいほど広かった。王室育ちのマコにとってはどんな宿の部屋よりも大きいと思っただ、ずっと自分たちが暮らしてきた環境を思うとそうでもなかった。

マコとリアはメイドに言われるがままに座り、アルはクロネの乗った車椅子をマコのそばまで持って行くと、自分も座った。ソファは王宮のそのようにふわりとしていて、テーブルは何年間も磨き続けたかのようにピカピカだ。

メイドが失礼しますと頭を下げて出て行くと、入れ替わりに細身の老人がとぼとぼとやって来た。キンバリー・イフライムだ。彼は来訪者の顔を見ながら口を開いた。

「ようこそ、我がシエラの街へ。わたしがこの街の長官を務める――」

キンバリーの目線がクロネのそばとぼったり出会うと、老人は顔をくしゃくしゃにした。いまにも泣きだしそうなその顔は、まるで懐かしい友人か家族と再会を果たした男のそれだった。

「カローラ……」キンバリーは女の名を口にした。

「えっと……」クロネが困惑の声を出すと、老人はくしゃくしゃになった顔をもとに戻した。「いや、すまん。つい、娘を見た気がしてな。彼女を二年前に亡くしておるもんじゃから――」

老人はまた言葉を詰まらせた。

「もしわたくしがその娘さんと重なったのなら、どうぞわたしをその娘さんと思って接してください。わたくしたちがここに滞在できる間ですけど」クロネは気づかうようにおじぎをした。その時、スカートの太もも部分をちよんとつまんだ。

「いや、わたしはもう娘の死を乗り越えたよ。じゃが、貴女の好意は受け取っておこう。貴女を娘と思って接することもできるかもしれない。いやはや、それだけ貴女は娘のカラーに似ておる」キンバリーは口をつぐみ、言葉を慎重に選んだ。「顔ではない。なんというか雰囲気こそつくりなんじゃ。その瞳にやどる光なんかが特に――」

それだけ言うと、キンバリーはかぶりを振った。「すまない。自己紹介の途中じゃったな。わたしはこの街の長官で、主に行政などの最終的な判断を下す。名をキンバリー・イフライムと申す」

キンバリーの自己紹介が終わると、マコたちも自分の名を告げた。それから彼らの続けている旅の大まか内容と、ここに至った経緯――マコとアルの素性と、追放のことだけは隠しておいた――を聞くと、彼は四人を快く迎えてくれた。

「では、治療のあいだはこの家に滞在すると良い。部屋だって人数分以上にある。とびつきり広くて、とびつきり豪勢な部屋がな。望むのなら相部屋だって良いぞ」キンバリーは豪快に笑った。

「ここまでしてもらって悪い気がするなあ」マコが言った。

「なあに、その年頃で遠慮は似合わないぞ。それにクロネ殿は自分を死んだ娘と思って接して良いと言ってくれた。娘は父親と暮らすものだろ」キンバリーはクロネにウィンクをしてみせた。ぎこちないが、やさしさのこもったウィンクだ。クロネはこの老人が好きになっていた。

「まあそういうことだ。老人の道楽だと思って、世話させてくれ」彼の申し出を断る理由を四人は見つけることができなかった。かくて四人のシエラの街での滞在生活が始まった。

あれだけ自己主張の強かった太陽もすっかり落ちると、晩餐会が開かれた。大きなテーブルにマコたち四人とキンバリーに加え、クロネを助けたジョン・クラウスとその父ウィリアムが連ねた。ウィリアムの隣の席がひとつ空いており、ほどなくして女性がやって来た。ジョンの母ナリーだ。

この晩餐は歓迎と見送りを兼ねたものとなった。つまりはマコたちのつかのまの来訪を歓迎し、ウィリアムの旅の無事を祈るための会食だ。

「そうか、君がクロネを。世話になったな」アルが肉の切れ端を口に入れながら言った。肉汁が口の中に広がり、旨かった。久しぶりの贅沢だ。

「世話ならどんどんかけさせてやってくれ」ウィリアムが言った。

「なんなら君たちの旅に連れてってやってくれても良い。昔の人は良い格言を残してくれたものだ。愛する息子には過酷な旅を。こいつはまだまだ未熟者でな」

「父さん、俺だってもう立派な戦士だよ。戦いにだって出られる」未熟者という言葉に不服を感じてジョンが言った。それからおいしそうにシチューを口に入れた。母親お手製のジャンバシチューだ。

結局クロネを病院に連れて行った後、森に戻ってキノコを探すはめになったが、十分な収穫に満足していた。

「おまえが出たところで命を取られるのがオチだな。エドのほうがいい込みはある」

「エドは天才だもん。俺なんかが敵わけないよ」

「その弱気がまだ未熟だと言うんだ。立派な戦士は弱音など吐かんとかかせているようだった。教育パパといったところだな、とアルは思った。どこことなくマコの父親に似ている。

「まあ、まあ、こんなところで説教などせんでもええ」とキンバリー。「そういえば、詳しい紹介はまだだったようじゃな」

「ジョンのお父さんでしょ。しばらく旅に出るんだってね。一体ど

んな旅なの？」マコが口を挟んだ。ひとなつっこい彼は早くも騎士団団長に興味を持ったようだ。

リアは人の話も聞かず、食事にばかり夢中だった。

クロネは車椅子が他の椅子より少し低い位置にあるため、わずかなばかりの苦勞をしながら食事を進めていた。

アルは杯にそそがれたブドウ酒を口に含んだ。それをテーブルに置くと、まだ飲み干してもいないのに杯におかわりがなみなみとつがれた。

「彼は自衛騎士団の団長を務めておるこの街の権利者のひとりじやよ。わしが行政を管理し、彼が治安維持を担っておる」

これはダニーから聞いていた通り、マコたちの知っている事実だった。

「騎士団の代表として明日、王都エムードラへ出発することになっているんだ」ウィル本人が継いだ。「ここは独立都市と言っても、エムードラの配下だからな。年に何回かは王都に街の代表たちが集まって会議があるんだよ」

「へえ、あんたのお父さんって結構すごいね」クロネが感心して言った。ジョンは少し照れくさそうにしたが、ウィリアムはそうではなかった。

「いや、やれるだけのことをするのに精いっぱいだからね、まだまだだよ、わたしは」

謙遜か、とアルは思った。しかしそれが武人のあるべき姿なのだろう。力は誇示するのではなく、それを最大限に活かそうと努めるためにあるのだ。モーガン国王の受け売りだが、彼はその言葉を忠実に守っていた。

会食は楽しいおしゃべりとおぼれる笑顔とで進んだ。空いた皿やらどんどんと片づけられて、いまではほとんどがなくなっていた。アルは杯からブドウ酒を飲み、マコとリアは満足そうに腹をさすっている。

キンバリーはさきほど立ち去ってしまったので、彼のいた席は空

いている。メイドのひとりが彼の席をすっかり綺麗に片づけてしまった。彼女がテーブルを綺麗に拭き終わると、キンバリーが片手になにかを持ってやって来た。クロネのところまで移動すると、その小さな物を彼女に差し出した。

それは紐でくくりつけられた小さなナイフだった。ビロード色の鞘におさまっている。

「これを貰ってくれ」キンバリーは言った。その声はわずかに震えているようだ。

「え、わたくしに？」クロネは目をまるくした。

「そうだ。こいつはイフライム家に伝わる短刀じゃ。生前、娘が使っていた」

「そんな大事なものの、貰えませんか」クロネは断った。

「貰ってくれ」キンバリーはくりかえした。「おまえに貰って欲しいんじゃ」

クロネはキンバリーの目を覗きこんだ。潤んだ瞳は力強い意思を宿している。ナイフを受け取らなければ、一步も動かないという意思が宿っているように彼女には見えた。クロネはそっとナイフに手をやり、それを受け取った。

「ありがとうございます。大切にに使わせていただきますわ」そう言うのと彼女は短刀を首にかけた。それを見てキンバリーが満足そうにうなずいた。

「それをつけると、余計にカローラに見えるな」ジョンが感嘆の声をあげた。

「ううむ」ウィリアムが同意を示すようにうなづいた。

「そんなに？」クロネが首を傾げた。

「いや、そっくりというわけじゃないんだ。だが、その瞳や君の放つ空気を見ると、彼女を思い出してしまう」

クロネの旅の仲間以外はウィリアムの言葉に同意し、何度も頷いた。

このときまでにはメイドたちがせつせと働き、テーブルの上は綺麗

麗になっていた。

「さて、わたしは出発の準備があるので、これで。ほら、ジョン、行くぞ」ほどなくしてウィリアムが言った。立ちあがり、息子の椅子を引く。次に妻の椅子を引くと、やさしく立たせてやった。

「そうじゃな、そろそろお開きにするか。有意義な会食だったぞ」キンバリーも立ち上がり、友人を見送るために玄関まで移動した。そのあとにクラウドス親子が続き、マコたちもそろそろと玄関に向かった。

薄明かりだった空がすっかり暗くなっていた。ウィリアムとジョンは玄関から外に出ると、別れのあいさつをするために振りかえった。

「それでは、今夜の晩餐にお招きいただき感謝します」彼は友人に言った。

「うむ。また帰って来た時にな」キンバリーは笑顔を向けた。

「ええ」ウィリアムはうなずくと、マコたちに向き直った。「遅ればせながら君たちをこの街に歓迎しよう。わたしはいなくなるが、問題さえ起こさなければ好きにやっていいよ」

「おれからも歓迎するよ」とジョン。

「では、わたしたちはこれで失礼する」

ウィリアムがその場を離れると、ジョンとナリーがそれに着き従った。

ジゴラの帰還

翌朝のまだ太陽が昇り始めるまえから、シエラの街の北門は馬を引き連れた騎士団たちでにぎわっていた。

「では、留守のあいだ街のことは頼むぞ」

ウィリアムが言うのとエドは胸に拳を当てた。それから言葉を発さずに、うなずいてみせた。それを見た団長もうなずき、馬にまたがった。

「それでは出発する」

団長の号令で他の騎士たちも馬にまたがった。彼を先頭にぞろぞろと騎士団たちは門をくぐりはじめた。

「フレッド！」エドがひとりの騎士に声をかけた。細身の騎士が振り向くと彼は言った。「団長の安全はお前に任せるぞ」

フレッドと呼ばれた騎士は親指を立ててみせた。「任せておけて。団長の身は己の身を犠牲にしてまで守るさ」

「できればふたりとも無事な姿で再開して欲しいもんだな」とエドは言い、フレッドが列に従って門をくぐるのを見届けた。

エドは列の最後尾が門の向こうに見えなくなるまで、いつまでもその行進を見つめていた。

イシュタ“ジゴラ”カイゾーラの虫の居所は最も悪い場所にいた。屈辱を受けたのだから仕方がない。しかもそれがおしめの取れたばかりのガキに与えられた屈辱だとしたら尚更だ。彼は恐怖を味わったばかりか、戦意まで消失させられたのだ。

だがジゴラが恐れたのはあのガキなどではない、断じて。

そうだ、おれが恐ろしいと思ったのはあの剣なのだ。

葉の形をしたあの忌々しい剣。あれの魔力をその肌にまざまざと感じたのだから、彼は戦意を喪失させたのだ。あのべつとりと張り

つくような嫌な力を。

ジゴラはシエラの街の脇にある人工の森林を歩きながら、頬の傷に手を当てた。まだずきずきと痛む。

この屈辱、晴らしてやる。

ジゴラは執念のような決意を何度も心でくりかえした。魔女から教わった妖術でいとも簡単に――ここが重要だ“いとも簡単に”――警官たちの手から脱出できたものの、一瞬だけでもやつらに両脇をがっちり押さえられたのだ。

彼はクロニウツと呼ばれる石を手にとっていた。その闇にも似た黒くて重たい質感の石は、ジゴラをある方向へと導いているようだった。じっさいにその石はジゴラの命令通り、彼に屈辱を与えた少年がいる方向を指し示している。

その方向が我が故郷、シエラとは。

石が引つ張る方向へと歩みを進めると、彼はふたつの影に出会った。意外な遭遇に彼の顔には驚きが広がり、続いて笑顔が広がった。「本当にいたよ」ふたつの影もまた驚きを示し、そのひとつが言った。

「クルーデにモーシャじゃないか！」ジゴラは両手を広げてみせた。「どうしたんだ、こんなところで！」

モーシャは細長いコーリン草をくわえ、それを下でころころと転がしながら、特有の甘い汁を吸っている。そのとなりでチビのクルーデが屈託のない笑顔を浮かべてジゴラの質問に答えた。「協力者になりえる人物がここから街にやって来るとあの人が言ったんです。我々のよく知る人物だと。まさかあなただとは」

ジゴラは目をしばたたかせた。「あの方だって？」

「ヴァルマーという魔導士です」

「魔導士だあ？」

「そうさ」モーシャはコーリン草をぺっと吐き出した。「相当の腕だぜあいつは。あんたに逢わしたいんだ」

「そんなにすごいやつなのか？」

「そりゃあ、もう」クルーデが目を輝かせて言った。

クルーデのようすから相手の実力を察することができたが、ジゴラは訊かずにはいらなかった。なにより昔から自分のこと知っている人間の口から聞きたかったのだ。

「そいつはおれよりすげえのか？」

ふたりは顔を見合した。その表情からも答えはわかったのだが、モーシャが言った。「ああ、確実に。あんたも会っただけで、わかるぜ」

そうか、それは楽しみだ、とジゴラは思った。昨日の今日で自分よりも実力のある魔導士をふたり知ることになるとは、少しばかり悔しい思いはするが、それでもクルーデとモーシャにそう言わしめる相手にお目にかかりたいと思っていた。

「よっしゃ、そいつのところへ連れって行ってくれ」

シエラの街の中央からやや南東に進んだところに、公民の為の集会場及び宿泊施設（もうちょっとマシな名づけかたはなかったのか？　これじゃあまるで建物の説明みたいじゃないか）はあった。敷地は広く、三階建ての安物モーテルのような白い建物は普段は使用されていない。街で重要な集会があったり、大切な客人の為に寝泊まり用の客室を空ける以外は、いつも沈黙を保つように閉ざされている場所だった。

その建物がいまは全面的に開放されており、人の出入りもあった。ジゴラは一瞬、自分の記憶違いかと思った。公民の為の集会場及び宿泊施設（やはり説明くさくてジゴラはこの名前が好きになれなかった）は別の場所にあったのを自分が勘違いしたものだ。しかし彼の目の前にある建物は、まさに彼の知っているそれだった。

これはいったいどういうことだ、と言いたげな目を向けたが、モーシャはそのうちわかるさという仕草をしてみせただけだった。

ジゴラは顔見知りを発見し、被っているフードを深くした。男はジゴラに気づいていないようで、一瞥をくれることなく通り過ぎた。

ジゴラたちは集会場に入ると、二階へ上がることなく建物の東側へと向かった。一番東の小さな小部屋には木製の重々しい感じの扉があつて、丁寧に塗られたニスによってぴかぴかと上機嫌に光っていた。

「こちらです」クルーデが扉を開け、ジゴラに入るようにうながした。そのあとをモーシャが追い、クルーデ自身も入室すると扉を閉めた。

ジゴラはフードをとつばらうと、目を凝らした。彼の目が慣れるまでに時間を要した。光を存分に取りこみ、白を基調とした廊下とは違い、カーテンは閉ざされ、照明はできる限り落とされていたからだ。しかも暗い色の家具が残りの光を吸収しようと躍起になっているようだ。

ほどなくして目が部屋の暗さに慣れてくると、なにも置かれていないデスクの腕で両手を組んでいる男を目撃した。この暗さの中でもフードを被っていて目が隠れているが、その視線がしっかりと注がれているのを彼は痛いほど感じていた。

「君がイシュタ・カイゾーラだね」フードの男は酷くゆっくりとした口調で言った。「わたしがヴァルマーだよ。まあ、座ってくれ」デスクの向かい側には椅子がひとつ設置してあり、ジゴラはそこに座った。クルーデとモーシャはジゴラの背後に立った。

「君の話をうしろのふたりから聞いたよ。一度、話がしたいと思っていたんだ」

「ほお、それはなんでまた……」ジゴラは自分の声が震えて聞こえないかとびくびくしたが、そうではなくて安心した。それほど彼は畏怖の念を感じていたのだ。この男はただものではない。そう確信した。いや、彼の目の前に座った瞬間から、それを知ったのだ。

「君がローゼスタスの弟子だったからだよ」男は言った。ローゼスタスの名が出て、ジゴラはとくに驚きもしなかった。その名はあまり知られてはいないが、古の魔女といえはこの大陸に彼女を知らぬものはいなかった。生ける伝説だ。いまではもはや、本当に伝説

でしかなかったが。

「そのローゼスタスと親しい君に訊きたかったんだが、どうだね、君から見ていまの古の魔女の実力は」

「すげえとは言い難いな」ジゴラは正直なところを話した。「そりゃあ、彼女は俺に妖術の類いを教えてくれたし、この街の人間にとっては脅威となる存在に違いない。だが、年を取り過ぎている」

「そうだ。そのところは我々も承知している」

「ほう、そうかい。しかしなんだって、古の魔女のことを気にかけている。それにこの街でなにをやっているんだ？」ジゴラは一葉の剣から受けた傷に触れた。

「我々には計画があり、俺の上司はぜひともその古の魔女の力を手中に収めたいと思っている。伝説ではなく、本物の彼女の力を」

「だがそいつは無理な相談ってもんだぜ。あんたの上司とやらにも言ってやんな。いくら魔女でも老いるスピードを抑えられても若返るなんてことはできない」

「それができるんだな」ヴァルマーは口もとを吊りあげた。「そのための道具は渡してある。だが彼女は、それを使う気はあるが、非常にゆっくりとじていてな。なんというか、楽しんでるんだ」

「ああ」ジゴラは十分わかってるさ、と大きくうなずいた。古の魔女はなぶり殺しを好む。なにを成す時にもゆっくりとそれを楽しむ性癖があるのだ。

「だから親しい君に彼女を監視、それに説得して欲しいんだ」

「はやく昔の力を取り戻してくれと？」ジゴラはヴァルマーの言いたいことがをしっかりと把握していた。

つまり彼は古の魔女に若さを与え、その見返りとしてその力を存分に発揮してもらいたいのだ。

だが、いったいそこにはどんな計画があるのだろうか。ジゴラは訝しんだ。

「そういうことなら、わかった。あんたがなにをしようとしているのか、すげえ興味があるからな。あんたからは俺と同じにおいがす

る」

ヴァルマーの目がぱつと輝くのをジゴラは感じた。じっさいに見えたわけではないが、そう感じた。そしてまた、傷口に触れた。

「痛むのか？」ヴァルマーが興味深そうに訊いた。

「ああ」ジゴラは答えた。

「なかなかしつこい魔力のようだ」とヴァルマー。

「そうなんだ！」ジゴラは同意をするように両手を広げた。「ガキが持っていた妙な剣の魔力だ。まったく奇妙な剣だったぜ。なんせ、一枚の葉っぱの形をしているんだからな。そいつが放つ風ときたら、冷たい真空のように鋭い！」

それを聞いて、ヴァルマーの口もとが吊りあがった。今回はじっさいに見えた。

「そいつは一葉の剣だな」

「なに？」

「葉の形をしていたのなら、一葉の剣だ。風の精霊神シルフィーンが作りし最初の武器のひとつ。それが放つ風はすべての風を支配するという」

ヴァルマーはジゴラの傷ついた頬を撫でた。まるで恋人にそうするように。じっさいには彼が撫でたのはその傷だったが。

「その魔力をその身に受けたんだ。君は幸運だ」ヴァルマーは言った。

どうだかな。ジゴラは思った。味わったのは恐怖と屈辱感だけだ。たしかにこの雪辱を晴らせば、気分は天気の良い朝に特大の糞をした直後のように清々しいものになるだろう。そういう意味では幸運なのかもしれない。

「わたしはその剣に興味があつてね」とヴァルマー。

ジゴラはにっと笑った。こらえられなかったのだ。

「おれはガキのほうに興味がある。そいつを追ってここまで来た。やつは仲間とともにこの街にいる」

それを聞いて、今度はヴァルマーが笑った。

イシュタ・カイゾーラが出て行ったあと、ヴァルマー・ツアルサーはひとりたたずんでいた。ジゴラから拝借したクロニウツという石は微弱な力で目標とした相手の方向へと引っ張ろうとしている。すべては順調だ、と彼は思う。

その順調なところに幸運がひとつ転がり込んで来た。
一葉の剣だ。

ヴァルマーは子供のころ、四つの始まりの武器についての物語に熱中したものだ。四人の精霊神によって作られた四つの武器。四元素の始まりとされている。その威力は伝説の名にふさわしく強大で、それを手に入れば敵はなくなるという。それを手に入れた。ヴァルマーはうち震えるような欲望を感じていた。

そのまえに持ち主を確かめる必要があるだろう。そして確実な方法で剣を手に入れてやる。そう確実に、だ。

すべては順調なのだから。

出現

マコ、アル、リアの三人は街を西門から出て、前方を広がる森へと向かって歩みを進めていた。クロネは診療所で治療中で、そこでお留守番だ。

「本当にこんな方向にヴァイオレーターがいるの？」リアが訊いた。「わからん」アルがきっぱりと答えた。

「じゃあ、なんでこっちに来たのよ？」

その問いに答えたのはマコだった。

「ヴァイオレーターが街を捕食の場としているのなら、この近くに潜んでいると思うんだ。この近くにあの巨大な体を隠せる場所といったら、あの森しかないってわけだよ」彼は前方の森を指差した。

「そういうことさ。いまからあの森を搜索するんだ」アルが締めくくった。

「じゃあ、そこに確実にいるんじゃない」リアが言った。

「ほぼ確実さ」アルが訂正した。

「同じよ」

「確実とほぼ確実じゃ、天と地ほども差がある」とアル。「ほぼ確実と簡単に口にできるが、確実となると人は慎重になるものさ」

しばらく歩き、森が目のまえにまで迫ると、北から森の前方に沿ってこちらに向かって来る人影がふたつ見えた。

「あら、見ない顔ね」影のひとつは少女だった。驚くほど細い金髪を腰まで降ろしている。もうひとり青年で、瞳は夜空よりも濃い青色をしていた。アルはその瞳から吸いこまれるような感覚がするのに気づいた。まるで魔法のようだ。

「わたしはリルネリア・ボーンズ」少女はスカートの端をつまんで深々とお辞儀をした。「そこ、シエラの街に住んでるわ」

「俺たちは余所者だが、わけあって街で世話になってるんだ」アル

が言い、自分の名前を告げた。

「まあ、あなたたちなのね」リルネリアは目を輝かせた。「噂になってるわ。ジョンが運んだ怪我をした少女はカローラ嬢にそっくりってね」

「それ聞き飽きちゃったな」とリア。「アタシはリーアムス・ベルドラドね」ついでにと名前を告げる。

「よろしく」とリルネリアはまたもスカートの端をつまんでお辞儀した。

「僕はマコ」

マコの自己紹介も同じ仕草で少女は受け入れた。

「俺はロイ・ハーグマンです」最後に青年が言った。とても静かな物言いだった。アルはこの青年に少し違和感を感じていた。それはただ青年の物静かさだけなのかもしれない。それが彼の肌からあふれ出す雰囲気から感じ取ることができた。まるで人の気配を感じて草むらで息をひそめている虫のようだとアルは思った。

「ところでこんなところを歩いてて、大丈夫なのか？ ヴァイオレ

ーターがひそんでいるかもしれないぞ」

「それはないわ」リルネリアは否定した。

「なんでわかるのよ？」リアがたずねた。

「この森にヴァイオレーターはいないの。いるのは古の魔女だけ。この森はその魔女のテリトリーなのよ」

「だったらなおさら危ないじゃない」マコは心配そうに言った。

「ここなら大丈夫よ。森の入口くらいまではね。魔女はそんなに多くの関心事を持っていないのよ。でも奥に行くのはお勧めできなわね」

アルは森の奥を見た。木立の間から見える闇には、たしかに魔女が好むような何かがありそうだった。

「魔女がヴァイオレーターを操っているとは思えないのかい？」アルが訊いた。

「それはないわ」リルネリアはきっぱりと言った。

「どうしてわかるのよ？」今度はリアがたずねた。

「魔女は街を脅しこそするけど、襲いはしないのよ。そうやって街から貢物として食料を得ているの。だから街を破壊するのはデメリットにはなるけど、魔女にとってなんのメリットもないわ」

リルネリアは魔女の存在が街にとっては当然だと言うように話していた。まるで魔女の存在がそれほど大した脅威ではないかのよう

に。
「そんな魔女、やつつけちゃえばいいじゃない」リアが当然のごとく言った。

「無謀よ。魔女を怒らせれば、街が消えちゃうかもしれない。それだけの力を魔女は持っているのよ。それに、魔女ひとりを養うくらい

の食物なら、街にとって痛手にもならないもの」
悪魔に手を出さねば崇られることもなし、か。アルは思った。それどころか魔女への貢物は街にとっては納税のひとつでしかないのかもしれない。アルはこの街のいたるところに広大な畑があるのを目にしていた。それらはすべて防壁の中にあり、どの畑にも作物が実り、すぐにきたる収穫を待っているかのようだった。それに防壁外の北東には遊牧地帯が広がっているとキンバリー長官から聞いていた。つまるところ、街は豊かなのだ。

「つまり、こっちを探しても無駄ってことだね？」

アルの質問に対して、リルネリアは目を丸くした。

「まさか、ヴァイオレーターを探しに来たわけじゃないでしょうね？」

「そのまさかよ」リアが言った。

「まあ、わたしに気をつけろと言っておいて、危険に片足どころか腰まで浸かっているのはあなたたちのほうってわけね」少女は半ば呆れ気味で言った。

「なににせよ、君たちも気をつけることだね。街の外は危ないし」

アルが言うとしルネは大丈夫よ、とうなずいた。

「わたしには守ってくれるナイトがいるしね」

リルネが笑いかけると、ロイは非常に小さな笑みを返して少女の腰に右手を当てた。

「ご心配なく」

ひどく小さな声だったが、そこには絶対の自信があるようだった。魔法のことは気になったが、そこに収穫がないとわかるとアルは踵を返した。それにならってマコとリアが彼のあとを追う。

「しばらく街に滞在することになるから、また会うかもね」振り向きざまにアルが言った。

「そうね、また会いましょう」

リルネが手を振って見守るなか、三人は街に戻って行った。

「あの森にいないのなら、いったいどこに潜むっていうんだろうな」三人はすぐには街に入らず、城壁をぐるりと時計周りに東門へと向かった。南西には背の高い草が群生している草原があり、ずっと北は果てしない大地と空が広がっていた。城壁の南東の角にまでさしかかると、放牧場らしき緩やかな丘が見え、家畜らしき影が点々としていた。東の方向は平地が続き、遠くの方に崖らしき影が見えるが、遠すぎてアルたちの目には定かではなかった。

ぐるりと周囲を歩いてみても、やはり巨体が隠れられそうな場所は森しかなく、いったいどこにヴァイオレーターが隠れているのかアルには見当もつかなかった。

「あの子が間違ってるって可能性もあるわよ。やっぱりアタシは魔法が怪しいと思うわね」アルが口にした疑問に答えるようにリアが言った。

「ボクはそう思わないけど」マコが言った。「だってやっぱり、魔法がそうする理由がわからないもん」

「アンタねえ。魔法が考えることなんて、わからないわよ。ただ街の人間を困らせて遊んでるだけかも」

「そのせいで街の収穫が減ったとしても？」マコが反論する。

「そのせいで作物が減っても、自分の魔力で脅して去年と同じ分を

無理やり請求するでしょうね」

その点に関してはリアが正しいとアルも思った。だがヴァイオレーターを操ることなどできるのだろうか？ 魔女の妖力を使えば、あるいは可能なものかもしれない。

東の壁に沿って歩き、東門が小さく見えてくると、アルは異変に気づいた。東側の大地を黒い巨大な影がこちらに向かって闊歩してくる。ものすごい速さだ。

上空には悠々と翼を広げた巨大な竜がシエラの街を目指して飛んで行く。そいつが三人の頭上を通過した。体は全身が銀一色で、太陽の光を執拗に撥ね退けている。

「そんな、いつのまに！」リアが声をあげた。

「まさか、あの崖の向こうから飛んできたっていうんじゃないだろうね」とアル。「あの崖までいったいどのくらいの距離があるっていうんだ？」

「うんと遠くだよ」マコが答えた。「そんな、ついさっきまで影も形も見えていなかったのに！」

この雄大な大地の中で三人に気づかれずにここまで接近するなんて有り得ないとアルは思った。それにさきほど東の方面を見渡した時、ヴァイオレーターなど見る影もなかったというのに。

「とにかく急ぐぞ！」

アルは走り出した。

撃退

マコの目に映るそれは驚くほどのでかぶつだった。

アルのすぐ後方を走っていたマコは目測でヴァイオレーターはアルの五倍の高さはあるだろうと予測した。首もまた体に比例するように長く、のばせば欲しいものをつかみとれるほどだった。ドラゴンのようなそいつは硬い鱗を持ち、翼は体の二倍の大きさもある。

そいつは大きな翼を広げ、後ろ足で体重を支えながら、片手で家の壁を壊した。それを満足そうに眺めると、今度は逃げ惑う人々に首をのばした。ひとりの男に狙いを定め、上半身に食らいについて男の体を持ち上げた。躍動する太く長い首が右に揺れ動き、男の体がまっぴたつに引き裂かれた。下半身が崩壊した家屋の壁に叩きつけられて落ちる。ヴァイオレーターは残った上半身を吐き出し、それを足で踏みつけると勝ち誇ったように天に向かって雄たけびをあげた。

他にも犠牲者がいるようだ。いくつもの死体が転がっている。だが、食い荒らされた形跡がまったくない事にマコは気づいた。そして妙だと思った。ヴァイオレーターは捕食者だ。人間を主食とする質の悪い捕食者。人を襲う時は食う。それがヴァイオレーターについて知られている事実であつたし、その様子を目の前で見た事だつてあつた。けれどもマコはこのように人を殺して弄ぶヴァイオレーターを見た事はない。

まるで殺しそのものを目的としているようだ。

女性が逃げ遅れているのが見えた。この時点ではマコたちはまだヴァイオレーターから遠く離れており、その様子は小さくしか目に映っていなかった。だが、はつきりと映っていた。女性が腰を抜かし、這うようにして逃げているのを。その女性にヴァイオレーターが狙いを定め、首を女性にのばすのを。

慌てて一葉の剣に手をのばすが、間に合わないとなっていた。

風の刃を発生させて飛ばしたところで、刃が到達する頃には女性は殺されているだろう。この距離からでは、アルの力も發揮できない。ましてや近距離タイプのリアなど、もっての他だった。

事実はいつも冷酷なのだ。女性は助からない。

だが女性は助かった。

彼女を助けたのはダニーだった。アルたちをクロネのいる病院まで連れて行ってくれた自衛騎士団の団員だ。女性を庇うように飛び出し、剣で牙を受け止めたのだ。

彼の剣がヴァイオレーターの開け放たれた大口を押すが、どうみても劣勢なのはダニーであった。彼の体は後方に押し出され、両足が二本の小さな轍をつくった。彼の目と鼻の先には無数の歯がその尖った先端を向けている。

これはあまり良くない兆候のようにマコには思えた。このままではヴァイオレーターがダニーの剣を弾き、牙が彼の肉に食らいつくのも時間の問題だった。

時間の問題ではあったが、その時間はたっぷりと余裕を残してくれているようだ。アルが行動を移すのに十分な距離まで移動できる時間が。

アルはダニーの背後、数メートルの距離で、木製の短剣を腰から抜き、おもむろにそれを地面に突き立てた。細い蔓が地面から生え、ヴァイオレーターの首に絡みついた。その蔓はヴァイオレーターの動きを完全に封じるには不十分だったが、ダニーを救うのには大いに役立った。

ダニーはヴァイオレーターの首から逃れると、アルがいる場所までうしろに飛び退きながら移動した。

ヴァイオレーターはアルの蔓を引き千切って、鬱陶しそうに首を振り、それらを払った。

「助かったよ。驚いたな、君たちが――」ダニーの横をリアが通り過ぎ、彼の注目はリアの背中に注がれた。「おいおい、大丈夫かい。あんなのにひとりで突っ込んで行って？」

「大丈夫だと思う……」一応答えてみたものの、アルにはそれが本当かどうかわからなかった。というより、ほとんど大丈夫ではないだろうと確信していた。

だから彼はマコを呼ばわった。彼は心得たとばかりにうなずくと、一葉の剣を鞘から抜いた。それからリアの背中を見守るようにして彼女を追いヴァイオレーターに近づいた。

まずはリアに攻撃させて、相手の出方を伺おうと思った。というより、いま攻撃するき満々のリアの邪魔をするとあとが怖い。マコはにじり寄るように足を擦って歩き、いつでもリアのサポートができるようにした。

リアは炎をその拳に纏い、ヴァイオレーターの鼻っ面を殴りつけた。それから顎の下を膝で蹴りあげた。炎が弧を描いて立ちのぼり、ヴァイオレーターは仰け反った。それでもリアは間髪を入れずに、別の手に炎を纏わせながら高く飛びあがると、ヴァイオレーターの顔を殴った。

リアの一連の攻撃はまったくと言って良いほど効いていない。炎の熱に驚きはしたものの、大したダメージにはなっていないようだ。リアは着地をし、両膝を折り曲げて片手を地面に着いたままヴァイオレーターを見あげた。それから両手の拳に視線を落とす。ヴァイオレーターの硬い皮膚を殴りつけた両の拳は、皮が擦り剥けて、血が垂れているほどだった。

ヴァイオレーターが顔をリアに向かって振りおろした。鼻をまっすぐ下に向け、リアを押しつぶそうというのだろう。彼女はそれを間一髪のところで転がって逃げると、アルのいるところまで走って戻った。

マコとすれ違う時に、「もう、アンタに任せるわ!」と怒り心頭に言った。

アルのところまで戻った彼女は、出血した拳を再び見つめてさらに怒りの炎を燃えあがらせた。

「なんであんなに硬いのよ? おかしいじゃない!」

「俺に言われても……」キツと睨まれたアルは困り果てた様子で言った。

ヴァイオレーターの虚ろな目がマコを睨みつけた。来るなら、来い。その目は言っていた。

真上に昇る太陽の光を浴びて一葉の剣がきらりと光っている。ヴァイオレーターの体も銀色にきらりと光っている。

ヴァイオレーターは牙と目を備えた首をマコに向かってのばした。あまりに唐突で、あまりに素早すぎたため、マコは危うくそのぎざぎざに並んだ鋭利な歯に引き裂かれるところだった。彼はすんでのところで体を反応させると、体を左向きに回転させながら右に避け、のばされたヴァイオレーターの首に向かって一葉の剣で斬りつけた。見事な体さばき、見事な剣さばきだった。

風の刃を纏った一葉の剣がヴァイオレーターの首もとを斬り裂いた。硬い皮がぱっくりと割れ、紫の血が吹き出した。ヴァイオレーターはうしろに仰け反って雄たけびをあげた。震える空気が耳をつんざきそうだった。

マコはそのけたたましい叫びに怯むことなく、剣を横に振った。風の刃が放たれ、相手の胸部に真一文字に走る傷を残し、ふたつの傷は十字型に重なっていた。当然、そこからも流血した。

ヴァイオレーターは距離を取って、マコの様子をうかがった。マコは勝機を感じ取り、一步また一步とにじり寄った。ヴァイオレーターがそれに負けじと後退する。

マコは唐突に前に向かって走った。一葉の剣を構える。

ヴァイオレーターは剣から発せられる風を警戒し、身を低くした。マコは左手から魔力を放出し、ヴァイオレーターの上空に大量の岩を発生させた。岩は重力に拘束され、たちまちにヴァイオレーターに降り注いだ。

ヴァイオレーターはだまし討ちに驚き、怒りの声をあげた。巨大な翼をばたつかせると、周囲の空気を巻きこみ、風が吹き荒れた。荒れ狂う風がそこら中の物をなぎ倒す。

怪物は瓦礫を吹き飛ばしながらその巨体を浮上させた。街を囲む防壁の見張り塔よりも高く上昇し、見あげるマコを悠々と見おろしている。

見えないなにかが回転し擦れ合うような音がヴァイオレーターの中から発生した。その音は初めはゆっくりと小さな音だったが、まるで回転数を上げるかのように甲高く、大きくなっていった。

「おいおい、こついはやばいぞ。奴さん、相当お怒りじゃないか！」アルが叫んだ。

「なんなんだ、あれは？」ダニーが言った。

「あいつは相当やばい」とアル。「はやくみんなを避難させるんだ！」

マコの戦いを見ている野次馬の姿は少なくなかった。まるで救世主が登場し、自分たちの命は安全だと思いこんでいるようだが、それは間違いだ。

ヴァイオレーターは暴君と呼ぶに等しく、まわりのことなどおかまいなしに暴れまくる。特にあの元素をむりやり奮い起こして発生させるビームの破壊力は、思い出すだけで恐ろしいものがあつた。

その攻撃をヴァイオレーターがしようとしているのだ。

だが、ダニーが行動に移る前にマコが行動を起こしていた。

いまや摩擦音はまわりのあらゆる音を奪うほどだった。ヴァイオレーターの中の振動する元素が禍々しいほどの紫色の光を放っている。

マコは一葉の剣を振りあげており、その剣を地面に向かって叩きつけた。すると風が発生し、マコの小さな体を上空へと押しあげた。

マコの体はヴァイオレーターの顔の高さで止まった。

浮力が落下へと変換されるほんの一瞬、マコ体は上昇の頂点に留まった。

ケリを着けるには十分な時間だ。

ヴァイオレーターは空中で自由の利かないマコを格好の獲物だといわんばかりにビームで焼き尽くそうと、鋭い牙がびっしりと並ぶ

口を開いた。

だがマコのほうが行動は早かった。

彼の左手に魔力が溜まり、赤と緑の二種類の光を放っている。炎と緑の元素がマコの魔力であるエーテルに反応してそれぞれに輝いているのだ。

「嘔吐に効くお薬だよ！」

マコは赤と緑のふたつの光をヴァイオレーターの開け放たれた口に放り投げた。

その瞬間、マコの体が落下を始めた。

怪物の口の中で炎のエLEMENTが燃えあがり、風のエLEMENTがその燃料となった。炎は爆発に変わり、まわりの元素をあらかた吹き飛ばした。それはヴァイオレーターによって拘束された元素も同じで、紫色の光はたちどころに消えた。

代わりに紫色の液体がヴァイオレーターの口からほとばしった。

着地したマコは即座に後方へとさがり、ヴァイオレーターの紫色の血が降りかかるのを回避した。

爆発によってヴァイオレーターの口は見るも無惨な姿に変わり果てていた。下顎は粉碎され、もはや閉じることができず、だらりと垂れさがっていた。血が滴り落ちている。

ヴァイオレーターが血を吐き出した。爆発のせいで、内蔵がいかに残っているのだろう。

怪物は空中で方向転換すると、退散を始めた。

だがマコはヴァイオレーターを逃がす気なんてなかった。一葉の剣で発生させた風をヴァイオレーターに向かって飛ばした。一葉の剣が発生する風は他のあらゆる風を支配する。ヴァイオレーターの羽ばたきによって発生し、怪物を宙に浮かせている風も例外ではなく、一葉の剣が放った風はたちどころにそれを打ち消してしまった。

浮力を失ったヴァイオレーターは一瞬、落下をしたが、怪物は執念で立て直し、上昇を始めた。だが、もはや飛ぶ余力が残っていないらしく、防壁の上部を叩き壊しながら、ヴァイオレーターは街の

外部に落下してしまった。

ヴァルマーはヴァイオレーター撃退の一部始終を目撃した。というより、盗み見ていた。その目は始終、マコの一葉の剣を追っていた。まるで視線を奪われるように。じっさい彼はその剣に魂を奪われていた。

ヴァルマーは剣がヴァイオレーターの鋼鉄の皮膚を斬るのを見た。そしてにやりと笑った。うわさには聞いていたし、想像もしていた。しかし、これほどまでとは。ヴァルマーはますます欲しくてたまらなくなった。

そして俺は欲しいものはなんでも手に入れる主義だ。ヴァルマーは思った。一葉の剣は偉大な一步を踏みだすための計画の遂行と同時に彼が手に入れなければならないものなのだ。なぜならば一葉の剣がここへやって来た事は偶然などではなく、この俺の手に握られる運命だからだ。

ヴァルマーはマコがヴァイオレーターの元素ビームの攻撃を防ぐのと同時に、撃退する様を目撃した。

眉が吊り上がる。

ほう、あんな小さな子供が元素と魔法をあんなにも巧みに使いこなすとは。

これは感心せざるを得ない才能の発揮ぶりだった。

空気中には元素は四つある。炎、風、水、土の四つだ。そして魔法はこの四つの元素の組み合わせによって、行く通りのエレメントを作り出すことができた。

例えばたったいまマコがしたように、炎と風の元素を混ぜ合わせれば、爆発のエレメントをつくることができる。

水と土が樹木、風と土が雷といった具合だ。

相手がただのガキだと思っていたが、あれほどの使い手が相手となると、少々骨が折れそうだった。

一葉の剣を手に入れるのは大きな仕事になりそうだったが、なに、

大した問題ではない。

計画に関する項目がひとつ増えるだけなのだから。

疑惑

不可解な出現は不可解な疾走へと幕を転じた。

マコたちはトドメを刺すべく、西門を出てヴァイオレーターが落下した地点に向かった。だが、そこにはヴァイオレーターの姿はなく、あの紫の血が小さな水たまりをつくっているだけだった。

「一体、どうなってるんだ？」アルは頭を掻いた。

誰もヴァイオレーターが飛び立つのを見ていない。

マコはかがみ込んで、血だまりをくまなく調べた。ヴァイオレーターが移動した形跡が残されていない。血だまりのまわりに血が垂れた跡もなく、その場で忽然と姿を消してしまったかのようなのだ。

「あいつはどこへ消えちまったんだ？」住民のひとりが言った。彼は恰幅の良い体型と顔立ちを持ち、大きな鼻は顔のおよそ四分の一を占めていた。

「どっかへ飛んで逃げちまったんだよ」隣にいた男が答えた。

「じゃあ、どっちの方向へ飛んでいったんだよ？ 見ろ、血が垂れてない」

「それは、知らねえよ……」

その疑問をさすがのアルでも解決できそうになかった。

ただわかることは、これが良い兆候ではないような気がするのだ。

アルは再び頭を掻いた。

「大活躍だったようじゃな。まったく、ヴァイオレーターを追っ払ってくれるなんて！」

夕食の席でキンバリーが思い出したように言い、嬉しそうに笑い声をあげた。

「さすがマコだわ」クロネが言った。「ひとりで追い返したんでし

よう？ 是非ともその話を聞きたいわ」

「そんな大したことじゃないよ。それにあいつはまた来ると思う」
マコは先ほどから考え事をしているようで、食事を口に運んでいたものの、その進み具合はきわめてゆっくりだった。

「そういえば、ヴァイオレーターについて奇妙な噂を聞いたのじゃが……」キンバリーが不安そうに言った。

「ああ、そうなんだよ」

アルはステーキの切れ端を口に放り込んだ。それからキンバリーに人差し指を立てた手向け、待つように指示すると、咀嚼した肉を果実酒で流し込んだ。

「ヴァイオレーターは突然現れて、突然消えた。それも数秒前にはそこにいなかったのに、いつの間にか現れていたんだ。それが意味するのはひとつしかないと思う。つまり、ヴァイオレーターは何者かによって召還されている」

「しかし、そのようなことが可能なのじゃろうか……」

「わからない。あり得ないことだと思う。ただそうとしか説明がつかないんだ」アルは頭を抱えた。

「けど、わからないなあ」とマコ。「もしヴァイオレーターが本当に誰かの手によって召還されてるとして、一体、誰が得をするんだろう？」

「心当たりならある……」キンバリーが言った。

「誰なの？」マコが身を乗り出した。

「ヴァルマーという魔導士とその一味だ」

「ヴァルマーか。いかにもといった名前だな」そう言うとアルは果実酒を口に含んだ。

「ああ。そいつらはヴァイオレーターが初めて現れた時に現れて、追い払ってくれたんじゃない」

「なんだ。良いやつじゃない」リアが言った。

「初めはむしろそう思ったよ。そして札の言葉を述べると、やつらはヴァイオレーターを退治してやるからといって、その間の宿と

報酬を要求して来たのじゃ。わしはためらった。ヴァイオレーターを退治してもらえるなら、宿の提供と報酬の支払いなど大した問題ではなかった。じゃが、その申し出をしている時のヴァルマーの目ときたら、明らかにわしらを見くびり、そしてなにかよからぬことを考えておる時の目じゃった」

キンバリーは一旦、口をつぐむと、震える手で果実酒を口に運んだ。

「半ばむりやりに魔導士たちはこの街に留まり、好きほうだいやっておる。暴力沙汰も起こして、何人かはひどい怪我を負った。

「それはひどいわね！」とリア。

「それを理由に追い出せなかったのかい？」アルがたずねた。

「ヴァルマーは決して上にある立場を崩さなかった。我々にはヴァイオレーターに対抗する術がないことを知っており、またやつらに抵抗できないことも知っておる」

「許せないわね」クロネが言った。「でもなんでまた、ヴァイオレーターをけしかける必要があるのかしら？」

「もし本当にヴァルマーという魔導士がヴァイオレーターを操っているとして――」アルが答えた。「考えられるのは報酬目的だろうな。そうやって色々な街をまわっては報酬で荒稼ぎをしているのかもな」

「しかしわからないのは――」キンバリーが言った。「やつらは二回目の襲撃でも、ヴァイオレーターを取り逃がしておるのじゃ」

ふむとアルは考え込んだ。そして口を開いた。

「三回目の襲撃の時には姿も現さなかった」

食事が終わって片づけを終えたとリルネはこっそりと裏口から抜け出した。夜の空気は冷えていたが、彼女の体の中は少し熱を帯びているようだ。胸の高鳴りは少し抑えなければならなかった。

彼女が角にさしかかった時、聞き覚えのある声が彼女を呼び止めた。

「リルネ」

路地が入りこむ場所に目をやると、塀の陰に青年がいた。細身の体が闇の中にずっと立ち、眼窩には濃い青色の瞳を宝石のようにはめこんでいる。――なんて美しいんだろう。とろけてしまいそう。リルネは少年のもとに駆け寄った。

「調査はどうだった？ あれから良い発見があったのかしら」リルネの声は少しうわずっていた。

「順調だよ、新たな発見もあった」

リルネがこの青年について知っていること。それは彼が北の王都から昆虫の生態系調査に派遣されたということ。それもひとりで。彼はまだ見習いで一人前になる試験としてここに派遣されたのだと説明した。あやしいもんだ、とジョンはそれを聞いて言っていた。ジョンにとって彼は敵に見えるようだ。彼の名を聞いただけで、怖い顔をするから。

「ロイ」リルネは青年の名前を口にした。

「なんだい？」

「会いたかったわ」

「ぼくもだよ。なんだかそうする必要があるように思うんだ」

「そうね」

彼女にとってロイの言うことなど、どうでもよかった。ただその声さえ聞きさえすれば。たとえその口から発せられるのが呪いの言葉であったとしても。ああ、たぶんわたしはロイのことが好きなんだ。愛している。

「君はぼくにとって大切な人のような気がするんだ。君に出会った時から。心の中でそう思っている」

その言葉を聞いてリルネはうれしくなって、ぱっと輝くグレーの瞳をロイに向けた。あと数日もすれば満月へと変貌をとげる月の光に照らされて、ふたりの視線がキラキラと輝いている。

「ねえ、キスをして」月明かり照らされるリルネが言った。

ふたりはそうした。唇をやさしく重ね合わせ、お互いの感触を確

かめ合う。しっとりとした彼の気持ちが、唇を伝わって体内に入ってくるようだ。とリルネは思った。

「もうそろそろお別れをしなきゃ、もう時間だ」唇が離れた時、ロイが言った。

「ああ、ロイ。行かないで。早すぎるわ」リルネはさすがのようにロイの腕をつかんだ。

「だめだよ、君だってこっそり抜け出して来たんだろ？ お母さんが心配するかもしれない」

「そうね……」リルネは少し考え込んだあと、残念そうにロイの腕を放した。

「じゃあ、ぼくは戻らなきゃ。夜行生物に関する調査もしなきゃいけないんだ」

「大忙しね」リルネは言った。

「そうだよ」ロイは笑った。「でも一人前になるには必要なことなんだ。じゃあ、もう行かなきゃ」

ロイは名残惜しそうに来た道を引き返しはじめた。

リルネは去って行く彼の背中をいつまでも見つめていた。

ジョンは早鐘を打つ胸を押さえながら、壁にぴったりと背を貼付けていた。

初めは背徳感のようなものを感じていたジョンだったが、それはやがて怒りに変わった。

そうだ、背徳を感じなければならぬのはリルネのほうじゃないか。俺はただ目撃しただけだ。

ジョンは夕方エド副団長に剣の稽古をつけてもらったあと、ふたりに食事をした帰りだった。リンゼイのパブから家までの道中で、リルネとロイという青年を発見した。あろうことかふたりはキスを交わしていた。彼は慌てて建物の影に身を隠したのが、こそこそしているのはふたりのほうで、こっちは堂々としていてもいいのだ。盗み見じゃないんだし。

だがジョンはふたりの前に姿を現すことを恥ずべく行為だと見なしていた。それはおそらく自分がリルネに好意を寄せているからなのだろう。それなのにリルネは出会って間もない男と、あろうことかキスをしている。

ジョンはその場に出てロイを殴り倒したい気分だったが、そうしなかった。できなかったのだ。

ふたりが去っていたあとも、ジョンはその場所に身を隠し、じっとしていた。やっと動き出したが、彼はわざわざ遠回りをした。リルネとロイがいた通りを行けば家は近いのに、遠い道のりを選んだのだ。

まるでふたりが密会していた場所に足を踏み入れれば、自分も同じ罪に穢されてしまうかと思っているかのようだった。

古の魔女ローゼスタス

小柄なクルドⅡD・ヴェラシンコは額に一粒の汗を浮かびあがらせていた。すでに正午を過ぎているのにも関わらず、深い森は夜の空気をまだ残しているかのようにひんやりとして冷たく、身震いをおぼえるほどだった。しかし彼は熱がっているかのように頬を紅潮させ、息を荒げていた。

クルドは眼鏡を外し、服の袖で顔面を覆う薄らとした汗の膜を拭いた。眼鏡を掛け直した時、彼は危うく落としそうになってしまった。慌ててそれを空中でつかみ、少し苦戦しながら顔に戻す。

すると目の前にある、いまにも倒壊しそうなボロ屋がふたたび姿をはっきりと浮かびあがらせた。これ以上にないくらい傾いていて、薄い苔に覆われて緑色に変色していた。こんなところに人が住んでいるなど訝しく思えるほどだったが、潜むような息使いをクルドだけでなく、彼の部下までもが感じていた。

この家には古の魔女が住んでいる。

「前にもここは来たことがあります、慣れませんか」部下のソーランが言った。

クルドは返事をしながらうなずくと、くるりと向きを変え、三人の部下を見やった。

「俺ひとりで行く。おまえたちはここで待ってろ」

部下たちはため息を吐くかのようにざわめいた。

「安心しろ。古の魔女とて無駄に殺生を好むわけじゃない。それに彼女にとっては何れも嬉しい結果を持って行くわけだからな」

言うところクルドは、手押しの荷台から小さな木箱を取り出した。蓋のない箱には酒の入った小瓶が数本入っていた。彼はそれを両手で抱えながらカチャカチャといわせ、心配そうな眼差しを部下が向けるなか、扉のない戸口をくぐった。

家の中に入ると空気は重たくなり、自然と息が荒くなった。まるで白い吐息が吐き出されるのではないかと思うほど空気が冷たい。

戸口はこざっぱりとした大部屋に繋がっていた。部屋の中央には黒ずんだカーペットが敷かれており、彼の右手の壁に大きな本棚があつて、ほとんどが分厚い百科事典のような本で敷き詰められていた。本は古く、ボロボロだ。その反対側の壁の明かり取りの窓のしたに真四角の机と、椅子があつた。魔女はそこに座り、妙に引きつった笑顔をクルドに向けていた。

「今年はあるのかい」魔女は言った。

ローゼスタスの顔には深い皺がいくつも刻まれており、いまにも強い力が彼女の顔面を内側へ引きずりこもうとしているようだ。明かりとりの窓から漏れる不十分な光が魔女の顔に不気味な影のコントラストを落としており、より人間離れしているように見せていた。魔女が手招きをしたので、クルドは強張った足取りで老婆に近づいて行つた。

「これはいつもの物です」彼は自分の声が震えていないか危惧したが、そうは聞こえなかったのではっきりとした。

「ああ、そこんところに置いてくれ」魔女は机の足もとを指差した。彼は酒ビンの入った木箱をそつと置くと、魔女の座っている椅子のそばでぴんと背筋をのばした。彼女と目を合わせないように、天井と壁の交わる角に目を向けている。

「で、どうなんだい、今年は何？」

「は、はい。去年にくらべて豊作です。一・二五倍は望めるでしょう」

「そうか、そうかい」魔女はうれしそうに笑つた。「今年は食う量が増えるでな」

「は？」

「いや、こつちの話さな」

老婆の目の前の机には水晶玉が置いてあつた。紫色の敷物の上に乗っているそれは少し妙な形をしていた。下は平らになっていて、

どこに置いてても転がらないようになっていた。だが上はもっとおかしな形をしていた。盛り上がり、先が尖っているの、まるでガラスの玉ねぎのように見える。

この形がグラスオニオンという名前の由来になっているが、そんなことはクルドには知る由もなかった。

本来騒がしいそいつは、いまは眠っているように静かだった。

「どれ、今日の酒はどんなものか」

老婆は椅子に座ったまま木箱に手をのばし、酒ビンの一本を手にとった。

「ほお、フラックかい」彼女は蓋を取ると、ビンの口に鼻を近づけて匂いを嗅いだ。「ふむ。よくできておる。わたしゃ、フラックには目がなくてな」

フラックとはこの街の特産品でもあるいちじくに似た果実を使った酒のことだ。これがローゼスタスの大のお気に入りであることをクルドはよく心得ていた。

魔女はビンに口をつけると、中の酒をごくごくと飲み始めた。

「どれ、おまえもいるかい？」魔女はビンをクルドのいる方向に傾けた。

「いえ」クルドはかぶりを振った。

「そうかい」ローゼスタスは言う、小馬鹿にしたような笑い声をあげた。

「報告は終わりましたので、また一週間後にお伺いします。今度は貢物を持って」

「ああ、楽しみにしておるよ」

クルドは慌てるようにそそくさと魔女の家を後にした。部屋を出る横切る時に、部屋にある寝室へと続く戸口の下で青色のオオカミがこちらをじっと見ているのに気づき、危うく飛びあがりそうになった。オオカミが身動きひとつせず、唸ることなくじっとこちらを見ているのを背中を感じながら、クルドは外に出た。ため息混じりの深呼吸をする。森の空気は魔女の家のこもったじめじめとした空

気とは違い新鮮だった。

「行こう」クルドは部下たちの横を通り過ぎながら言った。そこで彼は止まりもせずに、ずんずんと先に進んだ。部下たちは急いで荷台をつかむと、クルドのあとを追いかけた。

古の魔女の伝説はいくつもあった。まずはじめに、ドムドと呼ばれる怪物退治だ。ドムドとは千年も前にこの地方を襲った怪物の名だ。黒い影のようなそいつはシエラの街を夜のように染めてしまうほどの巨体の持ち主だったが、若きローゼスタスはそいつをたった一撃の魔法で滅殺してしまったのだ。こうして魔女は初めてシエラの住民にその力を見せつけたのだった。

はじめは感謝の意を示していた住民であったが、魔女はその魔力を盾に毎年の貢物を要求した。当時の長官がそれを断ると、魔女は長官を焼き殺し、街に雷を降らせた。これにより三〇四人の死者を出し、街の人々は彼女の要求を受け入れるしかなかった。

そしてこの貢物の風習は千年以上も続き、こうしてクルドは魔女とシエラとのパイプ役を担っているというわけだ。魔女は貢物は要求しても、シエラの街を支配したり、政治に介入する気はなさそうだった。それだけがせめてもの救いだったが。

だが、こうしてここにいななければならない事態について、クルドは不満を抱いていた。というよりも魔女の存在自体が、許されざるもののなのだ。人々の命をその魔力で脅かし、自分は我が物顔で街の恩恵を受ける。

それにうわさも絶えない。行方不明者が出れば魔女が連れ去り、その長き命の糧にされてしまったという噂話を持ちあがる。そして未解決の殺時事件のすべてが魔女のせいになされた。すべての事件を彼女のせいにするのは野蛮なことだと知っていたが、それでもわかったものじゃないとクルドは思った。そのいくつかは彼女の仕業のはずだ。

とにかく、魔女の存在は街の平和を乱す危険要因のひとつだと思っていた。そしてその危険要因は騎士団の団員として、排除せねば

ならぬ存在だと彼は日々思っていた。

だが、それが無謀な願いだということも知っていた。クルドの剣の腕は団長のウィリアムですら認めるものであった。だが、剣は魔法に対抗する術をもたないと言われる通り、クルドの剣が魔女の魔力と彼女自身を切り裂くことはない。こうして頭を下げるように、魔女の要求に応えるしかないのだ。

クルドは煮え切らない思いとともに、魔女の住む森を脱出した。

騎士団の団員たちがこちらに向かって歩いて来たので、ジゴラは獣道ですらない茂みの中に入った。遠回りをして魔女の家に向き着く。ローゼスタスの家は相変わらずのボロ屋で、倒れそうなくらい傾き、くしゃみひとつで吹き飛んでしまうかと思うほどだった。最初の一步を家に踏み入れると、床が聞き慣れた音で軋んだ。懐かしの我が家だ！

ただひとつ違うことは、この部屋と寝室とを繋ぐ戸口に青いオオカミがいたことだ。オオカミはまるまって鼻先を尻尾にうずめていたのだが、ジゴラに気づいて顔をあげると、一瞥をくれただけでまたもとの姿勢に戻ってしまった。

彼はオオカミを無視して部屋を横切った。魔女は見た事もない不思議な形の水晶玉を見つめていて、彼が背後に立ってもしばらくは気づかなかったほどだ。

「まだなかあるのかい？」

顔をあげた魔女の顔がぱっと明るく輝いた。

「久しぶりだな。ちょっと用事があったて街に帰って来たから、寄ってみたんだがな」

「ジゴラじゃないか、まあ、すっかりたくましくなってる」

魔女は立ちあがり、よろよろとジゴラに近づいた。木の枝のように骨ばった手をのびし、彼の頬に触れた。不快だったがジゴラはがまんした。

「まあな、そっちも元気そうでなによりだな」

老婆はその言葉が嬉しかったのか、笑顔が広がった。

「最近隣のルーカで暴れとるそうじゃないか」

「おかげで街中のお尋ね者だ。そっちはどうなんだ、魔力に衰えはないか？」

ローゼスタスは自信ありげにかぶりを振った。

「衰える一方さね。もう二千年近くも生きておるからねえ。ここに初めてきた九八六歳の頃はまだまだ強かったんだが」老婆は嘆くどころか、うれしそうな顔をしていた。「だが、こいつを見せてくれ」
魔女が両手で大事そうに抱えて差し出したのは、机の上に乗っていた玉ねぎのような水晶玉だった。

「グラスオニオンじゃよ」

一見するとそれはただのガラス玉のように見えた。だがこうして近くで見ると、恐ろしいパワーを秘めているようだ。いまはまだ眠っているだけなのだ。

「こいつは魂を入れ換えることができる」老婆はゆっくりと言った。
「つまりわしの魂を他の人間の肉体に入れることができるというわけじゃ」

「なるほど。こいつのことだな、ヴァルマーが言ってた若返る為の道具ってのは」ジゴラは言った。

「あやつに会ったのかい？」ローゼスタスが言った。

「ああ。早く若さを取り戻してくれて、催促してたぜ」

ジゴラが言うとローゼスタスは笑った。

「時間の問題だとあやつに言っておいてくれ。わしの新しい体はわしの手にあるとな」

「目星はあるのか？」

老婆はグラスオニオンを頭上の高さまで掲げた。気のせいか、玉が貪欲な目のようにギラリと光ったのをジゴラは見たような気がした。

魔女はその光を目にするなり、これまでにないくらい笑顔が顔いっぱい広がらせた。

「リルネリア・ボーンズじゃよ」

「あのパン屋の娘か？」

「ああ、良い女に成長してくれたよ。あの時おまえが取り逃がしてしまったのは正解のようじゃったな」老婆はひきつるように笑った。ジゴラは魔女の弟子をしていたころ、彼女のために人さらいをしていた。魔女は人並みの寿命を持っているが、他人の命を吸うことで老いるスピードを遅らせることができた。もうはや二千年近い年になっているローゼスタスが一体何人の命を犠牲にしてきたか、考えるだけでも身震いがした。そしてジゴラは弟子をしていたころに、その手伝いをしていたというわけだ。

あくる日もジゴラは街にくりだそうと森を歩いていると、入口付近で草摘みをしているリルネを発見した。彼はいつものように仕事を完了させようと、背後から近づき、少女をさらおうとした。だが運悪く、近くを散策していたウィリアム・クラウスに阻まれてしまった。

あの時はまだ生理もきてないようなガキだった。あれから十年近くが経とうとしている。おそらくは七年だろう。正確な時間の経過など忘れてしまった。

「ほれ、グラスオニオンが光るぞ」

魔女が水晶玉をそっと机の上に置くと、そいつは光を放ち、なにかを映し出した。シエラの街並みだ。

ジゴラは魔女の肩越しにグラスオニオンをのぞきこんだ。そこには彼女のお目当てのリルネリア・ボーンズがジョン・アルバート・クラウスと並んで歩いている。

「なるほど、たしかに発育はよさそうだ」リルネの豊満に育った胸を見つめながら、ジゴラはにやついて言った。「まあ、俺様からしたらまだ小さいと思うがな」

「ふん、いやらしいねえ。これからわしの物になる体をそんな目で見ないほしいねえ」老婆は言ったが、その目は少女から離せないでいた。よだれをたらさんいきおいで口を開けて汚らしい隙っ歯を見

せ、グラスオニオンの中を食い入るように見つめている。

男なら、みなそういう目で女を見るさ。ジゴラは思った。だが、彼にとっては若いリルネの体も、彼女の乳の何倍ものある巨乳美女にすらも興味はなかったが。そうさ、俺様のチンポは小便をすることしか知らないのさ。戦争で両方の玉を失っちまったあとでは。

「ああ、可愛いリルネ嬢や。はやくわしのところへおいで」

魔女の口からよだれがたれ、床に落ちた。

そんなに、若い体が欲しいかよ。ジゴラは軽蔑のまなざしを魔女に向けた。玉に夢中のローゼスタスは気づいていない。

俺様だったら、他人と体を変えるなんて、ごめんだね。彼はグラスオニオンのなかで少女の隣にいる少年に目を向けた。女を目の前に、おっ立てることのできるナニが手に入るのは魅力的だったが、こんな青臭いガキの体に戻るのなんて、まっぴらごめんだった。それに俺様は俺様自身として死にたいんだ。俺様の体もろとも。

「それで、その体をどうやって入れかえる？　またさらって来て欲しいか？」

「いや、準備は着実に進んでいる。麗しいリルネ嬢の体は自らわしのもとへとやって来ることになるのさ。その固く閉じられた花園を密で濡らしながらね」

グラスオニオンが輝きを失い映しだすことを止めると、ローゼスタスはジゴラに顔を向けた。

「ところで、泊るあてはあるのかい？」老婆は聞いた。

「ああ。街にいる友人のところで寝てる。街中ではこそそしなきゃいけないのが、難儀だがな」

「そうかい。まあ、気が向いたらいつでも泊りに来ていいぞい。ここはおまえの家でもあるのじゃからな」

「ああ、そうするよ」とは言ったものの、心の中ではまったく逆のことを考えていた。こんなカビくせえボロ屋に泊るのはごめんだね。

「さて、今日は顔を見せに来ただけだから、もう行くよ。仕事も頼まれているしな」

「そうかい、それは残念じゃのう」魔女は本当に残念そうな顔を
した。「ヴァルマーに言っておいてくれ。祭りの夜には完了じゃとな」
ジゴラは外に出ると、クルドがそうしたように深呼吸をした。新
鮮な空気はいつ吸ってもおいしいものだ。

衝突

昼食が終わると、ジョンはいつものように家を飛び出した。腰には父親から譲り受けた剣を差し、柄と豪華な装飾を施した象牙の鞘が朝日を浴びて輝いている。この剣は父親も子供の時に彼の父親から、やはり譲り受けていた。彼は日課として、街の外にある人工の森へと特訓に出かけている。そこでジョンは実家のパン屋から出てきたリルネと遭遇したのだった。彼女は夕飯の買い出しに行くところだった。やはりこれも彼女の日課だ。

ジョンは浮かれた。こうしてふたりになれることなんて、最近では滅多になくなってきたのだ。しかしすぐさま、昨夜の光景が甦って来た。

「まだやつに会ってるみたいだな」

第一声はジョンの思いとはうらはらに、彼の口を突いて出てきた。昨日の光景など忘れようとしたが、無理だった。

「ロイのこと？」

「ああ、そうだよ。他に誰がいる？」

「そんなに怒らなくてもいいじゃない」

リルネに言われるまで、自分が声を張り上げているのにも気づきさえしなかった。

「それにわたしが誰と付き合おうとも、ジョンには関係のないことだわ」

「だが、あいつは信用できない！」

リルネは目を丸くした。

「あなたがなにをロイに敵対視しているかわからないけど、変よ、あなたじゃないみたい」

「リルネには俺のことがわからないんだよ。ロイのことだって良くわかってないと同じようにね。良くそんなやつと、キスができたも

んだね」

リルネは頬を紅潮させた。

「見てたのね！」

「あんなところで堂々とやってるからだろ。俺は通りがかっただけさ」

「わたしが誰とキスしようが勝手。わたしとロイはそういう仲間なんだから」

「ああ、勝手にするがいいさ」ジョンはずかずかと前に進み出て行った。「君は良く知りもしない人間とそういう仲になれる厭らしい女なんだ」

「知りもしないなんて、良く言えたわね！」後方でリルネが叫んだ。「わたしはロイが好きよ。それくらい、自分でも知ってるわ！」

声はどんどんと遠ざかった。足早に体を前へ繰り出していたのが、いつしか駆け足となっていたのだ。腰に差した剣のkachachaと擦れ合う音が耳まで届いた。

ジョンは森に行き着くと、小さな泉へと進んだ。泉は飛び越えられそうなくらいの大きさに底の中心で湧きあがり、ところどころに空いた穴から地下の水脈へと流れ出ている。彼はその近くまで行くと、剣を鞘から素早く抜き取り、一閃を描いた。そのまま剣を高く上げ、振り下ろす。そして想定した敵の攻撃を交わそうと、うしろに飛び退いた。

ジョンの頭の中にあつたのはロイの姿だ。憎き恋敵。北の王都から来た昆虫の生態系を調べる調査員。それも怪しいものだったが。

ロイを敵として想定してみようとも、ジョンにはそれができなかった。なぜならそれはロイが古典的な学者体型で、人を襲うことにはとうてい無関係そうな体格だったからだ。

しかしかれは北の王都からひとりでここまでやってきた。ここまでの道のりをひとりで来られるなんて、思えない。危険な猛獣がたくさん生息しているからだ。そうでなくても、生態の調査をするのに調査員をひとりだけで派遣するものなのだろうか？

いまは鍛錬に集中しろ、ジョン！

彼は父親の声で自分を一喝した。こうして自分を奮い立たせるには、父親の声が一番効果的なのだ。

「そうだ。リルネのことも恋敵のことも忘れなくては」

ジョンは目の前にいる想像の敵を、ロイから街を襲った竜のようなヴァイオレーターに切り替えた。イメージの塊が形を成すと、ジョンはすぐさま剣の一閃を放った。ヴァイオレーターは鼻っ面を斬られて血を流したが、ひるむことなくジョンに攻撃をくりだしてきた。鋭い歯を剣で弾き返しながら、うしろに下がり、隙を見て相手の懐に飛びこんだ。そして一気に胸に真一文字の傷をつけた。傷は深く致命傷となった。

と、イメージでの特訓ではジョンは無敵だった。ヴァイオレーターだって簡単に殺せる。だが、実際には一筋縄ではいかないだろう。それどころか、不可能にだって近い。相手は次元が違いすぎるのだ。だが、もし僕にだって勝てれば、リルネだってこっちを向いてくれるかもしれない。あんなやつじゃなくて……

「でも無理だよな——」

ジョンはつぶやき、また剣を振りはじめた。

「まあ、あと一日来れば、完全に治るだろう」ジャンローが言った。

ゆつくりと回転するシーリングファンの下で彼はベッドの端にちよこんと座ったクロネの足にギプスの代わりに簡単な包帯巻きをしてやった。

「ほとんど治つとるが、今日一日は松葉杖を持って歩いたほうがいいじゃろうな。念のために」ジャンローはお得意の笑顔で白い歯をクロネに見せた。例のどうしようもなく塞ぎこんでいる人間でも笑顔を誘発されてしまうほどとびきりの笑顔だった。クロネはこの笑顔が大好きだった。

「ええ、先生の言うとおりにするわ」クロネは上品に言った。彼女

の父親は医者であり、父親の言うこと——特に病氣や怪我に関して——はいつも正しかった。そしてクロネは医者 of 言うことは素直に聞くべしという教訓をよく心得ていた。

「ちよつと立って見ろよ」アルが言うとな彼女はベッドに立てかけてあった松葉杖を取って、両足で立ちあがった。杖によって体重は軽減させていたが、両方の足にかかる力は均等にしてあった。彼女は怪我をしている方の足を前に出した。そして松葉杖の先をそれよりも前に持ってきて、今度は怪我をしていない足を前に運んだ。怪我をした足に体重がかかるが、そこまで痛みはない。だがこのまま松葉杖なしに歩き続けたら、痛みは酷くなるだろう。それどころか、怪我が悪化する恐れは十分にありうる。

「ま、大丈夫そうだな」とアル。

「そうね。杖を使えば普段どおりに生活できまるわ」クロネはマコの隣に移動した。

「今日もありがとうございます」マコはクロネがやって来ると、そちらに目を傾けたあと、ジャンローに言った。

「なに、自分の仕事をしただけじゃ」ジャンローは嬉しそうに笑った。

チロシンとロイシンは見慣れぬ街を我が物顔で闊歩していた。ふたりは道の中央を歩き、前方に人がいても自ら道を開けようとはしなかった。そのため街の住人たちはこのよそ者を避けて歩かなければならなかった。

チロシンの左頬には猫の髭のような三本の傷があり、対するロイシンのねずみのような長い前歯は両方ともが折れていた。

「暇だなあ、兄弟」ロイシンは前歯に息をこすらせながら言った。

「二日もすれば、そうは言ってられなくなるさ」チロシンは非常にゆったりとした声で言い、ニヤリと笑みをこぼした。「その間はこうしてぶらぶらするしかないのさ。もしかしたら、お呼びがかかるかもしれない」

みすばらしい男がふたりの横を通り過ぎたが、チロシンはその男には見向きもしなかった。ふたりの視線は向こう側からやって来る別のふたりに向けられていた。ふたりは黒いタキシードのような服にマントを羽織り、黒い帽子を被っている。礼服のようだ。

ほお、魔女派か。チロシンは思った。こぼれる笑みが左頬を押しあげ、猫の髭のような傷が動いた。

「あんたらが魔導士軍団だな」男のひとりが言った。彼の眼は淡い緑色をしていた。

「軍団つてのが気に入らねえが、確かに俺たちは魔導士だぜ」ロイシンが答えた。

「ならばここから立ち去れ」

ふたりはお互いに目を合わせ、声をあげた笑った。

「嫌なこったと言っておこう」チロシンはニタニタした笑顔を相手に近づけて言った。

「ここは古の魔女の街だ。痛い目を見る前に立ち去るんだ」別の男が言った。彼は赤い目をしていた。まるで瞳を血に染めているようだ。もちろんそれが自然の色ではないことをチロシンは知っていた。これはコーシュという手術によるものだ。コーシュとはコウジュと呼ばれる木から採れる特殊な粒子を瞳の光彩に塗りこむ美容整形手術で、魔女や悪魔崇拝といったオカルト趣味の若者にはやっているくだらない流行だ。しかし、この男は若者とはそうとうかけ離れた年齢をしている。

「だがその魔女は俺たちのお仲間さ」ロイシンが言った。

「お前たちは魔女を取り込もうとしている。それをここが魔女の街だというのに、好き放題やってる」

「だからなんだ。お前たちのお母ちゃんが俺たちをお仕置きに来るってか？」

ネズミ顔のロイシンに信仰する古の魔女をお母ちゃん呼ばわりされて、魔女派のふたりは顔を真っ赤にした。

「お前たちには魔女の裁きが下るだろう」コーシュを施した男が言

った。大げさにもふたりを指差して。「だが、その前に俺たちが裁いてやる」

なぜこいつらはこんなにも強気なのだろう。チロシンは思った。無知とはなんと罪なことか。その勝ち誇った顔もすぐに絶望へと変わるというのに。

コーシユの男が片手をあげた。男の手が赤く光った。

魔法か、初歩的だな。チロシンがそう思う間もあらばこそ、コーシユの男は反対の手で彼の胸ぐらをつかみ、炎をまとった手を顔面に叩きつけた。瞬間的に炎が燃えあがり、チロシンは背中から倒れた。

隣に立つロイシンは平然とした顔で立ち、そればかりかニヤついた笑みを浮かべている。

「余裕だな。突っ立ててもいいのか？」緑目の男が言った。

彼は右手の甲をロイシンに見せびらかすようにして立てた。その手の周りで風が緑色の光をほのかに輝かせながら渦巻いた。かすかに銀色の光が走っては消えている。真空の刃だ。

男は切れ味の鋭くなった手をロイシンに突き出した。

が、ロイシンはそれを軽々と片手で止めてしまう。

ロイシンは飛びきり大きなニヤつき顔を広がらせた。手のひらを男の腹にめがけて突き出す。手のひらは男の腹を激しく打ちつけたが、それ以上にその間に発生した驚くほど硬い空気の層により男の顔は悶絶にゆがんだ。かと思うと男はうしろに仰け反り、後方に向かってすっ飛んだ。

倒れこんでいるチロシンを勝ち誇った表情で見おろしていたコーシユの男が驚愕の目を見開いて倒れた仲間を見つめた。男の口の端から一筋の血が垂れた。あまりに驚いていたので、コーシユの男はチロシンがゆっくりと立ちあがるのにも気づかなかった。

「おい」耳元でチロシンが言い、コーシユの男は振りかえった。チロシンの異様に長い指を持つ手が男の口を押さえた。チロシンの手から流水が溢れ、男の口から体内に侵入した。水は玉状になって男

の食道を通過して胃に到達した。男は体内を走る激しい痛みで悶絶した。

形勢逆転というわけだ。チロシンは思った。いまでは俺がお前を見おろしている。いや、見くだしている。

チロシンは前屈みになって、コーシュの男の胸を押さえこんだ。それまでにロイシンは自分が倒した男の胸をブーツの踵で踏みつけていた。

「どうするよ、兄弟？」ロイシンは最高の笑みを見せた。子供が楽しみを見つけたときの笑顔だ。

「さあな。だが、どういう方法であれ、俺たちの恐ろしさを教えてやらねばならん。まだこれだけじゃあ、理解するのにはちいっと足りないようだからな」チロシンも笑顔を相棒に向けた。

「ああ。俺たちにとってその古のくそつたれ魔女とやらが、取るに足りんということを教えてやりてえ」ロイシンは集まって来た野次馬を見渡した。それぞれの顔は恐怖に強張っていたが、それ以上に興奮しているように見えた。

「そういうことさ。特にこの目の前に転がっているゴミくずが、赤子よりも無力だってことをその体に刻んで教えてやる必要があるしうだ」

コーシュの男は恐怖に目が見開かれている。口はぱくぱくと動き、風に乗らない言葉を発している。ロイシンは足で押さえつけている男は、薄らとした意識で、空中のどこかわからない場所を見つめている。この男の脳裏にも恐怖が渦巻いていた。

チロシンとロイシンはお互いに顔を見合い、右手をあげた。両方ともの手が赤く光った。その光はコーシュの男が見せたそれよりも数倍は大きく、そして数倍異様であった。

ふたりは腕をふりおろした。燃えあがる炎が軌道を描き、大地に降りそそぐ星の破片のように落下した。だが、地面に仰向けになっ

て倒れている男たちにその炎が落ちることはなかった。

一陣の風が不自然な横一文字に吹き荒れ、チロシンとロイシンを

吹き飛ばした。ふたりはわけがわからないままに空を仰ぎ見た。目をしばたたかせ、ゆっくりと起きあがる。そして原因を追究しようと、前方を睨んだ。

一番はじめに目に飛びこんできたのは剣だった。美しい剣だ。

こいつがヴァルマー様の言っていた例の剣か。チロシンはその剣に魅せられるように見つめた。一枚の葉のような形をした剣は、言葉ではとうてい言い表しようのない美しさを放っていた。それはまるで素晴らしき青春の日々、初恋の淡い光のようだった。

「こいつは……」ロイシンが上の空でつぶやいた。

「ああ、間違いない。一葉の剣だ」

チロシンは自分の服が思わぬ怪我を負わされたことに気づいた。上着の襟が小さな切り口をつくられ、シャツはだらしなく開かれた口のように横に裂けていた。ボタンのひとつが弾け飛び、失くなっていた。

横を見るとロイシンも同じ目にあっているようだ。だがどちらも肌に傷は負っていなかった。

なるほど、剣の使い手は加減をしてこちらに攻撃してきたようだ。しかもその相手がまだアソコの毛も生えそろっていないガキだというのだから、下を巻かずにはいられない。彼は敬意をこめて少年にニタリと笑いかけた。

「小僧、名はなんという？」

少年は少し戸惑ったが、怒りに震える声で言葉を絞り出した。

「マコだよ。あなたたちの名前は知りたくもないから、言わなくていい」

「ほう。そいつは嫌われたもんだ。だがな、やられたこっちも腹が立ってるってもんだ」

「へへへ。そうだな。俺もこの借りを返してえ」ロイシンは獲物を狙うように舌なめずりをした。

「腹が立っているようにはどうてい見えないわねえ」マコと名乗った少年と一緒にいる赤毛の少女が言った。

「そう見えないなら残念だな、お譲ちゃん」

お譲ちゃん呼ばわりされ、少女が不快感を示したのをチロシンは見逃さなかった。彼はそれを面白いと思った。

「なあ、お譲ちゃん」チロシンは呼ばわった。

「なによ？」

「俺たちが怒りを覚えているのは本当だ。もしあんたのお仲間がやったことについてあんたが責任を取ってくれるんなら、その少年を許してやってもいい」チロシンはそう言うと、ロイシンに目を向けた。

「ああ、そうだな。まだ幼いガキだが、体の成長は先を急いでるようだぜ」

リアはロイシンの舐めるような視線に頬を赤らめた。

「なに言ってるのよ。観念するのはアンタたちでしょ。弱い者いじめなんてして」

「なあ、そいつは誤解してもんだ。最初に手を出して来たのはあいつらだぜ？ まあ、相手が弱い者ってのは、大正解だがな、お譲ちゃん」チロシンが前に進むと、リアは怖気づいたように後退した。

チロシンの言うそのあいつらは、すでにいなくなっていた。この対話中に逃げ出したというわけだ。

「リア、いいよ。ボクがふたりとも相手する」マコがリアとチロシンの前に出た。

「マコ、あまり派手にやって目立つなよ」金髪の男が言った。チロシンはこの綺麗な顔立ちの男が気に入らなかった。すましたような顔が鼻につく。

「いいえ。あなたがそんなやつらのために手を汚すことはないわ。わたくしがさっさとやつつけてあげる」松葉杖の少女まで出てきた。チロシンは少女の首から小さなナイフがぶら下がっているのを目にした。たしかこの街の長官が自分の娘に似た少女に渡したと街中で噂になっているあのナイフであろうと、チロシンは思った。実際に噂になっているのはそれを受け取った少女の方だったが。

なんでも長官の娘に似ているとか。まあ、興味のない話だったが。なんだか奇妙な組み合わせだとチロシンは思った。こんなやつらだけで本当に外から旅をして来たのか――ましてやヴァイオレータ―を撃退したと街で噂の四人組だということが――訝しかったが、この街の人間ではないことは一目でわかる。

「なに心配するな。お前たちはすでに俺たちの標的だ。全員な」

「そうだな、まとめてやってやるよ。お楽しみを奪われたんだからな」

チロシンはロイシンと目を合わせた。

ふたりは同時に右手を振りあげた。チロシンの手のひらには水球が、ロイシンの手のひらには球状に渦巻く風があった。その手が自分に向かって振りおろされるか否かのタイミングで、少年が剣を構えた。だが両者の衝突は新たな声によって阻まれた。

「チロシン！　ロイシン！」

声に反応してふたりは攻撃をやめた。なにやら慌てている様子だ。というより怯えているようだ。

チロシンは声に反応してふりかえった。目で確認しなくても、この聞き慣れた声の主が誰だかわかったが、確認せずにはいられなかった。

そこには外套のフードを外した長身痩躯の男がいた。

ふたりを一喝して止めた男は細身で、ふたりよりも頭ひとつ突き出るくらいの高さをしていた。頬はこけ肌は白いが、その眼光は獲物を狙う獣のそのように鋭かった。

「どうして止めた、イソロシン？」チロシンは納得のいかない表情を向けた。

「さわぎを起こすなどの命令だったはずだ」

イソロシンと呼ばれた男はあえて誰の命令かを言わず、じっとチロシンの目を見つめかえした。アルはその目が気に入らなかった。聞きわけのない子供を辛抱強く諭すのではなく、黙殺するような目

だ。チロシンとロイシンがその眼光に納得したように――なかば怯えたように――うなずくと、イソロシンはアルに目を向けた。それからなにかを吟味するような視線の波を彼に投げかけた。

「行くぞ」

イソロシンは意味ありげな笑みを浮かべながら、アルたちを背にして去って行った。チロシンとロイシンは四人を睨みつけると、イソロシンを追った。なにもないとわかると野次馬たちも解散し、そくさと自分の生活に戻った。

「なんだったのよ、あいつらは？」リアが腰に手を当ててうなった。「ヴァルマーの魔導士軍団だろ」アルは言った。

「だったら、とっ捕まえて騎士団にでも差しだすといいわ」とクロネ。

「それは少し難しいと思うよ」マコが怒りをあらわにした。穏やかな声だったが、その下に沸きたつ怒りを抑えているのがアルはわかった。「彼らと戦うなら、そういうな努力が必要だし、街中でそれをやるには街に被害を及ぼすことは必至だから」

「でも、あの猫髭と前歯には目をつけていたほうがいいわね、少なくとも。まあ、イソロシンってやつは、少しは分別があるようだけど」

「いや……」マコがリアの言葉を否定するかのように重々しくつぶやいた。

「なによ？」

「気をつけないければならないのはあのイソロシンってやつさ」アルがマコの言葉を引き継いだ。

「そうは思えないけど」リアは納得できないように首を傾げた。

「あなたって相当お気楽なのか、人を見る目がないんじゃないのかしら？」クロネが皮肉っぽく言った。

「なによ、アンタにはわかったって言うの？」リアが声を張りあげた。

「あ、あたりまえじゃないのよ、ねえ、マコ」

マコは神妙な面持ちで下を見つめていたが、クロネに反応して顔を上げた。

「そうだね。彼はその……なんというか……」彼はイソロチンの印象を説明しようと苦戦した。だがやがて納得のいく言葉を見つけると、恐る恐る口を開いた。

「目だ。目なんだ――暗闇からこちらを覗く目」

決意

クロネンバーク・ユイソナーがシエラの街で右足首という犠牲を支払いながらも見事な着地を披露してから四日目。彼女の右足は完治した。普通の治療なら異例の早さだが、魔法を用いた治療法ならまずまずといった感じた。特に怪我の箇所が骨となると、早いほうではないかと思う。

クロネは浮き立つ心と同じくらい弾むように歩き、マコを一周してみせた。

「これで自由に歩けるわ」彼女はくるりと回った。キンバリーからもらったナイフが首のところで宙を舞う。足の痛みは明日の彼方へと消え去った。

「良かったね、クロネ」

マコの心からの祝福を受けて、クロネの気分は天井にぶつかりそうなほど舞いあがった。

「最高の気分。あなたとふたりで街中を歩き回りたい気分だわ」

「だったらそうしなよ」とアル。

「そうね、邪魔者になんてなりたくないもの」リアが調子を合わせた。

「そ、そう。あなたたちがそう言うなら、ふたりで出かけて来てもいいですわよ」クロネは頬を赤らめていたが、ツンとすまして言った。

「そうだね。数日は慌ただしかったから、今日くらいはゆっくりしてもいいかもね。できないかもしれないけど」できないかもしれないを、マコはゆっくりと発音した。あの魔導士が街をうろついているのなら。

「ところで、君たちは祭りに参加するのかね？」ジャンローが言った。

「祭り？」リアが少し目を輝かせて言った。

「ああ、収穫前夜祭じゃ。秋の収穫を願って、実りの神に祈りを捧げる」

「ムーラだな」アルが実りの神の名を口にし、ジャンローがうなずいた。

「まあ、儀式的なところは形だけで、出店や出し物を楽しむだけの祭りじゃな。どうだね、参加するかね？ 明日がその日じゃが」

「行く、行く！」一番に答えたのはリアだった。

「お祭りかあ、わたくしも行きたいわあ」クロネはリアに同意した。「祭りだな。神透祭がなつかしいな」アルはマコの頭を撫で、ふたりで思い出を共有した。それがクロネにはうらやましかった。

「じゃあ、決まりじゃな」ジャンローは嬉しそうにうなずいた。

医者は彼らを外まで見送り、四人は彼と別れた。さらに通りを進むと四人は二組に分かれた。

「じゃあ、まあ、適当な時間になったら長官の家に戻って来いよ」アルが言った。

「ええ、そうさせてもらうわ」クロネは自由に歩けるのが嬉しいのか足踏みをして言った。

「じゃあね」

リアは手を振ると、アルと連れだって歩いた。マコとクロネはふたりと別れると、違った方向に向かって歩き出した。

キンバリーの娘に良く似たクロネンバーグ・ユイソナーは白い頬を朱に染めながらうつむきかげんに歩いていたが、横目でマコを見あげる形でチラチラと目配せをしていた。こうしてふたりで並んで歩くのは初めてのことだったし、少しドキドキした。

「それで、どこに行きたいの？」マコがたずねた。「この時間だと市場は終わっちゃってるかな」

太陽はその日の王座に君臨することをやめ、壇上から降りている途中だった。市場は午前中にしかやっていないのだ。

「それならわたくしに任せて。行きたい場所があるの」

「うん、じゃあ任せるよ！」マコは元気よくうなずいた。その無邪気な表情と声がクロネは好きだった。

彼女は嬉しくなつて無意識のうちに歩みを早めた。マコはそのちよつとうしろを着いて歩いた。

しばらく進むと、ふたりはジョンⅡアルバート・クラウドと出会った。彼は汗で濡れ、さきほど水中から這いあがってきたかのようなようだった。

「あれ、今日はふたりだけかい？」

「ええ。足が治ったから散歩中」

「そういえば、ギプスも取れたんだね」ジョンはクロネの足を確認しながら言った。「おめでとう。これで旅も続けられるな」

「そうね、しばらくはここに滞在するつもりだけど」

ジョンの目がぱつと輝いた。

「それはいい。明日、祭りがあるんだ。行くよな？」

「うん、ジャンローさんにも聞いたよ」今度はマコが答えた。「参加するって言うておいた」

「おう、だったら明日な。早く汗を流したいよ！」ジョンは頭をくしゃくしゃとこいた。

「そんなに汗かいて、いままで何をやってたのよ？」

「剣の練習さ」ジョンは装飾の美しい柄を持つ剣をクロネに見せた。腰に差されたそれは、優雅にそこに鎮座していた。「毎日の日課なんだよ」

「そう、大変ね。さあ、早く体を洗ってらっしゃいな」

「じゃあまたな。祭りの時にでも」

ふたりは手を振ってジョンを見送った。そのうち彼の姿が見えなくなるのと、ふたたびクロネはマコを連れて歩きだした。

クロネはマコを連れて東側の門から外に出て、人工の森に入った。「ここって、君が落ちた森だよな」

「そうよ。落ちるときに良いものを見た気がしたの」

「なにを見たの？」

「それは楽しみにしててよ。わたくしも本当に見たのか自身がないもの」

「うん。そうする」

マコが素直に返事をする、彼女は振りかえって彼に微笑みかけた。それから戻らない笑みを引き連れて前に向き直り、その笑みがバレなければいいのにと願った。

クロネは記憶だけを頼りに、ここかな、ここかな、と木の向こう側を確認しながら歩いた。やがて見覚えのある草むらを発見した。そこを曲がってしばらく進むと、目的の場所に辿り着いた。

「わあ」マコは目を輝かせて感嘆の声をもらした。そこには小さな泉があった。ジョンがさきほど、剣の鍛錬をしていた場所だ。透明度が高く、反射する光が青く変色するほどだった。クロネもそんなマコのように嬉しくて、笑顔をこぼした。

「ねえ、綺麗でしょ。上空からじゃ小さくてわからなかったけど、やっぱりあったのね」

マコは屈みこんで、小さな泉に手を着けた。

「すごく冷たい」彼は無邪気な笑顔でクロネに振りかえった。その笑顔を見て、彼女は自分がここにいるのが不思議に感じた。

「ありがとう」ふいにクロネはマコの笑顔に向かって言った。

「え、どうしたの？」彼は不思議そうな顔をした。

「あなたがわたくしにくれてくれたことよ。あの時、正氣に戻させてくれた」

クロネはマコと出会った時の話をしていった。その時、マコはクージャという悪しき魔導士を追っていた。クージャはクロネの住むフランの街に辿り着いた。クージャがフランの街にやって来た目的はふたつあった。魔導士サハランの杖とマコをここで巻くことだ。

杖はクロネの父アランが所持していた。クロネの母親であるアーシャスタスが失踪前に残して行ったものだ。クージャは杖を父親か

ら奪うと、クロネに暗示をかけた。それは街を破壊し尽くし、やって来たマコとその仲間を殺すというものだった。

クロネは街中に雷を降らし、何人もの命を奪った。そうするうち、マコがやって来て彼女を救い出してくれたのだ。

「でも、おもいきり斬っちゃった」

「それはお互い様じゃない。わたくしもあなたを丸焦げにしようとした」

ふたりは笑い声を漏らした。実際マコはクロネを止める為に斬らねばならず、そうした。そのあと傷は治したが、医者のような技術のないマコの手では痕を消すことはできなかった。クロネはそのほうが良いと思っていた。操られてたとはいえ、街を壊したのは自分なのだし、傷跡はマコと出会った証となる。

彼女は傷跡を自分に対する戒めと思い出として残しておきたかったのだ。

「思えばわたくし、迷惑ばかりかけてるわね。出会い頭にいきなり襲いかかったり、いつも転ぶし、動きは遅いし、それに今回だって――」

マコはクロネにとってヒーローのような存在だった。その隣にいる為には守られてばかりのヒロインではいたくなかった。

わたくしって、本当に駄目ね。そう思うと自然とため息が出た。

「そんなこと、気にしなくていいよ。ボクにだって、アルにだって悪いところはある。リアなんて、あんなだし」

これにはクロネも笑った。クスクスと肩を揺らして。

「うん、そうね。でもわたくしはマコにお返しがしたいの。役に立ちたいのよ」

「役に立つのとかがんばり過ぎるのは違うからね」マコが言った。「できること、できないこと」そして続けた。「誰だってそのふたつを兼ね備えてる。自分にできることだけを一生懸命にやればいい。できないことは、ぼくたちの誰かが補うから。そうやっていままで旅をしてきたじゃないか」

「そうね」クロネはうなずいた。

「それに、クロネの魔法の力は役に立つ以上だよ。君の操る雷は、他の誰よりも引けを取らない威力を持ってる。ボクを黒こげ寸前にまでした雷だからね。それを実際に受けたボクが保証する。それにリアだって、証明してくれるさ」

「そうね、それはわかってるわ。でもそれを活かす機会が欲しいの」「機会か……」マコは考えを巡らせた。そして唐突に言った。「あるよ！」

「え？」クロネは目を丸くした。

「ボクがサンガルドを取り戻すその時、クロネに側にいて欲しい。長い戦いになるかも知れないから、そんな機会なんて沢山やって来るよ。あとになって嫌と思うほどね」

「そうかしら……」クロネはうつむいて言った。

——クロネに側にいて欲しい。

マコの言った言葉がクロネの頭の中に何度も響いた。彼はそんな深い意味で言ったのではないようだが、クロネにとっては人生と同様の意味を持っていた。

「来るよ！」マコはリルネの両手を握った。彼女は当然、頬を赤らめた。

彼に力強く言われると、本当にそうなのだと思えた。

「うん、がんばってみる」クロネは言った。

クロネは近い将来のことを考えてみた。すぐにあり得そうな機会は、おそらく魔導士軍団との衝突以外にないだろう。確信はなかったが、街と魔導士軍団とのいざこざが大きな戦いに発展するような気がして来た。

エドは公民の為の集会場及び宿泊施設に踏み入った。両脇にさした剣を揺らしながら、眼光は鋭く、まっすぐ前を見据えている。怒りをあらわにしているようにさえみえる。実際のところ、彼は怒っていた。

彼は開け放たれた扉の前で入室をためらった。部屋は妙に薄暗くされており、不気味だったからだ。それに中にいる男がさらにその不気味さを醸し出している。

「用があるなら入ったらどうだね」エドにはその言葉が挑発的に聞こえた。とにかく彼はむっと口もとを引き締めると、硬い足取りで部屋の中に入った。

「クルーデとモーシャを渡してもらおう」エドは言った。

「唐突だな」ヴァルマーは驚いているが、面白がっている顔をした。「ここにいるのはわかつている」エドはせかすように言った。

「理由もなしに連れて来いっていうのか？ そいつはできないな。彼らはもう仲間なのだから」

「ふたりは街の人間だ。彼らのしたことは街で裁く。お前がかくまる必要はないし、街から出て行ってもらうことになるかもしれないぞ。まあ、その方が俺たちには都合がいいが」

ヴァルマーはやれやれとため息まじりに首を横に振った。

「誰も渡さないとはいっていない。早まりすぎなのだよ。理由を聞かせてくれと言っているんだ。彼らが何をした？」

エドは関係ないといった具合に首を横に振ったが、それが近道だと思い、説明した。

「傷害事件だ。喧嘩で相手三人をほとんど再起不能な状態にした。そんなところだな。さあ、ふたりを渡してくれるか」

ヴァルマーは最初からそのつもりだと、両手を広げてみせた。

「イソロシン！」彼が声をあげると、ヴァルマーの背後から男が現れた。その主と同じく冷酷な表情をしている。いや、それ以上だとエドは思った。しかし一体この男はいつからそこにいたのだろう。部屋は薄暗いとはいえ、全体が見えるていどには明るかった。だがこの男は呼ばれて前に出てくるまでその存在を一切認識できなかった。

イソロシンはなにも言わずに出て行くと、ほどなくしてふたりを連れて来た。クルーデとモーシャはエドの顔を目にすると、そろっ

て同じ顔をした。犯人が犯行を目撃されたような顔だ。

「副団長様が君たちふたりを引き渡してほしいそうだ。ま、君たちがやったことからすれば当然だと思うがね」ヴァルマーは言った。

ふん、とモーシャは鼻を鳴らした。「わかったよ」

「あれは本当にすまなかったと思ってるんだ」クルーデはなんとかエドに言い訳をしようとした。

「話ならあとでたっぷりと聞いてやる。牢獄でな」エドは片方の剣を抜きとった。「妙なマネをしたら斬る。いいな？ わかったら、さっさと歩け」

エドはクルーデとモーシャを前に歩かせ、ヴァルマーたちに振りかえった。

「お前たちも、妙な騒ぎを起こせば出て行ってもらおう。もうすでに十分な騒ぎを起こしてはいるがね」

エドは言い残すと、退室した。

買

ジョンは特訓から帰って体をきれいさっぱり洗ったあと、今度は家事にいそしんで汗を流していた。この炎天の下で庭いじりと草むしりをやっていれば、自然と汗も出るものだ。彼は家の横の井戸まで行き、水を浴びるように桶から飲んだ。シャツをあらかた濡らしながらふと横目をやると、家の前を知った顔が通り過ぎた。

ロイだ。

彼はひとりですたすと足早に移動していた。ジョンはこの男がどこへ行くのか知りたいと思った。この男がどこを生活の拠点とし、どんな素性を持っているかを。

なぜなら彼は信用できないからだ。なによりリルネにくつついているからだ。

追いかけて行くとロイは西側の門抜けた。彼が魔女の森へ近づくにつれて、彼に抱いていた疑念が大きく膨らんだ。いったいこの青年はこの森になんの用があるのだろう。調査にしては手ぶらだ。というより彼が調査道具らしきものを持っているところを見たことがない。

彼を追って森に入り、木の幹に生える苔が深くなってくると、ジョンは恐怖を感じはじめた。魔女の家に近づきつつある。闇が濃くなるのをジョンはその目で、肌で感じていた。

この場所では夜が昼を取りこもうとしているんだ。ジョンは思った。夜が昼を捕まえ、バリバリと貪り食う。そんな事が永遠に行われているのだ。

そのままロイを追って森を進み、傾いたボロ屋を目にすると、不安が大きくなった。口から飛び出しそうになる心臓を飲みこむのは大変な作業だった。やがてロイが魔女の家の中へと消えて行くと、困惑した。

——いったいヤツはこんなところになんの用なんだ？

ジョンは足音をたてないように気をつけながら、魔女の家の裏手に回った。

ボロ屋の周りには死体のような枯れ木が、家をのぞきこむように並んでいた。ジョンはその大きな手のような枝が、いつ自分をつかまえるかもしれない恐怖を感じながら、大きなひびの入った窓に近づいた。窓ガラスは汚れていたが、なんとか目を凝らせば中の様子がわかるほどだった。

窓の向こうは魔女の寝室のようだった。

ロイがいた。

彼はこちらに背を向けており、その目の前には老婆がいた。白髪にはギトギトの油が浮いている。魔女ローゼスタスだと彼にはわかった。他に誰がいる？

魔女の手がのび、ロイにかざされた。かすかな光がロイを包んだ。ジョンの目が大きく見開かれた。ロイの体に激しい変化が現れたからだ。ロイは体を仰け反らせて、こちらに顔を向けた。が、その目にはなにも映っていないようだ。苦しんでいるかのように唇がめくれあがった。剥き出しの歯が尖っていくのが見えた。体が前傾姿勢になると、顔が見えなくなった。ロイの体が縮みながら四つん這いになると、青い体毛が生えはじめ、やがて獣の姿になった。さきほどまでロイだった獣は体をくねらせながら、衣服の中から脱出し、魔女の前でお座りの形になった。それは見るも禍々しいオオカミだった。

「これは一体どういう——」

ジョンはおぞましいほどの恐ろしさを感じながら、窓から顔を離れた。が、視線は窓を通して魔女の家の中に投げこまれている。リルネがご執心中の相手はオオカミで、しかも魔女のペットだったなんて、夢でも見ているようだった。それも悪い夢を。

もしこれが現実だとしたら、魔女はなんの為にオオカミをリルネのもとへ送りこんでいるのだろうか？

ジョンは思考する事に夢中で、しかもあまりに心底怯えていたため、声をかけられるまでうしろから近づく気配に気づきもしなかった。

「覗きがお好きとは、えらく良い趣味を持ってるじゃねえか。だが、相手が相手とあっちゃ、褒められたもんじゃないな」

反射的に飛びあがりながら振りかえると、そこには巨漢の男がいた。ジョンは最初、そいつがああイシュタ・カイゾーラー——いまはジゴラを名乗っている——だと気づくの少しの時間を要した。だがその相手を彼ははつきりと覚えていた。

古の魔女の弟子が帰って来た。

扉の無い戸口を通して魔女の家の中に入られると、ジョンはさなる恐怖を感じた。魔女と対面するとさらにそれは全身へと広がった。恐怖はしつこいカビのように全身に根を張った。たとえこのまま無事に帰されたとしても、恐怖は朝の光に触れるまでは消えてくれそうになさそうだった。

白髪を頭から垂らし顔中を皺で深く刻んだ老婆の前に立たせられると、ジョンは自分が心底震えているのに気づいた。じつさい皺の中にあつてぎよろりとでかい目玉に見つめられると、小便をちびる思いだった。魔女を目の前にして、死を確信したからだ。

「なんだい、クラウスんとこの坊主じゃないか」

魔女の口から自分の名前が出て来てジョンは不安な気持ちにさせられた。まるで呪いの言葉を浴びせられたような心地悪さだ。

さきほどまでロイだったオオカミに目をやる。オオカミは魔女の足もとに伏せており、警戒するわけでもなく彼を見あげている。

「覗きさ。その窓からようすを伺ってたのさ。オオカミの正体がバレたぜ」ジゴラが説明すると魔女はいたずらっぽい笑みをこぼした。

「そうかい、見たのかい。じゃあただじゃおけないなあ」

ああ、やはり殺されるんだ。ジョンは思った。

魔女の節くれだった手が眉間近くに持ってこられたので、ジョンはそのまま命が終わるものと思った。だが魔女の手から炎が現れてジョンの身を焼くことはなかった。代りに黒ずんだ爪を上に乗せた指から黒い糸のようなものが下に向かって垂れた。糸は黒い光を放っており、手のひらの長さくらいまでに達すると糸の先が黒く燃えあがった。

ジョンはちらちらと揺れる炎に魅入られた。そこにはすべての憧れがあるように。彼はその炎に心奪われてしまったのだ。

「そうだ、良い子だ」魔女は孫に接するような甘い声を出した。その隣でジゴラはなにごとが始まるのかと、興味深げに見えていた。

魔女が手を左右に動かすと、垂れさがった炎の糸はその倍の大きさに揺れ動いた。

「さあ、気分が良くなっただろう。お前はいま深い海の底に沈んでいるのだ」

魔女は手の動きをさらに大きくした。

「うん。俺は深い海の底」ジョンはまるで意思が無くなってしまったかのように魔女の言葉を繰り返した。ジョンの声はジゴラでさえ身震いさせるほど不気味だった。

「そうだ。良い子だ。お前はわしの言うことを一字一句間違いなく実行するんじゃない、わかったか？」

「はい。俺はあんたの言うことに一字一句間違えずに従います」

少年は催眠術にかけられていた。ジゴラは魔女から催眠術を教えられてはいないが、魔女にそんな芸当があってもなんら不思議ではなかった。

完全に術にはまったジョンのようすを見て、魔女は満足そうにならずいた。

そしてそのひび割れた唇をジョンの耳に引き寄せると、その一字一句とやらを口にした。

ジョンはすばらしい気持ちで魔女の森が出た。その隣ではロイが

笑顔で歩いている。

ジョンはロイについての考えを改めていた。森の入り口で彼を見つけ、少し話してみると、意外と良いやつだという事がわかった。それに彼が昆虫の生態調査にここまで来ていることは本当だった。彼はジョンに自分の仕事を説明し、しかも彼のために昆虫を取ってくれた。その虫はジョンですら見るのも初めてだった。黒々とした外羽は鎧のように硬く、立派な角もその頭部にたたえていた。ジョンはそれを森に返してやるのが惜しいと思ったくらいだ。

「あいつはねあの森にしか生息していない貴重な樹木の樹液だけを食べて生活しているんだ」ロイは先ほど見た甲虫について説明してくれた。「その樹木は皮が分厚いんだ。そのためか、滅多に樹液を流さない」

「だから見た事がなかったのか！」ジョンは合点がいったように声をあげた。「魔女の森は人が滅多に入らない場所だからな」

「魔女の森？」

「そうだ。古の魔女ローゼスタスが住んでいるから、魔女の森さ」

ロイはおかしそうに笑った。

「街の人はそう信じているのかい？　魔女なんて時代遅れだよ」

ジョンはかぶりを振った。

「ローゼスタスは実在するよ。じっさい彼女は街からの貢物をもらってる。街をその魔力で攻撃しない代わりに、彼女の生活の面倒を街がみているってわけさ」

ロイは肩をすくめてみせた。

「それっていいように利用されてるってことじゃないか」

「そうだろうけど。どうすることもできないのさ」

ふたりは西側の門に辿り着いた。人工の森がある東側とは違い、こちら側は殺伐としており、見通しが良かった。振りかえれば後方に広がる魔女の森が見えた。

「ああ、また調査に戻らないと。上が結果、結果ってうるさいんだ」ロイが眉間に皺を寄せて言った。「でなけりゃ、一人前にはさせて

くれないってさ」

「魔女の森に戻るのかい？」

ジョンがたずねるとロイは首を横に振った。

「こんどはあっちに行ってみようかと思うんだ」

ロイが指差したのは南の草原の方だった。そこには背の高い草が生えており、虫たちの住みかとなっていた。あの草原でよく虫取りをしたことをジョンは思い出した。

「そっか、大変なんだな」

「ああ、上が結果、結果とうるさいんだ」ロイは繰り返すと言わずに力なく笑った。

「そうだ。明日の祭りには参加するだろ」ジョンが思い出したように言った。

「祭り？」

「ああ、収穫前夜祭さ。楽しいぞ。出し物もあるし」

「ああ、面白そうだな。絶対に行くよ」

ふたりは翌日の約束を交わすと、門前で別れた。

ロイ・ハーグマンはジョン＝アルバート・クラウドと別れるとともに来た道に戻りはじめた。その表情からはいつさいの感情は消えうせ、ある目的のためだけに体は動いていた。彼には帰るべき場所があり、そこに帰ることこそがいまの彼に課せられた使命なのだ。

でも、どこに？

ロイ・ハーグマンとしての思考はほぼ停止していたが、頭の隅ではそんな質問が浮かんでいた。そんなことはどうでもいい。彼の体は命令通りに動いているのだから。

もちろん目的は昆虫採取ではなく、魔女ローゼスタスのもとへと戻ることだった。

かくて思考しない機械となったロイは、魔女の待つ深き森へと向かうのだった。

祭りの夜

祭りの日がやって来た。

ひっそりとうごめく何かに気づかず、人々は朝からにぎわしく、活気に満ち溢れていた。昼になるころには祭りの準備は終わり、中央広場に特設ステージが建った。夕方には早めの夕食がはじまり、外は一時的に静けさを取り戻した。

それからちらほらと人の姿が見え始めたころ、物珍しいふたり組の姿が目についた。通り過ぎる街の人間は物珍しげな目をジョンとロイに向けたが、それほどまでにこの組み合わせを奇妙だとは思ってはいなかった。

「俺、こんなお祭りなんてはじめてだな」ロイが言った。

「そんなことないだろ。王都では大きな祭りが年に数回あるじゃないか」

「ああ。だけどこんな楽しそうな雰囲気じゃないな。神格化されすぎなんだよ。だから街の人間が楽しむ祭りは初めてさ」

「そうか。じゃあ、今日は思い切り楽しまなきゃな」ジョンはロイの肩を叩いた。

「うん」ロイは大きくうなずいた。

ふたりは街のパン屋までやって来た。彼らは入口を通らず、店の裏手に回った。そこは家屋の玄関になっている。

「リルネー、いるだろ？」ジョンが大声で叫ぶと、二階の窓から美しい少女が顔を覗かせた。その目が大きく見開かれている。

「まあ！これは奇妙な組み合わせね」驚いているが、どこかうれしそうな声でリルネが言った。

「いいから降りて来いよ。祭りに行こうぜ」

リルネの顔が消え窓が閉じられて間もなく、玄関扉が開けられた。「どうしちゃったよ、ふたりとも」最初に彼女の口について出た言

葉がそれだ。

「俺、こいつのことを誤解してたんだ」ジョンはロイの肩を組んで言った。「こんなに最高に楽しいやつはこの世にいないってこと、早く気づいてればよかったんだ」

「いまは良い友達だけどね」ロイが付け足した。

「まあ。それってすばらしいことだわ」リルネは顔の前で両手を組み合わせた。「じゃあ、三人で楽しみましょう」

三人の少年少女は連れだって歩き、祭りの会場となる街の中心部へと向かった。彼らは楽しそうに弾んで歩いたが、その周りにどんなよりと怪しい影がたれこめていることに、誰も気づいていなかった。

リアは大好物の肉料理を両手に持ってご機嫌だった。串に刺さった肉は脂を滴らせており、彼女は手についたそれを舐め取ると、肉にかぶりついた。

「うううん。おいしいわ」リアがうなった。

「そい言ってもらえると、うれしい」キンバリーは笑顔になって言った。

「すいません。奢ってもらっちゃって」アルがすまなさそうに言った。

「なに、この街の祭りを楽しんでもらえたら幸いじゃ」

キンバリーの隣でクロネがぼっと目を輝かせた。

「見てあれ！ クリンクルよ！」

クロネはマコの手を引いて、出店のひとつへと駆け寄った。そこには飴細工が並び、彼女はそのひとつに顔を近づけた。そのひとつはクリンクルと呼ばれる小動物の形をしていた。クリンクルは見た目こそとてもかわいらしかったが、獐猛で、年に十数人の死者を出している。

「買って！」クロネは目を輝かせて言った。

「買ってと言われても、これはキンバリーさんのお金だけど」マコは申し訳なさそうにキンバリーを見た。年老いた長官はにこりと微

笑んでそれに答えた。

マコは事前に渡されていた硬貨を渡してクリンクルの飴細工をもろうと、それをクロネに手渡した。マコとキンバリーたちのもとへ向かいながらクロネが受け取った飴を口に入れその甘さを堪能した時、太鼓の音が鳴り響いた。

「わあ、びっくりしちゃった。何かしらね」クロネが言った。

「出し物のひとつじゃないかな」マコが答える。

「あれは予告じゃな」とキンバリー。「もうすぐダンスが始まるんじゃない。神に捧げる儀式じゃよ」

「あつ、アタシ、それ見たい！」リアが元気よく手を挙げて言った。「当然じゃよ。みんなが見る大きなイベントじゃからな。ホレ、早くしないと良い場所はすぐに埋まってしまうぞ」

キンバリーが特設舞台のある中央広場へと向かい、四人がそれを追った。

特設舞台の前面に設けられた長椅子の客席は早くも埋まってしまうようなほど人であふれかえっていた。まだ席に辿り着いていない人間がたくさん、外の方からもやって来ている。会場は熱気に包まれていた。

「ホレ、急がないと席を取られてしまう」

キンバリーはまるで子供に戻ったみたいにはしゃぎ、クロネはそれをうれしそうに眺めながら、彼に着き従った。

座席中盤まで進むと、見知った顔がこちらに向かって手を振っていた。ジョンだった。彼らがいる席の隣は四人分が空いていた。

「やあ、やっぱり来たんだ。席を開けておいてやかったよ」ジョンがにこやかに言った。

「あら、あなたが――」ジョンと一緒にいる少女が少し驚いたように口を開いた。この反応はクロネにとっては慣れたもので、彼女はにこりと微笑んであいさつをした。

「こんばんは。わたくし、クローネンバーク・ユイソナー。よろし

く」

クロネがぺこりと頭を下げると、少女も彼女にならってそうした。

「リルネリア・ボーンズよ」

リルネと挨拶を交わすと、クロネは見知らぬ青年に目をやった。

彼の青い瞳——ジョンの瞳の青よりもずっと濃い色だ——の美しさに驚いたが、同時にどこか信用ならぬいぶかしさも感じていた。

「俺はロイっていいいます」青年が言った。「ロイ・ハーグマンです」

ロイの紹介にクロネは事務的にぺこりと頭を下げただけだった。

「よし、じゃあみなはそこで座っててくれ」キンバリーが四人分空いている席を指差して言った。

「キンバリーさんはどうするんですか？」クロネがたずねた。「席が足りないみたい」

「わしは挨拶があるからな。長官殿は祭りの時でも忙しいんじゃ」

キンバリーはクロネにウィンクしてみせると、舞台に向かって前の方へと歩いて行った。

それからしばらくして、踊りの儀式は始まった。

「この暑い中みなさんよく集まってくださった。また収穫の季節がやって来ましたぞ」

司会らしき人物に紹介されると、キンバリー・イフライム長官は前に出て来て挨拶を始めた。

「今年もマール様は大地に向かって微笑んでくれたようじゃ。よって感謝のしるしにマール様の偉業をたたえようではないか——」

挨拶が終わると、一瞬の静寂が訪れた。辺りはすっかりと影が落ち、客席を囲む松明のオレンジの光がゆらゆらと揺れていた。

それから激しい太鼓の音がして、仮面を被った女性と黒に身を包んだ四人の男性が現れた。仮面の形相は恐ろしく、禍々しい数の突起を携えた角が生えていた。女性は重々しい音をさせて足踏みをし、四人の男性はその周りでくると躍った。

ほどなくして太陽と収穫の女神の最初の偉業となる敵、ナイジェ

ル役の踊り子が現れた。

イソロシンは誰にも見ることでできない暗闇に紛れて立ち、獲物に忍び寄っていた。チョロい仕事だ。彼は思った。盗みの仕事など専門外であったが、そんなものは闇と同化できる彼にとっては造作もないことであった。だがいま彼に課せられているのは完璧にこなさなければならぬ仕事であり、それは完璧主義のイソロシンを置いて他に役目を勤められる者はいなかった。特にロイシンやチロシンのような騒がしいやつらでは駄目だ。

完璧主義のイソロシンはこんな些細な――しかし重要な――仕事であっても華麗にこなし、その痕跡も華麗に残す。だが、今回の任務には仕事の痕跡を残さないことが必須事項に含まれていた。だから彼は華麗にその痕跡を消すつもりでいる。

何事も華麗に完璧に、だ。

イソロシンが動いても気にする人間はいなかった。というよりも見えていない。それは観客が祭りの舞踏に夢中になっているからではなく、彼が闇に紛れているからだ。こうなってしまうえば、誰にも彼に気づくことはない。背後に近づいたクロネでさえ、その気配に気づかない。完全にこの世界から消えてしまっているようだ。

イソロシンは肩越しにクロネの胸もとを覗きこんだ。そこにはキンバリーが彼女に渡した家宝のナイフがぶらさがっている。それが今回の目標だ。イソロシンはそっとナイフに手を伸ばした。が、クロネは気づかない。両手で首紐からナイフをはずしても、やはり気づかない。

イソロシンはニヤリとしながら、その場を離れた。

堂々と盗みが行われたにも関わらず、誰もその現場を目撃した者はいなかった。

エドはピリピリとした空気を放ちながら、けたたましい太鼓の音でにぎわう舞台を背にしていた。祭りの警備は毎年のことではある

が、今年は余計にピリピリとしていた。それはあまり歓迎されぬ来訪者である魔導士軍団が原因であるが、例の魔導士たちはひとりも会場に姿は現してはいないようだ。

だが油断はできない。やつらは油断ならない視線を持ち、油断ならない笑みをたたえた油断ならない人間なのだ。姿が見えないからと言って、何か問題を起こさないと限らない。

彼の目の前をひとりの騎士が通り過ぎた。彼はエドに異常がないことを伝えるようにうなずくと、エドは彼に引き続き注意をするようにうなずきかえしてみた。

振りかえって確かめてみても、舞台周りや客席には魔導士たちの姿はないようだ。この時、イソロシンによる窃盗が堂々に行われていたが、エド副団長は気づかない。ちょうど女神ムーラが穀物たちの疫病の神であるグラナークを退治している場面だった。

こうして強化された警備の中、街に異常のないまま、四十五分にも及ぶ舞踏は終了したのである。

決行

熱狂的な音楽とダンスが終わると、ひとびとは散り散りになって帰り始めた。客席に残った人たちはまだ熱狂は冷めやらぬ様子で、あれやこれやと話をしていた。マコたちも立ち上がり、その場を離れ始めた。アルと話をしている。が、クロネは立ち止り、なにやら下を探しだした。

「ないわ」

その一言で一同は振りかえった。

何が？　そう問おうとしたがクロネの胸にナイフがぶらさがっていないことにマコは気づいた。

「どこかに落としたんじゃないの？」

マコはさきほどまでいた座席の辺りを調べたが、見つからない。

「開演前にはあったわよね。わたし見たもの」リルネが言った。

「演目中に盗まれてもしたのか？」とジョン。「でもそんなことが可能かな。しっかりと首にかけてたんだろ」

「ええ。しっかりと取りつけられていたから、はずそうとすれば気づくはずよ」

特別席からまっすぐキンバリーがやって来た。その顔はにこやかだったが、みなのようなすを見て、心配そうな顔をした。

「どうした？」

「キンバリーさんにもらったナイフを失くしてしまったの」クロネはすまなさそうに言った。

「開演前にはつけてたんじゃろ。わしも見たからな」

キンバリーはそう言って座席の下を探した。

「うーむ。ないな」

彼は手をのばすと、クロネの首にかかっているナイフがぐくりつけてあった紐を手を取った。

「無理やりはずされたような跡があるな」

「そんな。いくら舞踏に夢中だったからといって、無理やり取られて気づかないはずはありませんわ」クロネは否定した。

ううむ、とキンバリーはうなづいてまた探し始めた。マコたちを始め、ジョンやリルネたちも辺りを探した。が、やはり見つからなかった。

「まあ、ええで。今日は暗いからな、明日にでも騎士団の誰かに探させるとするか。心配はいらん。すぐに犯人も見つかるて」

「でも……ごめんなさい。大切なもののな」

クロネの泣きそうな顔を見て、キンバリーは彼女の背中に手を当てた。

「もうお前にやった物だからお前の物だ。わしに謝る必要はない」

キンバリーはそう言ったが、大切な娘の忘れ形見だと思えば、そう簡単にあきらめて良いものではないと思い、彼女はいま一度座席の下を探してみた。が、ない。

その周りをくまなく調べたマコも首を横に振った。

「まあ、せつかくの祭りじゃ。残りを楽しまなければな」

キンバリーは無理やりクロネの背中を押して移動した。

「え？ あ、ちょっと」

クロネは困惑し抵抗をしめしたが、強引なキンバリーによって、出店が立ち並ぶ通りへと強制連行されて行った。

夜の闇がこれ以上ないくらいに濃さを増して日付が変わるころには、街は静けさで満ち溢れていた。祭りがあった形跡はまだ撤去されていない出店と特設舞台だけ。外を覗いていても、動いているのは肌をなでつけるようなゆったりとした風だけのように思えた。

クロネはさきの失敗で眠れずにいた。キンバリーはああ振る舞ってはいるが、やはり大切な物が失われたショックはあるだろう。そう思うと、胸がつまって眠れなかったのだ。

同じ部屋ではリアがベッドの上で大の字になり、いびきをかいて

眠っている。クロネはうらやましくなってそちらに目を向けようとしたが、別の物に目が釘づけになり、窓から目が離せなくなった。

通りの向こう側からみつつの影が移動して来る。彼女にはそれが誰の物だかすぐにわかった。ジョン、リルネ、そしてロイだ。彼らはイフライム邸の裏側に面した通りを抜け、西の門へと向かって行く。

こんな時間にどこに行くのだろうか。

不審に思ったクロネに背筋を凍りつかせるような感覚が走った。

ピリピリと肌にまとわりつくような感覚だ。嫌な予感がした。それは予感というものではなく、ほとんど確信に近かった。

クロネは意識を集中させ、右手の人差し指をこめかみに当てた。

これをやるというもそこが痛むのだ。

これ、すなわち彼女には他人には見えないものが見ることが出来る。それは妖と呼ばれる力だった。妖術と呼ぶ者もいたが、その力はほとんど魔女が使うものである。

そして彼女は見た。

黒くトゲトゲしたオーラが、ジョンの首のまわりに巻きついてるのを。それはまるで絞首台のロープのように彼の首にくくりつけられ、いつでも床は開いて処刑の準備は整っているといった感じだ。だがさらにクロネを怯えさせたのは、ロイだった。彼の体はほとんどがその黒いオーラにさらされており、彼自信が見えないほどだった。

彼女は古の魔女についてキンバリーが語ったのを思い出した。この黒いオーラはその古の魔女が放つ妖気に他ならない。

「ちょっと、リア！ 起きてよ！」クロネはリアの体を揺さぶった。だが、リアは起きない。仰向けになり握りこぶしをつくっている右手が頭上に突き出された形で、だらしなく口を開いていびきをかいている。

「大変なのよ！ 起きてもらえないかしら」

リアを起こすのは難しいと判断して、クロネは部屋を飛び出した。

そして驚くほど遠い隣室に向かった。

「ふたりとも！」

扉を力強く開け放つなり、クロネは叫んだ。

マコとアルは敵襲を受けた兵士さながらにベッドの上に跳び起きた。

「いったいどうしたの？」マコはベッドを降り、一葉の剣に手をのばした。

「おいおい、クロネがそんな血相を変えるなんて、珍しいじゃないか」

「ジョンが！ たぶん古の魔女よ。魔女が彼を手繰り寄せているんだわ」

「言ってる意味が……」マコはそう言ったが、剣を背中に背負っており、すぐにでも行動に移す準備は万端だった。

クロネは窓辺で見た事をアルたちに話した。

「妖力を見たんなら、それは古の魔女のものに違いないだろうな」クロネの話が終わるとアルが言った。「ちょっと行ってみよう」

外へ出ると祭りがあった夜なのにすでに静まりかえっていることに気がついた。虫の声ひとつしていない奇妙な夜だった。その静けさを怒声が突き破った。

「ちよっとひどいじゃないの、みんな。アタシを置いて出かけようなんて！」

リアは扉の前で両腕を大きな胸の下で組んでいた。

「何言ってるのよ。起こしても起きなかったあなたが悪いんじゃないの」

「起きるまでやらなかったら、起こしたとは言わないわ。さ、面白いことが起こってるんでしょ。さっさと行きましょ」

なぜだかリアが先陣を切って歩きだした。

エドは宿舎でひとり、祭りの警備に関する報告書をにとりかかっていた。報告書とはいっても、簡単なものだ。祭りのようすや警備

の万全性、そして何事もなかったことを書き終えると、彼は書類をひとまとめにし、キャビネットの然るべき棚にそれを納めた。

大きなあくびをひとつする。

「おつかれのようだな」

エドは素早く振りかえった。両手はふたつの剣の柄に当てられている。薄明かりの中で細めていた目が見開かれる。そこには男がひとり立っていた。

「お前はヴァルマーの部下か――」

「イソロシンだ。右腕と言ってもらおうか。ヴァルマー様のお考えになったことを実行する為の右腕だ」

「いつの間に……いや、どうやって入って来た？」

イソロシンは答える代りに不敵な笑みを浮かべ、そつとあとずさりをした。部屋の角の影がより濃くなっている場所へと至ると、まるでそれが当然であるかのようにイソロシンの姿が消えた。エドはこれと同じものを見たことがある。ヴァルマーの部屋で。イソロシンはそこにはいなかったはずなのに、ヴァルマーの背後にある闇から突然現れたのではなかったか。

エドは目を細めてイソロシンが消えた闇を凝視した。まったく見えない。だが、その息づかいが聞こえるようだった。

エドは気づかない。イソロシンが背後の闇に移動したことを。彼はじっとイソロシンが消えた闇を見つめている。その為、イソロシンが背後の闇から出て来たのにも気づかなかった。

何か冷たく鋭い物が喉もとに押しつけられた。それがナイフだとわかる前に首もとを横に切りつけられ、温かい物が胸に流れ出した。エドは膝から崩れ落ち、仰向けに倒れた。イソロシンに罵声を浴びせようと口を大きく開いたが、喉からごぼごぼと赤い泡が流れ出ただけだった。

イソロシンはエドの生命が途絶えるまで彼を見おろしたあと、満足そうに闇へと消えて行った。その手に握られていたナイフはキンバリーからクロネの手に渡りイソロシンがクロネから奪ったナイフ

だった。

キンバリーは異様な気配で目が覚めた。ベッドの端に座り、眠たい目を擦る。窓が開いているのが見えた。風が入りこんでおり、白いカーテンが揺れていた。だが彼の感じた異様な気配がカーテンの動きではないことをキンバリーは知っていた。

何かが確実にこの部屋にいる。意思のある何かが。

扉がノックされた。それは恐ろしいほどゆっくりとした間隔で三回叩かれた。キンバリーはゆったりとした動きで立ちあがると、老体には恐ろしく広い部屋を横切った。ノックの主はキンバリーが扉に辿り着くまで辛抱強くまった。

嫌な予感が続いた。

扉を開けると、そこにいるのがヴァルマーだと知り、彼は目を丸くすると同時に恐れた。それはこの男がヴァルマーだという事実だけではなく、地獄すらも凍りつかせてしまうような冷笑のせいだった。

「こんな夜中に何の用かな。それも断りもなく勝手に屋敷に入りおつて」キンバリーは警戒して、扉を少し閉めた。

「祭りは盛況でしたな」ヴァルマーはキンバリーを無視して、体を扉の隙間にねじこんで部屋に侵入した。キンバリーは思わず、あとずさりした。

「何が目的か知らんが、大声を出せばマコ君たちが駆けつけてくれる。彼らの噂は聞いているだろう？」

「信用されていないんだな」傷ついたというよりは、むしろよろこんでいるようにヴァルマーは言った。「それにそのマコ君たちはお出かけ中だ。助けはこない」

キンバリーは愕然とした。守ってくれる人間がいなというより、ヴァルマーが自分に危害を加えようとしているのがわかったからだ。「どうやら、古の魔女に会いに行ったらしくてね」ヴァルマーが説明した。「予定外だがいなくなってしまったのは好都合だ」

「何が目的じゃ？」キンバリーはさらにあとずさった。

「この街は良い」ヴァルマーは窓の外を眺めながら言った。「防壁に囲まれている。それに国のほぼ中心部に位置しており、ここからならどの他の街にも手がのぼせるからな」

「この国を侵略するつもりなのか？」

「知る必要はない」

ヴァルマーが近づき、それを避けるようにキンバリーがあとずさりをする。だが足はキンバリーの体を数歩うしろに動かしたただけで止まってしまった。

背中に痺れるような痛みが広がり、同時に生温かい感触が広がった。

いつの間に……？ キンバリーは頭を逸らして後方を見やると、そこにはイソロシンがいた。彼がヴァルマーと一緒に入って来たはずはない。だとしたらどうやって？

イソロシンはキンバリーの背中に突き刺したナイフを抜くと、もう一度突き刺し、さらにもうひとつ穴を開け、計三つの穴を開けた。薄れゆく意識の中でキンバリーはうれしそうにニヤつくヴァルマーを見つめていたが、視界は赤く濡れそぼった何かに遮られた。

ナイフだった。

血塗られたナイフ。その血が自分のものであることは明らかだった。そこにエドのが混じっていることは知らない。しかしそれ以上にはつきりしていることがあり、それがキンバリーには不安だったし恐ろしかった。そのナイフはクロネに受け取ってもらったナイフだったのだ。

「これで犯人が誰か明らかになるわけだ」半分笑ったようなヴァルマーの声。

「ウィルがもど——」罵声を浴びせようとしたが、そこで声は途切れ、あとの言葉は口がパクパクと開閉されるだけで発せられなかった。イソロシンがナイフで長官の喉を掻っ切ったのだ。

キンバリーの命は途絶え、体がかぐりと崩れ落ちた。

「ウィリアムは戻っては来ない」

その声が年老いた長官の耳に届くことはないとわかっていたが、ヴァルマーは言った。愉快でならなかったのだ、これからの事を思うと。

イソロシンがキンバリーの死体の上にナイフを落とした。

「これですべては整いましたね、ヴァルマー様」

「ああ。今頃は団長様も骨となって砂漠に埋もれている頃だ」

ヴァルマーがまるで冗談でも言っているかのようにイソロシンは笑った。

「邪魔者はいなくなったわけだ」ヴァルマーはキンバリーを見おろして言った。「あとはマコルデイス王子御一行の帰りを待つのみだな」

ヴァルマーが不敵な笑みを浮かべ、イソロシンが大きくうなずいた。

グラス・オニオン

リルネリアは大きな不安の渦中にあった。ふたりの男——ひとり
は幼馴染で、もうひとりには恋心を抱いている——に誘われた時には
胸が高鳴っていた。こんな夜中にママに内緒でこっそりと抜け出
して遊ぶなんて初めてのことだったし、ちょっと悪いことをしてい
るような気がして興奮状態にもあった。だが魔女の森に踏み入ると、
胸の高鳴りは早鐘に変わり、期待は不安に変化した。

「ちょっとこんな時間にこんなところに来てまずいんじゃないの？」
リルネは思わず口を開いた。

「大丈夫だよ。何も怖いことはないさ」ジョンは恐ろしくゆっくり
とした口調で言った。まるで別人のようだ。

「そうさ。俺たちが着いてるから、安心さ」ロイがジョンに同調し
た。その口調にはどこか冷たさを感じた。

リルネは立ち止った。彼女の前でふたりが立ち止り、そしてゆっ
くりとこちらを振りかえった。

「やっぱり帰るわ」彼女は言った。

「どうしてだい？」ジョンは眉を吊り上げた。

リルネは困惑した。左眉だけをぐいっと上に押しやる仕草は、ジ
ョンの癖ではないことを彼女は知っていたからだ。こういう時、ジ
ョンはきまりが悪そうに相手から目を逸らすものだ。だがジョンは
じっとリルネの目を見つめている。

その目ときたら——

おもわずリルネの方が目を逸らしてしまった。その目ときたらギ
ラついていて、まるで獣のそれだ。もしくはまるで別人の——

ジョンが手を差しのべたので、彼女は思わず身を縮こまらせた。
びくつき、肩がはねあがり、うしろで束ねた髪が揺れる。まるで森
にひとりで踏み入って、見知らぬふたりの男に囲まれた気分だ。猛

獣を目の前にしたウサギ。直感がいますぐ逃げ出せと言っている。

彼女はそうした。

「帰るって言ったら、帰るわ」

リルネは身をひるがえして街に向かって足早に歩き始めた。そのはずだった。だが気づいた時には彼女は仰向けになり、夜空を隠すほどの深い森の木々の葉を見つめていた。締めつけられる感覚のする腕を見ると、握っているのはジョンだった。

「あんたは帰らないよ。こっちへ来るんだ」ジョンは彼のものではない口調で言った。

強い力で引っ張られ、リルネは顔をしかめながら立ちあがった。

ジョンを見るとその目には怒りがこめられていた。

「手間かけさせるんじゃないよ、このお転婆め。いいから、さっさとこっちおいで」

もはやジョンの体の中にいるのはジョン自身ではなかった。その喋り方をするのは古の魔女以外にはいない。理由はわからないが、魔女はリルネを自分の家へと連れて行こうとしている。

ジョンが彼女を引っ張ろうとした時、力の緩みができた。リルネはいま一度逃走を試みた。ジョンの手を引き離し、来た道を駆けだす。だが今度はロイにつかまってしまった。

「駄目だよ。彼女を困らせては。さあ、行くんだ」

リルネはロイを見た。彼女がジョンに感じたようには、ロイから違和感を感じ取ることはできなかった。物静かな口調はいつもと変わらない。それにロイの癖を彼女は知らない。ジョンの癖は驚くほどたくさん知っているのに。

「あなたは――」リルネは口をつぐんだ。疑問はたくさんあったが、何を質問して良いのかわからなかった。

「俺が何者かなんて、俺にもわからないよ。だけど、何をすべきか俺にはわかるんだ。ごめんね」

甲高い摩擦音が夜中の森に響いた。ジョンが剣を抜いたのだ。切先はリルネに向けられている。

「何が目的なの、魔女ローゼスタス？ ジョンの肉体から出て行きなさい」

「そんな口の聞き方するんじゃないよ！ この少年の命はわしの自由に出来るんだ。それにあんたの命もね」

リルネは魔女の意味するところを理解し、そして了解するようにうなずいた。

「よろしい」ローゼスタスに乗っ取られたジョンは満足気に言った。彼女はジョンに連れられ、ロイにうしろから見守られながら、暗黒の喉もどのような暗闇の中へと消えて行った。

扉のない戸口をくぐって傾いだボロ屋に入ると、大きな部屋は空だった。そこから奥の小さな部屋へと連れられて行く。そこは魔女の寝室らしく、クモの巣をレース代わりにしているようだった。埃っぽく、何年間も放置されている状態だ。ここが寝室だとは信じ難かったが、今にも壊れそうなベッドの上に老婆が横たわっているのを目にした。

だがそれよりも驚いたのは、ベッドの足もとにいる男の姿だった。

「あなたは――」

その名を口にするまでもなかった。イシュタ・カイゾーラ。ジゴラだ。彼はニヤニヤと突っ立ったまま、何も言わなかった。

ローゼスタスが目覚めた。上体をゆっくりと起こし、その動きに合わせてかのように、ジョンの体がゆっくりと埃のたまった床に倒れた。リルネの視線はジョンではなく、魔女の手をしている物に向けられていた。その玉ねぎのような透明な玉からは耳に障るような声が響いていた。

「ようこそ、麗しのリルネリア嬢」魔女の声もまた耳障りだった。

「あんたの体をもろうよ」

魔女が玉を近づけると、声のような響きが近くなった。その音は彼女の体内へと入りこみ、その奥底にある部分へと触れた。まるで魂を吸いだそうとしているようだった。なるほど、この玉を使えば

古の魔女が言ったように、自分の体を手に入れられるかも知れない。ジョンが立ち上がった。意識を取り戻したのだ。魔女がそれを目の端で確認すると、鬱陶しそうに言った。

「チッ、もうお目覚めかい」

ジョンは状況を飲みこもうと辺りを見渡した。それから魔女、ジゴラ、特にロイの姿を認めると剣を抜いた。剣がロイに襲いかかる。「お前は！」ジョンの怒号が響いた。いまにも怒りで爆発してしまいそうな勢いだ。

ロイはそれを避けると、困惑と悲しみを顔に表した。

「まって、ロイも操られてんるのよ」リルネは言い、少しためらってから付け加えた。「あなたと同じようにね」

「違う。こいつはオオカミなんだ！」

リルネはジョンが何を言っているのかわからなかったが、すぐに知ることとなる。

「何を言っているんだよ？」悲しいというより傷ついたようにロイが言い、魔女が愉快そうに笑った。彼女が手をかざすとロイはあとずさりした。魔女の手が光り、その光がロイの体の中に溶けこんでいった。そしてみるみるうちに形を変え、驚くべきことにロイはその瞳の色と同じ青色の毛並みをしたオオカミに変身してしまった。

「お前はこのわしに狙われていたのさ。ずっとね」とローゼスタス。「二千年も使ってきた体が痛みすぎておるから、新しいのが必要になったというわけさ。そこでわしが目をつけたのが、お前というわけさ。さあ、体をいただくよ」

古の魔女はグラス・オニオンをリルネに近づけた。玉は仕事ができるよろこびにうち震えて、唸った。

「いやあああ！」魂をつかまれた感覚があり、恐怖に叫んだ。

「逃げるんだ！」

ジョンがふたりの間に割って入り、魔女を斬りつけようと剣を大きく振りかぶった。ジゴラがそれに反応し、ジョンを電撃が襲った。雷の激しい音がして、ジョンはうしろに吹き飛んで気絶してしまっ

た。

「ジョン！」

「心配はいらねえ。殺しちゃいねえよ」ジゴラが言った。「それよりも自分の体を心配したらどうだ？」

ジゴラの言うとおりだった。魔女がふたたびグラスオニオンを近づけ、玉がまた嬉しそうに歌った。

こんな考えは馬鹿げていると思ったが、まるで玉には意思が宿っているようだった。

グリーンは断続的な記憶の閉鎖に悩まされていた。まるでふたつの記憶が交互に入れ替わっているようだ。いまはオオカミの姿をしているが、ある時はロイと呼ばれる青年になっている。不思議なことに、青年の記憶は自分がオオカミの時の記憶持っていることを知らない。だが、グリーンには両方の記憶があった。

だがそれが何だというのだ？ だからといって、自分の正体が何者なのかという答えにはならない。オオカミか人間か、その意味に立ちかえることはできないのだ。

唯一自分が真実だと思うのは、目の前にいる少女に恋心を抱いているということだ。そしてその少女がピンチであるということ。グリーンは少女を助けたいと思った。だが、グリーンには魔女を攻撃することができない。彼女に忠誠を誓っているからだ。

忠誠だって？ ふざけるんじゃない。魔女が自分に攻撃をしかけられないように魔法をかけたんじゃないか。グリーンが人間に変身できるように魔法をかけたように。そしてリルネをここへ誘いこむような行動をするようにも魔法をかけていた。

だが、魔女の弟子は違う。この巨漢の男を倒すことはできるかもしれない。

グリーンすぐさま行動に出た。ジゴラに向かって飛びかかったのだ。

ジゴラは魅入られていた。

グラスオニオンは歌い、光の粒子で構成されたような雲を出していた。雲はリルネにつかみかかり、触手をのばして彼女の口から鼻孔から侵入した。

その雲は美しかった。ピンク色を帯びていて、喜びに満ちている。彼はあまりにもグラス・オニオンがリルネの魂を引き出そうとしている姿に見とれており、すぐ近くで不穏な動きがあるのにも気づきさえしなかった。

ローゼスタスのオオカミがジゴラに飛びついてきた。

彼の腕をオオカミの鋭い爪が捕え、牙が肉をえぐった。ジゴラはオオカミを殴り飛ばして、風の刃でその身を切り刻んでやった。イヌのような甲高い声を発して、オオカミはボロ雑巾のように床の上に転がった。

「クソ。ふざけやがって、殺してやる！」

「おやめ！」魔女が一喝した。「そいつは希少価値なんだよ。殺したら許さないからね。それよりも傷口を洗って来たらどうだい。家の裏に井戸があるからさ。ああ、ひどい怪我だねえ。痛くはないかい？」

「ああ、大丈夫だ」傷は痛んだし出血もあったが、死にはしないし大した怪我ではない。そうだろう？ 何せ両方の玉を失いながら、まだ両方の足で立って元気に歩き回れるのだから。

ジゴラは裏口を出て、井戸に向かった。傷口を洗い流してやる。

曲線を描く五つの小さな穴から、血がにじみ出した。ジゴラはそれをさらに洗い流してやった。血はまだ流れていたが、ジゴラはそれをヒルのように吸いながら井戸を離れた。

こちらに近づいてくる気配がした。深い森の道を、魔女の家に向かって進んでくる足音が四つ聞きとれた。

こっそりと家の正面に向かい、壁の影からようすをうかがった。やって来るのは憎きマコ少年御一行。大方、友人を助けに来たのだろう。どうやって彼らの危機を知ったのかは知らないが、いつも邪魔ばかりをする野郎だ。

ジゴラは四人に気づかれないように、そつと魔女の家の裏手へと消えた。

薔薇の脅威

「こんなところに人が本当に住んでんの？」

リアの言った通り、その家は建物と呼ぶには劣化しすぎていて、とうてい人が住めるような状態にはなかったし、どうしてこんなに傾いているのにまだ建っていられるのかアルには不思議でならなかった。だが中からは異様な気配が感じられ、魔女らしき者がよからぬことをしているように見えた。

「何かがいる」マコが言った。

「あたりまえじゃない。魔女の家なんだから、魔女がいるんでしょ」何を言っているのかわからないといった様子でリアが言った。

「そうじゃないよ。これは魔女の気配じゃない」マコは一葉の剣を鞘から取り出した。「それにまっとうな生き物の気配でもない」

マコが何を感じているのか、アルにもさっぱりわからなかったが、時は一刻を争うことだけはわかっていた。

「入るぞ」

おなじみの戸口を抜け、広い部屋に入るとどこに行けばいいの一目瞭然だった。奥の部屋から怪しげな光が漏れている。その光のする方に行くと異様な光景が広がっていた。まず目についたのは空中で横たわるリルネの姿だ。その近くに古の魔女と思われる老婆が両手で透明な玉ねぎ型の水晶を掲げており、その光りに包まれてリルネは空中に浮いていた。壁際でジョンが怪我をして倒れており、なんとかして立ち上がるようとしている。そして見知らぬオオカミが血を流して倒れている。

ロイの姿はない。

マコが行動に出た。一葉の剣から風の太刀を発し、魔女に向かって飛ばしたのだ。賢明ではないが、そうすべきだとアルも思った。なにしろ玉ねぎのような水晶玉が放つ光が無数の手となってリルネ

の魂を引きずり出そうとしていたからだ。状況をゆっくりと判断している余裕などなかった。

風の刃は見事に魔女を斬り切り裂いた。血柱が立ち、信じられないといった目線をマコに向けて魔女は倒れた。

水晶玉が床の上に転がると。リルネの体はゆっくりと舞い降りた。

「アル、リルネを――」マコが横たわる魔女を凝視したまま言った。

「ああ」アルは答えると、リルネリアの体を部屋の端まで運んだ。

魔女の体が浮きあがった。そのまま床に舞い降りると、魔女は怒りの眼差しを侵入者に向けた。

「なんなんだい、お前たちは」かすれるような声で魔女が言った。

「悪事もここまでよ」クロネが言った。

「小娘がなにを言う」魔女が笑った。

「小娘だけじゃないさ」アルが言った。

「いくら古の魔女でも、四人も相手じゃきついんじゃない。特にその老体じゃ」とリア。

「そう思うかい？」魔女が愉快そうに言い、グラス・オニオンを拾い上げた。「では試してみるとしようかの！」

魔女が両手を広げると、家が揺れはじめた。立ってられないほどの揺れではなかったが、家の壁が傾くほどだったので、倒壊しやしないかと心配になるほどだった。

家全体が軋んだ。なにかに締めつけられているようだ。

壁と床の一部が粉碎した。茨が粉碎穴から突き出し、たちまちに壁と天井を埋め尽くした。

魔女の背後から茨がのび、魔女の両腕に巻きついた。巨大な薔薇が花卉を開き、魔女を中心に取り込んだ。

「ローゼスタス（脅威の薔薇）の名は伊達じゃないんだよ」

魔女が言うと、あらゆる壁や床から茨がのび、四人を襲った。

マコは一葉の剣で対応し、動く茨の蔓を片っ端から斬った。

リアは自分に襲いかかる蔓だけに集中し、炎を纏った拳で半ば叩き落とすようにして攻撃を防いだ。

クロネもなんとか電流で焼き切って対応していたが、一度に一、二本の蔓を相手にするのがやっとで、何本かを避けながらやる必要があった。その足取りはおぼつかず、いつか転んでしまわないかとマコが心配になるほどだった。

その心配が現実になった。

クロネは足もとを狙って打ちつけてくる蔓をジャンプで避けると、そのまま転倒してしまったのだ。

蔓はそれを好機とし、すかさず起きあがろうとするクロネに襲いかかった。

「ちよつと、こんな時に転ばなくてもいいじゃないの！」リアが言った。

マコが一葉の剣から風を放ち、クロネに襲いかかる蔓を斬り落とした。

アルがクロネを引っ張って立たせると、ローゼスタスから遠ざかるように部屋の隅へいどうした。

だが茨の再生能力は驚異的で、たちどころに新たな蔓を形成すると、アルとクロネに襲いかかった。

「背後が危ないわよ！」

リアはこちらに近づいてくるアルとクロネの背後に飛び出すと、自らを盾として差し出した。

茨は相手が誰だろうとおかまいなしの様子で、近くに歩み出たリアに目標を切り替えると、のたうつ体を手当り次第にリアにぶつけた。

茨はどんどんとリアの体を取り囲み、やがて球体となった。ひしめき合う蔓がぎりぎりとなげな音をたてた。そのままリアを圧力によって押しつぶそうというのだ。

「くそ、リアが！」振り返ったアルが叫んだ。

「ボクが！」

マコは一葉の剣を振りあげた。

球体が膨らんだ。

まるで空気を入れられた風船が中から膨張するように、ゆっくりと茨の玉は大きく成長した。その膨張に耐えきれなくなった玉は爆発した。

文字通り、炎をあげて爆発したのである。

中からリアが握りこぶしをつくった両手を広げた姿で現れた。

「だーっ！ まったく次から次へとキリがないわ！」

「リア、ごめんなさいわたくしが――」

「謝罪の暇があったら、自分の身を守ってなさい。茨は攻撃の手を休めてくれそうにないわよ」

たったいまりアによって盛大に吹き飛ばされたばかりというのに、茨はまだ元気いっぱいだった。それどころかその勢いは増しているようにさえ見える。

「どうする？ これじゃキリがないよ」マコが言った。

「なに、本体を叩けばいいのさ」アルが言った。

「できるの？」とリア。

「任せておけ。援護は頼む」

アルは薔薇の花と化したローゼスタスに向かって走りだした。

無数の蔓がアルに向かって迫り来る。

「無駄だよ。わしに近づけやしないんだよ」ローゼスタスの声が響いた。

マコがアルの右側をクロネがその左側を担当し、迫り来る蔓を風で断ち切ったり、電流で焼き切ったりした。

アルは蔓の一部に触れ、巨大な刺が右肩を切ろうが、速度を落とすことなく突っ込んだ。

予想外の接近に、魔女は防御措置に入った。蔓が魔女の前に集結し、ひしめき合って壁をつくったのだ。

だがアルはその行動をあらかじめ予測していたようで、うろたえることなく次の行動に移った。茨の壁の前まで来ると、腰から木製の短剣を抜き、茨の強固なまでに閉ざされた隙間にむりやり押し入れた。

断末魔のような叫び声が聞こえた。魔女の苦しみに反応するかのように部屋全体を被う茨が激しく震えた。震えながら、みるみるうちに小さくなり、奥へと引っ込んだ。

魔女はそこにいた。茨の壁が消え去ると、何本もの細い蔓に巻きつかれた老女の姿があった。蔓はアルの短剣からのび、魔女の体にまきつき、先端は魔女のほとんど削げ落ちたようにみえる肉に深く差し込まれていた。その傷口からは血が滴り落ちていた。

魔女の目が驚愕に見開かれ、視線をアルに注いでいる。

「若造が――」

蔓がアルの木製の短剣へと戻り、魔女は床に崩れ落ちた。

魔女の手から離れたグラス・オニオンをアルが蹴飛ばし、玉は部屋の手元へと転がって行った。

「お前は死ぬ」アルが言った。

「遠慮のない一言だね」魔女は笑った。「わかっておるわい。自分の最期くらい」

「アーシャスタシアスという人物に心当たりは？ なにか知っていたら教えて」クロネが唐突に魔女に向かって質問をした。いつの間にか魔女の近くにまで移動している。

マコはその人物の名を以前に聞いたことがあった。クロネの母親の名前だ。

「アーシャスタシアス……？」ローゼスタスが一語一語を絞り出しているのがわかった。死期が近いのだ。ものすごくそばまでやって来ている。

「ええ、魔女なの。知っていたらなにか――」

「知らんな。だがその名前は魔女の――」言い終える間もなく、魔女は死んだ。

帰宅

ジョンはやつと立ち上がると、いままさに起こったことに目をしばたかせてから、リルネのもとに歩み寄った。

四人の来訪者がヴァイオレーターを追い払ったという噂を聞いてはいたが、いままではにわかに信じ難かった。だが目の前で魔女を倒した事実を無視しなければ、その噂を否定することはできないだろう。

「彼女、大丈夫なのか？」ジョンは心配そうに言った。

「ええ、大丈夫よ。気を失っているだけ」クロネが答えた。「でも少し精神に負担がかかっているから、しばらくは目覚めないと思うわ」クロネはリルネからオオカミに視線を移した。青いオオカミの腹が呼吸に合わせて上下していた。

「この子、生きているけど、どうしたのかしら？」クロネが首をかしげた。

「それよりもロイはどこよ？」リアが言った。「アンタたちと一緒に来たんじゃないの？」

「そいつだよ」ジョンがオオカミを顎で示して言った。「魔女の魔法で人間に化けてたんだ。なぜ怪我をしているのかは、俺は知らないけど」

それからジョンは大まかに経緯を説明した。魔女によって催眠をかけられたこと。魔女がリルネを狙っていたこと。そして、その体を手に入れることが目的であったことをマコたちに説明した。

説明が終わるころには、リルネは目覚めていた。

「気分はどうだい？」ジョンがやさしく訊いた。

「あたし――」リルネは困惑しているようだった。

「思い出せないのかい？」

彼女が首を横に振ると、ジョンは安心した。

「全部覚えてるわ。ごめんなさい。あたし……ロイのことはあなたが警告してくれていたはずなのに」

「いいんだ。それより歩けるかい？」

リルネは答える代りに自分の力で立ち上がった。ジョンはそのままりルネが倒れるのではないかと心配になり、手で支えようとしたがその必要はなかった。

「まるで眠っていたみたい」

「よかった」ジョンは安堵のため息をついた。それからマコたちに礼を言った。

「ホント、クロネが見かけなかったらいま頃どうなってたかわからなかったわね」リアが言った。

「それよりも、なんか音がしないか？」アルが言った。

「そういえば、さっきからミシミシいつてるな」ジョンが答えた。

「嫌な予感がするわ」リルネが身震いした。

「ねえ、これって、家が崩れるんじゃない？」

マコの言葉に反応するかのように軋むような音が大きく激しくなった。

「やばいな」とアル。

音が振動を伴い始めた。それをスタートの合図に六人は外に向かって走りだした。

アルは一度、逆の方向に向かうと、オオカミを抱きかかえて皆を追った。

彼が外に飛び出した瞬間に、家を大きな音をたてて崩れ落ちた。

古の魔女が死んだことにリルネはまだ確信が持てないでいた。なにせ魔女は千年もの間、街の脅威となっていたのだ。その脅威はほとんど習慣となり、伝統とすらなりかねないものだった。

それが外からやって来た四人によって、あっさりと取り除かれてしまったのだ。

その静けさがなにかの前兆になっているような気がしてならなか

った。

ひとまずは自分の無事を感謝することにした。

街へ戻るまでの道中、ジョンが説明してくれた。

魔女が若さを手に入れるために自分の体を狙っていたのだと思うぞ、背筋が凍る思いがした。それに魔女の欲望を叶える玉とは恐ろしい代物もあったものだ。

「そういえば、その玉は？」リルネが質問した。

「魔女の家の下に埋もれているよ」アルが答えた。

「そんなあんな危険な物、放っておけないわ」リルネはすぐにも戻ろうと提案した。

「とんでもない」アルが反論した。「君を無事に送り届けることが先さ。魔女の企みは阻止されたとはいえ、君の魂はほとんど君の体から出かかっていたんだよ。その玉は明るくなってから探しても遅くはないさ」

「そうね」リルネはしぶしぶ了承した。とにかく眠たかったのだ。シエラの街に辿り着くと、ジョンとリルネは四人の恩人たちと別れに告げた。

フレッド・フリーガン

人はそれぞれの役割を持ってこの世に生を受ける。それが母親の口癖であったし、それを見つけることがフレッド・フリーガンの人生の目標でもあった。

彼はいま、他の騎士たちと同じように大きなテントの簡易ベッドに横になり、天井部分を見つめていた。王都での会議が終わり、一行は帰路一日目の野営を荒野のど真ん中に構えていた。

他の騎士たちは眠りにつき何人かは寝息をたてていたが、フレッドは眠れないでいた。

それはさつきまどろみの中で見た夢のせいなのかもしれない。不吉な夢だった。蛇に関する夢。フレッドは蛇が嫌いだったが、それが夢を不吉にさせているわけではなかった。その夢野中で蛇がある物を飲みこむ夢だったからだ。蛇が飲みこんだ物。それは真っ赤に燃えるバラだった。シエラ騎士団の象徴でもあるアシユタのバラ。それが飲みこまれるとは不吉な夢じゃないか。なぜなら蛇は死を意味するからだ。

フレッドはベッドの上でむくりと起き上がりながら、バラが何を意味するかを考えた。バラは騎士団の象徴であるが、騎士団の象徴はウィリアム団長ではなからうか。

これがお告げとするならば、とフレッドは思った。俺はこの夢が意味するところを実行しなければならない。それが役目というものだろう。もしこれが、お告げとするなら。

ゆっくりと不気味な感覚が背中を這い上った。それは悪い予感というにはあまりにもはつきりとしていた。確信に近いものがある。

背中に無数の虫が入りこみ、皮膚の下を這いずりまわっているような感覚にいてもたってもいられなくなったフレッドは、おもむろに立ち上がり、テントを出た。まっすぐ中央にある一番豪華なテン

トへ向かう。この時、見回りをしていたラドスに目撃されるが気がつかない。

テントの中ではウィリアムが寝息をたてていた。白いシーツの上を一匹の黒い蛇が這っている。それは夢で見たのと同じ真っ黒で目の赤い蛇だった。チロチロと舌を出しながらウィリアムの頭の方へ移動している。彼は剣を構えた。

ラドスが剣を持ってウィリアムのテントに突入して来てもフレッドは気づかない。運悪く彼の体の影に隠れていて、ラドスの位置からでは蛇は見えなかった。

「フレッド、やめるんだ！」

彼が剣を振る瞬間にラドスは叫んだ。が、フレッドの耳には届かない。フレッドの剣が蛇の喉もとを斬り裂き、ラドスの剣が背後からフレッドの胸を貫いた。

ウィリアムは飛び起きるように目覚め、剣を手にしたが、それを使うことなく困惑した。ひとりの男が胸を貫かれており、体の上に黒い蛇が血を流してのたうちまわっている。やがて蛇はみるみるうちに短剣へと変化した。

フレッドは薄れゆく意識の中で満足そうな笑みを浮かべていた。自分は死ぬが、団長を守ったのだ。それが自分の役割だとわかれれば、何を悲観に暮れる必要がある？

世の中には自分の役割すら知らずに死んでいく人間の方がより多くいるというのに。

影

ジョンとリルネと別れたあと、マコたちはキンバリー邸へと向かった。四人は意気揚々としていた。すでに太陽は昇りはじめていた。魔女の脅威が去ったことをマコはキンバリーに伝えようと思っていた。彼のよろこぶ顔が見られるのなら、それだけでうれしい。だがまったく逆の対応が待っているなど、四人は知る由もなかった。街の脅威を取り払って来た人間があらぬ容疑で街の脅威になるなど、誰が思うだろうか。

豪邸の前には多くの人間がいた。そのほとんどが騎士団であり、武器を手に行っている。何事かと近づく、四人に向けられた視線は驚くほど鋭かった。

騎士たちは無言のままマコたちを取り囲んだ。四人は肩を押さえられて見動きが取れない状態になってしまった。

「何なのよ？」リアが吠えた。

「お前たちを逮捕する」騎士のひとりが言った。

「おいおいおい、俺たちや何もしてないぜ。それどころか、魔女を倒して来てやったんだぜ」

アルの言葉に男たちは顔を見合わせた。

「やっぱりな」帽子を被った年老いた男が言った。彼は武器を持っていない。「邪魔者の魔女がいなくなれば、この街はお前たちのものにできるというわけだな」

「街を乗っ取るだなんて、僕たちが考えるわけじゃないじゃない」マコが身をよじらせながら言ったが、肩をしっかりと押さえこまれているため、痛みに顔をしかめた。

「だったらなんでキンバリーさんとエド副団長を殺したんだ？」前に歩み寄って言ったのはダニーだった。怒りで炎のように瞳が揺れている。

「そんな。僕たちは殺してないよ。だいたいずっと街の外に出てたし」マコは自分たちが容疑をかけられていることよりもキンバリーが殺されたという事実に驚き、傷ついた。

「ふたりを殺してから魔女を殺しに行くのだってできる」

人ごみを掻き分けて現れたのはヴァルマーだった。この街で大きな顔をしている魔導士団の筆頭だ。彼が手にしている物を見て四人は凍りついた。

「この凶器が何よりの証拠だ。お前たちがキンバリー氏から譲り受けた物ではないのか？」ヴァルマーは勝ち誇ったような笑みを浮かべて、そのナイフをちらちらと振った。クロネがキンバリーから受け取ったナイフだ。

「それは……お祭りの会場で盗まれた物だわ。誰かがそれを使って――」

「おっと、言い訳はあとでたつぷりと聞いてやる」

ヴァルマーはマコの前に来ると、一葉の剣に手をのばした。

「何をするんだ？」マコが吠えた。

「犯罪者に武器を持たせておくわけにもいかんだろう。これは預かっておくぞ。マコルデイス・クイーデル王子」

ヴァルマーは一葉の剣を取り上げると、満足そうに一度それを眺めた。この時点でマコにはヴァルマーの狙いが一葉の剣だった事を悟った。そして長官と騎士団の副団長を殺したのもヴァルマーであろうことも。その計画は元々のものだったかもしれない。だが、自分たちを犯人に仕立て上げたのは、自分たちから疑いの視線を回避する目的もあったのだろうが、剣のためだったのだ。その推察はヴァルマーが剣に向ける恍惚な表情と、自分に向ける狡猾なしてやりたり顔から確実なものとなった。

「よし、連行しろ！」

四人は抵抗した。なんとか振りほどこうとしたが、複数の人間にしっかりとつかまれて、見動きすらままならなかった。

「待ってくれ、俺たちは――」アルが言ったが、ダニーにびしゃり

と止められた。

「言い訳は見苦しいよ。君たちを良い奴らだと少しでも思った、俺が恥ずかしい」

四人は抵抗もできないまま、連れて行かれた。

ウィリアム率いるシエラ自生騎士団は街に向かって行進してした。最後列には丁寧に寝かされたフレッドの遺体があった。

馬を速足で進める団長の隣にラドスが馬を着けた。

「気にするなどは言わないが――」ウィリアムは言った。「お前は自分の仕事をしたんだ。これは不幸な事故だった」

「彼が正しいことをしたんですよ」ラドスが返した。「自分は間違いを犯した」

「そういう考えは、自分を辛くするだけだぞ」

ラドスは了解したと言うようにうなずいた。納得はしていないようだった。

「あのナイフには毒が塗られていました。致死性のものです」ラドスは自分がすべき報告をした。

「そうか。彼には感謝しないといけないな。それだけでは足りないが」ウィリアムは後方を見やった。

「それと、もうひとつ気になることが……」

「なんだ？」

「ダラスなんですが――彼が昨晚腕を怪我したそうなんです。彼と見回りを交代した時にはなかった傷なんです、たしか傷を負った場所には刺青があったと思います」

「どんなだ？」

「赤目の蛇」

ウィリアムは背筋が凍るのを感じた。赤い目をした蛇が自分の上で悶え苦しみ、ナイフに変貌する光景を思い出していた。

「この件と関係があると思うか？」

ラドスのかぶりを振った。

「わかりません。ですが、偶然とは思えません」

ウィリアムはうむ、とうなずいた。

「キャーラン！」

団長が呼ばわると列の後方からキャーランがやって来た。

「なんででしょうか？」

「お前が先頭を行け。すぐに戻って来る」ウィリアムは自分の馬を列から離れさせた。

「来い、ラドス。事情を聞こう」

ダラスは列の中間ぐらいにいた。体つきの大きな男で、ウィリアムがやって来ると頭を下げて挨拶した。

「そのまま移動しながらいい。その腕はどうした？」

ウィリアムが訊くとダラスは明らかに動揺した。この時点でウィリアムほぼ確信した。

「ええ、これは自分でやっちゃまいやして……情けない話です」

「ちょっと包帯を取って見せてくれないか？」ウィリアムは言った。

「そんな大した怪我じゃないですよ」

「いいから、見せるんだ」

「あまり面白いもんじゃないっすよ？」

ウィリアムはじつと相手の目を見つめた。しばらくラドスはだまつて見つめかえていたが、やがて折れた。

「わかりました」彼が包帯を取ると、問題の刺青はあった。赤目の黒蛇のタトゥーがあり、その蛇の首を一本の切り傷が走っていた。

「昨日の夜、フレッドが団長を毒牙にかけようとしている黒蛇の首を斬った。その蛇はたちまちナイフに姿を変えたよ。そのナイフには毒が塗られていた」ラドスが言った。その声が怒りに震えているのをウィリアムは聞いた。いまにもダラスに飛びかかるのではないかと心配になるほどだ。

「それと、この怪我と関係があると言いたいのか？」

「それはお前がよく知っているはずだ」

「なあ、俺はあんたと交代したあとまっすぐテントに戻ったんだ。」

それをあんたも見ていたよなあ。団長。信じてください。俺は犯人じゃありませんよ、絶対に」ダラスはラドスに、その次にウィリアムに言った。必至の言い訳に聞こえる。

「だったらどうしてお前のペンダントが、団長のベッドの足もとに落ちてたんだ」

ラドスが言うのとダラスの顔が青ざめた。

「そんな。あれは俺のテントに置いてったはずだ！」そう言って、胸もとをまさぐる。そこにはしっかりとペンダントがぶら下がっていた。ダラスの口が驚愕に開かれる。

「残念だよ」ウィリアムは首を横に振って言った。「なぜなんだ？なぜこんなことを――」

開き直ったのかやけくそなのか、ダラスは大声で笑った。

「てめえは生き残って安心かもしれないが、何もかも終わりだよ！」「なんだと！」ラドスは剣を抜いた。

「終わりだ、終わりだああ！　すべてはヴァルマー様のものになる！」

ふたりを驚かせる人物の名前があたり、そしてさらにダラスは恐るべき計画を口にした。

ヴァイオレーター Part. II

ヴァルマーは怒声や罵声の中を歓喜の表情で立っていた。チロシンとイソロシンがヴァルマーのうしろで無表情に立っている。彼らの足もとには祭りで使われた仮設の舞台があり、その舞台の周りを殺気立つ民衆が取り囲んでいる。中央広場は怒りに満ちた顔で埋め尽くされ、「やつらを殺せ！」などの叫び声が交差していた。夜になり、ヴァルマーが呼びつけた大衆が集まって来たのだ。ヴァルマーがここで外からやって来た犯罪者の対応をどうするのか決めると言ったからだ。

これこそ俺の求めたものだ。街の指導者ようになったヴァルマーは満足気な表情で思った。いまこの場を支配しているのはやり場のない怒りだった。愛すべきキンバリー長官が殺されたのだから、民衆は憎悪に満ちている。そしてその憎悪が混乱を招いていた。混乱。それを引き起こす事こそが支配だとヴァルマーは信じていた。

なぜならば混乱は思考を鈍らし、その思考はある一定の方向にしか流れることができないからだ。混乱こそ民衆を最も御し安くするためのエッセンスなのである。

「昨夜、この街の愛すべき存在であるキンバリー長官が殺された！そして街の守護神でもある騎士団の副団長までも！」ヴァルマーは声を張り上げた。群衆はいくらか声を落とし、彼の言葉に耳を傾けようとした。

「それも外からやって来た正体もわからぬ旅の者に！それは許されざることだ！そしてやつらは街から手厚い歓迎を受けていたにも関わらず、それを実行した。これは明らかな裏切り行為でもある！」

同意の声が方々であがった。

「お前たちはそう思っている」ヴァルマーは急に口調を変え、非常

に短くきっぱりと言った。群衆の顔に驚きと混乱の入り混じった表情が浮かび、彼は満足そうにそれを見渡した。ヴァルマーは両手を広げた。

「だが、キンバリー長官を殺したのは俺たちだ！ 喉を？っ捌いてやったぞ！」

ふたたびざわめきが起こった。声は怒りに満ちていたが、こんどはヴァルマーに向けていた。いまにも爆発しそうな衝動を抑えている。いまにも舞台へよじ登って来そうな勢いだ。

混乱だ。ヴァルマーは思った。それこそおれの支配なのだ。混乱による人間の行動支配。それは暴動や争い以外のなにものでもない。それこそおれの求めるものなのだ。

群衆はじっさいに動きだした。何人かは舞台によじ登りはじめ、その眼光はヴァルマーに向けている。だが、ヴァルマーは両手を広げたまま、動こうとはしない。

イソロシンも沈黙と静止を保っている。キンバリーとエドをその手に掛けたように闇に溶けこんでいたが、群衆を襲うことはなかった。さらなる混乱を生むために大衆の殺戮は必須だとヴァルマーは考えていた。だがそれには適役がいる。だから大衆の一部が目の前にまで迫って来ても、舞台上の三人は身じろぎひとつしなかった。

叫び声があがった。甲高い、悲鳴のような声。空気を切り裂き、大衆の耳を痛めつける。全員の動きが止まる。みな同じ方向を見ている。彼らの目線の先、ヴァルマーたちの後方にある上空に空間の歪が生じていた。ゆらゆらうごめく透明な球体の周りを細い電流が幾筋も流れている。そこから巨大なヴァイオレーターが姿を現した。こちらにやって来る。ドラゴンの姿をしたそれは、まさに街を三度も襲ったヴァイオレーターだった。首筋にある一本の傷と胸にある十字の傷、それに無惨な姿になった下顎がそう彼らにそう告げていた。

ヴァイオレーターはゆっくりと羽ばたきながらヴァルマーのすぐ隣に降り立った。苛立つような目を大衆に向け、息を荒げていたが、

ヴァルマーを攻撃する様子は見せない。それどころか、彼が手を差し出すと、頭を垂れ、愛撫されるのに従った。

ヴァイオレーターがヴァルマーに手懷けられているのは明らかだった。ヴァイオレーターが上空に向かって一声、吠えた。大衆は向きを変え、一斉に逃げだした。

そこを支配していたのはまさに恐怖だ。そしてそれが引き起こす混乱だった。

地下室にある檻の中は四人が過ごすには快適とはいえない広さだった。それに隣の独房にはふたりの粗暴な男たちがいる。明かりは檻の外にある監守用机の上にある松明の光だけで薄暗く、無防備にも看守はそこで居眠りをしていた。マコは壁際にじっと座り、アルはその近くの壁にもたれて顎を胸にうずめていた。クロネは悲しげな視線を落として床に座り、リアはじっとしていられずにそわそわと独房の中を歩き回っていた。

「あー、もう！　どうしてアタシたちが犯人なのよ！」リアは怒りをあらわに言った。「アタシたちが長官を殺すわけじゃないじゃない！」この声に看守は目を覚ました。リアは独房の端まで行くと、また折り返して戻って来た。狭いこの空間ではそれに費やされた時間はごくわずかだった。

「ハメられたんだよ、俺たちは」アルが言った。「長官殺しの汚名を着せられたんだ」彼はうつむいたまま物静かに言い、しばらく押し黙った。それからふたたび口を開いた。「やつらの目的はわからないが……」

牢屋の格子から風が吹きこみ、松明の炎を揺らした。

「わたくしが、あの人を殺すはずがないのに……」クロネはじっと冷たい床に目線を落としたまま、いまにも消え入りそうな声でつぶやいた。ふたたび風が吹きこんだ。

「何か聞こえない？」格子から侵入してくる風に交じってざわめきのような声がするのを、かすかだがマコは聞いていた。「なんだろ

う……これは、悲鳴？」

アルにも聞こえた。確かに悲鳴のまじった声だ。それから何かが発するような音が聞こえた。

「何かの騒ぎみたいね。暴動かしら。ああ、怒れる民衆が長官殺しを犯したと思っているアタシたちを殺しに来たんだわ！」リアは悲観するような声で嘆いた。

「違うと思う」マコがきっぱりと言う。

「暴動にしては悲鳴が多いような……」アルは格子から外を覗こうと首をのびた。

「へへへ」隣の檻にいるひとりが笑った。

「ヴァルマー様さ」もうひとりのチビの男が言った。「長官どもを殺して、街を乗っ取る計画だったのさ」

「あなたたちが長官を殺したのね！」クロネが言った。

「俺たちじゃねえよ。そんな時にはずっとここに閉じこめられてたんだからよ」背の高い方が言った。「実行したのは大方イソロシンってやつだ。あいつは暗殺担当だからな」

その時、鉄の扉が開かれる音がした。この独房と繋がっている重々しい扉だ。四人は身構えながら、扉へと続く通路に体を向けた。ぴりぴりとした緊張が走る。外から聞こえる騒がしい音が大きくなっている。

彼らは緊張を解いた。そうする必要がないとわかったからだ。通路から出てきたのはジョン・クラウドだった。そのうしろからリルネリア・ボーンズがふらふらとやって来た。

「どうしたんだ？」看守が言った。彼はジョンが剣を手に行っているのを目にして、怯えた。

「この人たちを外に出す。邪魔しないでくれ」ジョンは言った。

「バカ言うなよ。できるわけじゃないじゃないか」看守は剣を構えたが、その手は震え、目は泳いでいた。

「だったら力づくで！」

ジョンが一步前に踏みだすと、看守は情けない悲鳴をあげて剣を

下に落とした。両手は頭上高くあげられている。

「わかったよ。殺さないでくれ！」

「鍵を渡せ」ジョンが言うと、看守は鍵を彼に渡した。手がいまにも震えていたため、鍵の束がぶつかり合って、かちゃかちゃとやかましく鳴った。

看守は警戒しながら、ジョンの横を通り過ぎると、そそくさと地上へと続く階段を駆け登って行った。

「いったい外はどうなってるのよ？」リアが独房の檻を両手でつかみ、その隙間に顔を押しつけて言った。まるでそうすれば外へ出られると思っているようだ。

「ヴァルマーだよ！ 長官の殺害を告白したんだ。それにあいっだよ、ヴァイオレーターを操ってたんだ！」

ジョンは興奮を抑えつつ、乱れた呼吸を取り戻した。そして手にしていた鍵の束を確認した。

「とにかく、街はパニック状態だ」

彼の言葉に呼応するかのようになりでリルネが短い悲鳴をあげた。「ジョン、早く開けなさい！」リアが急かした。

騎士団のフィッチャー・ジョアンが携帯する剣を片手にゆっくりと近づいて来ていた。薄暗い部屋の中で、松明の光が剣に反射して鋭い眼光のようにぎらりと光った。剣はゆっくりと振り上げられ、その刃はリルネに襲いかかるうとしている。

ジョンはリルネの首根っこを引っ張って彼女を引き寄せた。間一髪のところではフィッチャーの剣がリルネのいた空間を切り裂いた。ジョンはリルネの前に出ると、剣を構えた。フィッチャーがまだ攻撃の手を緩めようとしなからだ。

ふたりの剣が交わった。

「そいつらを逃げさせるわけにはいかないな」フィッチャーが言った。

「フィッチャー、違うんだ！ キンバリー長官とエド副隊長を殺したのはヴァルマーなんだ」ジョンは旧知の友人に訴えかけた。

「知ってるさ」その言葉は非常に恐ろしいものだった。

「だったら、なんで？」

「それに、長官殺害計画のことも、お前が思っているよりずっと昔から知っていた」

その言葉が意味する事実はひとつだ。あのヴァルマーという魔導士がフィツチャーを仲間に取り入れたということになる。他の人間が仲間に取りこまれた可能性は大いに有り得る。それどころか確実に近かった。はたして何人の人間が彼の手中に落ちているのだろうか。裏切り者は何人いる？

だがそれを考えている暇はなかった。この混乱を治めるには牢獄に入れられている四人の力が必要だったし、目の前の裏切り者はそれをさせてくれそうにないからだ。フィツチャーは剣を左右に振りながら、ジョンに猛攻をしかけている。彼も剣を振り振りそれに対応するのがやっとだ。ましてや攻撃を防ぎながら鍵を開けるのは無理だ。

「リルネ！」

ジョンは鍵を放り投げるなり、剣を両手に持ちかえて反撃に移った。甲高い剣のぶつかり合う音が響く。その隙にリルネは檻の鍵を開けた。

四人は滑るようにして出ると、ジョンに応戦しようとした。

「みんなは先に行ってヴァルマーを倒してくれ。リルネも、彼らとともに行って安全な場所へ避難するんだ」

「ひとりで大丈夫か？」アルが心配そうに尋ねた。

「大丈夫さ」ジョンは答えた。

「それはどうかな？」フィツチャーは薄ら笑いを浮かべている。

「ジョン！」リルネが心配そうに叫んだ。

「行ってくれ！」ジョンはフィツチャーの一振りを防ぎながら言った。

リルネは心配そうにしていたが、リアに引きずられて通路の向こうに連れて行かれた。ジョンはそれを見届けるとフィツチャーの剣

を弾いた。フィッチャーはその衝撃を利用して間合いを取ると、助走をつけてジョンに斬りかかった。その攻撃を受け止めるジョンの腕が痺れた。

フィッチャーはニヤリと笑った。

「お前じゃおれに勝てないぞ」

初めての殺人

通路を通る間も階段を上がる間も、小さな部屋から外へ出る時も、リルネはリアの腕をふりほどこうと暴れた。しきりにジョンの名前を呼び、牢獄の部屋へと戻ろうとした。

「アンタに何ができるのよ」リアが言った。

「でも……」

「彼を信じて」マコがリルネの隣に歩みよった。「彼の剣の腕は父親ゆずりなんでしょ、その心も？ 彼は街を守るといふ思いをぼくたちに託すために、あそこに残って戦ったんだ。それに彼は君も守りたいと思っている。その気持ちに応えるために、君は無事でいることが必要なんだよ」

マコは自分の思いがリルネに伝わるかどうか不安だったが、彼の言葉はその効果を発揮したようだ。少女は小さくうなずくと、一度だけ牢屋へとつながる小さな建物を見た。

「わかったわ。行きましよう」

フィッチャーとの勝負の決着は呆気なく終わった。もちろんこの狭い空間で激しい戦いとなったが、その幕切れは一瞬のうちに終わった。

フィッチャーと彼は剣での攻防戦を繰り返した。どちらかが剣を振りまわして攻撃し、その間もう一方が剣で攻撃を防ぐといった具合だ。

ジョンは汗をかいていた。激しい戦いで息は切れ切れ、余裕もない状態だった。フィッチャーの方はいうと、さっきから不気味な薄ら笑いを浮かべている。

「おいおい、俺たちは逃がしてはくれないのか？」マコたちがいた檻の隣にいるモーシャが言った。その言葉とは裏腹に彼はニヤつい

ている。

「ここで、この戦いを見学したほうが面白くないか？」クルーデが言った。

「それもそうだ」モーシャが同意した。

このふたりのやりとりをジョンとフィッチャーは無視していた。お互いに剣を構えて、睨み合っている。

「お前にはおれに勝てない理由がある」フィッチャーは公言した。いまはふたりの間には距離ができている。だがジョンは剣の構えを崩さない。両手で柄を握ったまま、剣を前に突き出して相手の攻撃に備えている。フィッチャーは剣を片手で乱雑に持ち、空いた左手はあまつさえ上空を漂っているようだ。

「すばらしい力さ！」フィッチャーは言った。「俺にはそいつがある」

「あんたは狂ってるよ」ジョンは乱れる息をやつとの思いで抑えながら言った。「目的はわからないけど、あいつらにこの街で好き勝手やらされて。その上、仲間にまでなって」

「目的……か」フィッチャーはほとんど陶醉しきった目をあちこちに漂わせた。「それはおそらく――そうだ、すべてを意のままに操ることだ。世界を、人を。あの方は、ヴァルマー様はそのためにここを拠点にと選んだのさ」

「つまりあんたはこの街を売ったんだ」ジョンは責めるように言った。

「こんな街に売る価値もないけどね。ヴァルマー様にそれを見出してもらえて、さぞうれしいだろう」

「下衆が……」

「言ってる。そのおかげでおれは高みへと飛び立ち、お前はここで死ぬんだ」

フィッチャーは剣を左手に持ち替え、手首が見えるように右手を差し出した。手首には黒色で邪悪で剣呑な鍵のような形の刺青が彫られてあった。その刺青がまるで自己主張をするように黒々と光り

輝いた。

「見ろよ、感じるか、この力が」フィッチャーは口もとをゆるませた。

ジョンは感じていた。それは悪しき力だとジョンは思った。その陰險な感覚は彼の肌に触れ、目に見えないほどの小さな針で全身を突き刺さした。そう思っていると、フィッチャーの刺青から黒い炎があふれ出し、彼の右手を覆うのを目にした。

「くくく……ヴァルマー様から授かった秘術だ。この黒き焦炎によって焼け死ね！」

フィッチャーは手のひらを上に向け、そこに黒い炎を躍らせた。かと思うとその手を突き出し、すぐさま炎は激しさを増し、大きく成長した。

「だがその前に、お前は恐怖を味わう必要がある」

フィッチャーは手を横に振り、クルーデとモーシャに向かって炎を飛ばした。炎は格子の間を通過して、ふたりの体に付着した。炎はまるでふたりの体に灯油を染みこませていたかのように、瞬く間に全身に燃え広がった。苦しみ叫ぶふたりを容赦なく炎は焼き尽くした。

やがてバーベキューになった死体ができあがった。

「くくく……お前もこうなるんだ！」

フィッチャーの刺青からふたたび炎が噴き出した。

ジョンは剣を体の前に突き出した。まるでそうすることで、炎を防げるかと思っているかのようなうだ。だが実際はどうしようもならないことも知っていた。

彼は覚悟していた。その炎に身を焼かれることを。炎に殺されれば、おそらくはただでは死ねないだろう。魂は地獄の業火のように永遠に焼かれることだろう。それほどの邪悪を炎に感じていたのだ。だが、炎は彼を殺すことも、彼の身を焦がすこともしなかった。代りに術者であるフィッチャーの身を包みこんでいた。フィッチャーのつんざくような叫び声が、耳に届く。まるで炎が地獄へと彼を

引きこみ、フィッチャーがそれを必死に拒んでいるようだ。

それが本当に正しかったのか、あとになってもジョンにはわからなかった。だが彼にはその行動が正しかったと思う必要があった。そうしなければ、途方もなく長い時間——あるいは永遠——を悪夢にさいなまれ続けなければならなかっただろう。

とにかくジョンは自分が思うような行動を取った。そして彼の波乱に満ちた人生で最初の殺人を犯すこととなる。

彼は炎に包まれ、おそらく前が見えていないであろうフィッチャーに向かった。そしてためらいがちに剣を振りあげると、肚を決め、フィッチャーに向かって一気に振りおろした。刃がフィッチャーの右肩から腹にかけて切り裂いた。血が噴出し、小さな赤い花びらを舞い上がらせながら、彼の体は崩れ落ちた。

かえり血が顎と首のあたりにかかったが、ジョンは気にしなかった。

孔門

街を覆う混乱は予想以上だった。逃げ惑う人々の流れに逆らって進んでいたマコたちは、あやうくぶつかりそうになることが何度かあった。

「みんな、気をつけて！」マコが叫んだ。彼は異様な空気を感じ取っていた。その空気はどこかに潜んでいる。マコは走りながらその気をさぐった。

「待って！」マコたちは立ち止った。他の者はマコに注意を注いでいる。

「どうした？」アルが訊いた。いまでは逃げて来る人の数は少なくなり、彼らの周りには巢から離れた蟻程度にしかいなかった。マコは答えず、じっと右手のほうの部屋がたくさんある四角い建物を見つめていた。

「気配がする。それもひとりじゃない」

アルは辺りをうかがった。視線を一点に集中し、目で見ず耳で聞かず、肌で感じようとした。リアもクロネもじっと集中した。リルネは呆気にとられた様子できよろきよと首を横に振って、なにがあるのか探した。

「いったい何が――」リルネが口を開いた瞬間、空気が震えた。じつさいに空気の震えなどというものは聞いたこともなかったが、この異様な感じをリルネは他の形容詞に言い換えることができなかった。

マコにはこの震えがなんだかわかっていた。だが同時に混乱もしていた。普段の魔力の震えではなかったからだ。もともと不規則なその揺れがさらに不安定で、いまにも爆発しそうなのだ。

それは一点に集中しているのがわかった。いや、二点と言うべきか。とにかく何者かがふたつの場所に魔法を発動させようとしている。

る。

「リア、左！」マコは叫びながら、魔力が集中する空間——二つの点だ——の右側に向かって手をかざした。

リアは言われたようにした。彼女は魔力の集中点の左側に拳を突き出した。

魔法は実態を現した。マコが狙ったほうには黒い炎が、リアに指示したほうにはこれまた黒い氷の刃がそれぞれ形成された。マコの手ひらから巨大な水の玉が発生し、炎とぶつかった。炎は水に包みこまれて蒸気を発しながら消えた。リアの拳からは炎の球体が発生し、氷の塊をその熱で溶かしてしまった。

リアにはふたつの魔法攻撃が来ることはわかっていたが、その実態を視覚で見るまでどういった攻撃かは予想がつかなかった。だがマコはそれを瞬時に判断してみせたのだ。これを才能と呼ばずして、何と呼ぶのだろうか。

「子供ばかりだからといって、あなどれんようだな」右手の建物の屋上に人影が現れた。

「奇襲は失敗だが、どのみちここから生きては通さん」その向かいの建物にも人影が出て来た。ふたりとも外套を着て、フードをまぶかに被っている。ふたりは同時に右手をあげた。するとまた不安定な空気の揺れが生じた。

「おっと、次はないぜ」アルが板の短剣を抜くと、それを掲げて左右に振った。

ふたりの男の足もとから木の蔓が生えた。蔓はふたりの足に巻きつく、そのまま足払いをしてふたりを落としてしまった。ひとりには鈍い音を、そしてもうひとりには首の骨の折れる嫌な音をさせて地面に落下した。

「なんだ？ 魔導士の終わり方じゃあないぞ、これは」アルは茫然として言った。ふたりの奇襲者は落下したことにより死亡してしまった。もし相手が魔導士ならば、容易く着地できたはずだ。それも無傷で、生きたまま。

だがふたりはあっさりと死んだ。

「それに黒い魔法なんて見たことがない。変だよ」マコが言った。

四人は使い終わったボロキレのように横たわる男の死体に近づいた。そのうしろをリルネが距離をとって死体を目にしないようにしながら着いて行った。

クロネは先頭に躍り出て、首が直角に曲がってしまった死体をまじまじと見つめた。開業医の娘に生まれたクロネは、幼いころから山ほどの怪我人や死体を見てきた。そのため、この程度の死体ならなんの不快感も感じずに観察することができた。彼女はおもむろに死体に手をのばした。

「ひっ、アンタよくそんなものに触れるわね」リアが目をそむけながら言った。

クロネは死体の右手首をつかむと、その内側がみなに見えるように持ち上げた。そこにジョンがフィッチャーの手首に見たものと同じ刺青があるのを四人は確認した。

「孔門だ」アルが言った。

「こうも――」クロネが繰り返し言おうとして慌てて口を閉じた。頬が紅潮する。

「そうだ、孔門だ」アルは続けた。「魔法を使えぬ者に無理やり魔力を放出する穴を開ける方法だ。この刺青事態が穴の役目を果たす」「ということは、この人たちは元々魔導士ではないってこと?」「マコが訊いた。

アルはうなずいた。「そうだ。これは魔法が使えない人間に無理やり魔法を使えるように施す、いわば邪道さ。それゆえに危険も大きい。たいていの場合魔法が暴走するのさ、自滅ってわけだ」

彼はわざとらしく顔をゆがめてみせた。そして続けた。
「運よく魔法が使えても、常に命が削られている状態にある。ま、長くは生きられないってわけだ」

「この人たちは知ってて、それをやってるわけ?」リアが刺青に目を向けながら言った。

「それはわからないが、ヴァルマーが人を道具のように扱っていることはわかるな」アルが言った。

「ひどい……」クロネが声を漏らした。

「ヴァルマー。許されるべき人間ではないよ」マコが言った。「倒さなきゃ」

「ええ。アタシたちが成敗しなきゃね」リアが拳を突き出した。

「そうだな。だがその前に――」アルは街の中心の方角を見やった。申し合わせたようにヴァイオレーターが雄たけびをあげ、白煙が昇った。

「あの暴れん坊をどうにかしないとな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7922z/>

マコと一葉の剣 グラス・オニオン

2012年1月9日20時46分発行